

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.050; Cover, contents, and others

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/1753

国立民族学博物館
調査報告

50

少数民族の文化と社会の動態

—東アジアからの視点—

横山廣子 編

国立民族学博物館 2004

Senri Ethnological Reports

The Senri Ethnological Reports are published by the National Museum of Ethnology, Osaka, as an irregular series. Volumes include the edited proceedings of conferences sponsored by the museum, and single-author monographs on anthropological and ethnological themes. For information about previous issues see back page and the museum website ('Research: publications', Internet, www.idc.minpaku.ac.jp).

For enquiries about the series and to obtain copies of this volume, please contact: Publications Office National Museum of Ethnology Senri Expo Park, Suita City, Osaka, JAPAN 565-8511 (fax +81 6 6878-7503, email: hensyu@idc.minpaku.ac.jp).

A limited number of free copies are available, for educational and research purposes. Copies may also be purchased from the Museum Bookshop (postal address as above, tel. +81 6 6876-3112, fax +81 6 6876-0875).

General editor

Makio Matsuzono

Associate editors

Yasuhiko Nagano
Katsumi Tamura
Yasuhiro Omori
Shuzo Ishimori
Tatsuhiko Fujii
Yoshio Sugimoto
Fumiko Oshikawa

国立民族学博物館 調査報告

50

少数民族の文化と社会の動態
東アジアからの視点

横山廣子 編

国立民族学博物館

2004

The National Museum of Ethnology
Senri Expo Park, Suita
Osaka 565-8511, Japan

©2004 by The National Museum of Ethnology
All rights reserved. Printed in Japan

Publication Data

The Dynamics of Culture and Society among
Ethnic Minorities in East Asia (Senri Ethnological Report 50)

Edited by H. Yokoyama

Includes bibliographical references

ISBN 4-901906-25-9 C3039

ISSN 0387-6004

1. East Asia. 2. Ethnic minorities. 3. Ethnic identity. 4. Culture change. 5. Social change. 6. Policy
I. Yokoyama, Hiroko

Book Design by B2 Design, Kyoto, Japan

Typeset by Ishida Taiseisha Co., Ltd.

目 次

序文	横山 廣子	
I. 民族意識の高揚と民族		
Some Considerations on China's Minorities in the 21st Century:		
Conflict or Conciliation?	Thomas Heberer 1	
Cultural Revitalization and Ethnic Identity of the Austronesian Peoples in Taiwan:		
1980 to 1995	Chiang Bien 33	
人類學家與原住民研究		
一些個人的經歷與反思	喬 健 47	
現代化過程中的少数民族文化	郝 時遠 57	
民族問題の解決に向けて		
トマス・ヘーベラー報告と郝時遠報告に対するコメント	佐々木 信彰 63	
アイデンティティの模索と人類学者の立場		
喬健報告に対するコメント	松澤 員子 67	
台湾原住民のアイデンティティ		
蔣斌 (Chiang Bien) 報告に対するコメント	野林 厚志 69	
II. 国家・社会・民族		
National Identity and Multi-Culturalism in China:		
Segmentary Hierarchy among Three Muslim Communities	Dru C. Gladney 75	
中国南部少数民族の直面する諸問題		
雲南の事例を中心に	松本 光太郎 105	
Learning to be Chinese: Minority Education and Ethnic Identity among Three Ethnic Groups in China		Mette Halskov Hansen 117
民族社会发展与民族文化变迁	金 炳镐 133	
現代におけるアイヌ民族自立運動に関する諸問題		
近代の同化政策から現在の新法制定論議まで	大塚 和義 137	

Ethnicity and Nationalism:

Comments on papers by Professor Matsumoto and Professor Gladney Jerry Eades 147

Mandarin among China's Minority Groups:

Comments on the Papers of Jin Binggao, Mette Hansen, and Shoji Hiroshi
..... Shaun Kingsley Malarney 151

III. 変動する社会と民族の諸相

Social and Economic Changes

among Highland Minorities of Caucasus Sergei Arutiunov 157

観光を中心とする経済発展と文化

雲南省大理盆地の場合 横山 廣子 181

鄂论春民族文化与现代化 洪 时荣 205

藏传佛教与西藏传统文化 江 平 213

民族文化の再構築と観光産業

横山報告とアルチュノフ報告に対するコメント 村上 勝彦 219

Extinction or Restoration of Ethnic Culture Compared with the Cases of Siberia:

Comments on the papers of Hong Shirong and Tsukada Shigeyuki
..... Natalia Zhukovskaia 223

IV. エスニシティと民族理論の探求

Social Reforms and Problems of Ethnicity Michael V. Kryukov 229

中国少数民族現代化基本問題探索 唐 屹 243

满族社会文化变革与民族的发展 果 洪升 269

中国周辺諸集団と現在の少数民族の歴史を理解するために

クリューコフ報告, 唐屹報告, 果洪昇報告に対するコメント 佐々木 史郎 273

総括 毛里 和子 279

大林 太良 283

各国語要旨

日本語要旨目次

日本語要旨..... 290

中国語要旨目次

中国語要旨..... 322

英語要旨目次

英語要旨..... 346

I. 民族意識の高揚と民族

少数民族の文化と社会の動態

—東アジアからの視点—

<論文要旨>

目 次

21世紀の中国少数民族に関する若干の考察 紛争か和解か.....	トマス・ヘーベラー	290
台湾のオーストロネシア系集団の文化再生と民族アイデンティティ 1980年から1995年まで.....	蔣 斌	290
人類学者と原住民研究 個人的な経歴と反省.....	喬 健	291
現代化の過程における少数民族文化.....	郝 時遠	292
中国におけるナショナル・アイデンティティと多文化主義 三つのムスリム少数民族間の分節的ヒエラルキー	ドゥルー・C・グラッドニー	293
中国南部少数民族の直面する諸問題 雲南の事例を中心に.....	松本 光太郎	294
中国人になることを学ぶ？ 中国の三つの少数民族における少数民族教育とエスニック・アイデンティティ	メッテ・ハルスコヴ・ハンセン	296
民族社会の発展と民族文化の変遷.....	金 炳鎬	297
現代におけるアイヌ民族自立運動に関する諸問題 近代の同化政策から現在の新法制定論議まで.....	大塚 和義	298
コーカサス高地少数民族における社会経済変化.....	セルゲイ・アルチュノフ	301
観光を中心とする経済発展と文化 雲南省大理盆地の場合.....	横山 廣子	303
オロチョン族の民族文化と現代化.....	洪 時榮	306
チベット仏教とチベット伝統文化.....	江 平	308
社会改革とエスニシティの諸問題.....	ミハイル・V・クリューコフ	311
中国少数民族の現代化における基本問題の探求.....	唐 屹	312
満族の社会・文化の変革と民族の発展.....	果 洪昇	316

21世紀の中国少数民族に関する若干の考察

紛争か和解か

トマス・ヘーベラー

世界的にここ十年間で民族対立が激増し、多民族国家内の政治的不安定の主要な原因の一つとなっている。政治、経済、文化、宗教、歴史などに関連した対立とともに、民族回帰も主な要因となっているのである。たとえば旧ソ連や東ヨーロッパにおいて見られたような歴史的経験、イデオロギーの評価、経済的・社会的変化ならびに民族回帰のプロセスの結果と影響などが、多民族国家である中国にも新たな民族的挑戦をもたらした。このことは、ソ連のような多民族国家の崩壊や隣接する中央アジアの民族主義の拡大とともに、国内の状況（自由化、開放政策、社会変化）とも関連している。

社会科学者達は長い間、経済発展と近代化によって、異なる社会間の宗教的、民族的、文化的違いが同質化されると信じてきた。近代化の進展の結果、民族間の差異が消滅するであろうと考えられていたのである。しかし、実際は逆に、民族回帰とエスニシティの高揚が起こった。これは中国でも同様で、この十年間にほとんどの民族においてエスニックアイデンティティとエスニシティが高まりを見せている。したがって、中国においては、長期的民族対立を防ぐために、対立を解消する新しいメカニズムが見いだされる必要がある。実際のところ、これが本報告の出発点である。考え得る対立のプロセスを挙げ、解決の方法を探ってみたい。

そこで、本稿では、3つの例を通して、中国の経済的・社会的変化のプロセスにおける対立の主要な要因を挙げてみたい：(1) 集団的記憶—中国における少数民族の公的イメージと異なる民族集団の歴史的評価および経験と、それらが今日の多数民族と少数民族との関係に及ぼす影響など、(2) 政治的問題—地域自治政策の欠陥やエスニシティの高揚、(3) 経済的問題—発展の格差、(4) 多数民族／少数民族の文化への評価などの文化的問題。最後に、本報告は、議論のために、民族対立の緩和に関するいくつかの提案を提出する。

台湾のオーストロネシア系集団の文化再生と 民族アイデンティティ

1980年から1995年まで

蔣 斌

1980年から1995年までの間、社会・政治的側面、文化的側面の双方において、一連の根本的な変化が台湾に見られた。この時期にはまた、オーストロネシア語族に属する言語を話す台湾島の原住民族の中にも民族及び文化の意識について新しい方向性が明らかになってきた。本稿の主要な目的は、過去15年の台湾原住民族運動において強調されてきたオーストロネシア系文化に特有な側面を検証することである。中国人の植民という脈絡のもとで、これらオーストロネシア系住民はどのように、そしてなぜ、特定の表象を選んで、民族的アイデンティティを確立し、維持しようとしたのだろうか。

本論は2つの部分からなりたっている。最初の部分では、100年以上に及ぶ、日本と中国の台湾における植民地政策について振り返ることにする。長きにわたり、現在の状況に影響をあたえつけてきた教育政策や保留システムといった政策に特に注目する。ここではさらに、戒厳令が解除される前と後に起こった主要な出来事についても簡潔に取り上げることにする。これらは一本化からはほど遠いが、全面的に展開している現在の原住民運動つながっていくものである。

2番目の部分では、原住民族の異なる集団がそれぞれのアイデンティティを宣伝するために用いている主要な文化的表象の多くについて議論する。これらの表象には、(1) 原住民族の個人名及び集団名の復活とその使用、(2) 共同体の年次儀礼と人生における通過儀礼の一部のみの強調、(3) 「伝統的な」暮らしのいくつかの側面のある部分のみを強調すること、(4) 原住民古来の民族文化の脈絡をこえた特定の視覚芸術やパフォーマンスアートの普及、が含まれる。民族的アイデンティティの象徴としてのこれら表象の有効性について、まず「原住民族文化」の個々の脈絡のなかで、次に、中国人の入植という特有な状況のもとでのそれらの再脈絡化の過程のなかで検証する。

人類学者と原住民研究

個人的な経歴と反省

喬 健

台湾の少数民族集団を断続的にかかれこれ40年にもわたって研究している筆者は、特にこの10年来、非常に斬新なあるいは今まで見たこともない局面に遭遇してきた。それは、急激に高まっている台湾の原住民族運動であり、これはまた、目下、地球の各地で盛んに起こっている先住民運動の一部でもある。それは、(1) 祖先がかつて住んでいた土地の所有権もしくは少なくともも使用権の主張、(2) 自分たちの民族集団の歴史と文化の再構築、(3) 民族の自決権、である。残念なことに、これらの要求は、政治的、社会的な緊張としてはねかえってくる暴力的な闘争を通して行われている。抗争の対象は主として現地の優勢な民族集団と政府である。少数民族集団の研究を専門に行う人類学者たちは、台湾では、かつては研究者として尊敬されていた。しかし、新たな原住民運動の中で、その研究に従事する動機と立場に疑問をなげかけられている。

抗争が生む緊張した情勢と研究者に対する疑念という苦しい立場に直面して、どのような適切な解決の道を提出し、いかに自分の身を処するか、これが台湾の人類学者にとっての目下のさし迫った問題である。筆者は次の2つの解決策—(1) 多文化主義、(2) 文化カウンセリング—を提案し、同時に以下について詳細な議論を行う—(1) 「多文化主義」の実行を主張する際、どのように文化の内容とレベルに対して範囲を画定し、またどのようにして一連の理論と現実の問題を解決するか、(2) 文化カウンセリングのカテゴリーと方法はいかにあるべきか、(3) 文化カウンセラーとしての人類学者はどのような新しい役割を演じ、どのようにその専門家としての倫理を整理して規定するか。

現代化の過程における少数民族文化

郝 時遠

人類社会が21世紀に入らんとするこの時期に、現代化の理念はまさに、空前の規模での実践を以て、世界の各国・各民族の発展を推し進めている。

アジアの興起、東アジア地域の経済の急速な発展、環太平洋経済圏の形成とそのグローバルな経済の一体化へ向けての推進作用は、東アジアの発展途上国を中心とする現代化の過程をして急速な発展と激しい変動という社会的な特徴を表現せしめた。市場経済の普遍化、商品流通の国際化、生活様式の均一化は、人々の物質面での生活における現代化の水準に対する判断基準を一つの方向へ向かわせている。それは同時に、現代化の過程における伝統文化の変化と適応における矛盾にも人々を直面させている。

現代化の過程は、各国・各民族が相互に開放し、交流し、参考にし、吸収するのを促進しており、国家と国家、民族と民族の間に共通する要素は顕著に増加している。しかしながら、このことは民族文化の多様性の消滅を決して意味しない。文化統合されていく過程は、経済生活の均一化よりはるかに複雑で長期にわたる。それは人類社会における民族の過程の長期性によって決定されるのである。

現代世界における国家は、多民族国家がその大多数を占めている。国家の現代化の過程は、国内の少数民族の経済文化の発展をきわめて大きく促進させるであろう。各民族の経済発展の水準の均一化と経済生活の融合は、国家としての統合と国内少数民族の凝集にとって、堅固な物質的基礎を提供することになる。このことと同時に、少数民族文化の保存、伝承、発展及び社会の主流となっている文化との融合は、自覚的から自然な発展過程を経験することになるであろう。

20世紀は政治ナショナリズムが広範囲にわたって興起した時代であり、国家の独立、民族の解放を主要な特徴とするナショナリズムの運動が、西洋の植民地主義体制の崩壊とともに高揚した。さらに、冷戦構造が消滅してからは、覇権主義の衰退にともなって「最後の釈放」が行われた。20世紀80年代以降、経済発展の「ボーダレス化」にともなって、経済ナショナリズムはますます拡大する国際協力と統一市場の原則によってまさに溶解されようとしている。また、文化ナショナリズムは、こうした激しい変動の時代にあつて、その勢いがとどまることなく盛り上がる上昇期にあり、今後はさらに、21世紀の人類社会におけるナショナリズム的反応の主流となるであろう。欧米先進国における少数民族文化の自覚的復興という反応、先進国家間における文化の浸透に対する制限、発展途上国における植民地文化の残余の一扫と文化的ヘゲモニズムに対する反対という現象は、おしなべて上記の傾向を証明している。

人類社会における民族の過程にとって言えば、地域観念の改変、経済生活の融合はみな、各民族の相互接近と漸進的融合を促進している。このため民族間の相違も文化的多性においてますます表現されるようになっており、民族文化は、民族的自尊心の主要な拠り所としても各民族が重要視するものとなる。東アジアの発展途上国は現代化の過程において、現代化が決して西洋化ではないことをすでに明確に認識している。いずれの国家もそれぞれの国情の特徴や文化的伝統に基づい

て、現代化における発展の道筋とモデルとを選択する必要がある。多民族国家における少数民族に関して言えば、現代化の過程はまた、この原則、すなわち「实事求是」（事実に基づいて真実を求める）の原則を遵守せねばならない。

国際関係におけるナショナリズムの表われは、多民族国家における民族間関係にも反映されるはずである。この反映の程度は、多民族国家がそれぞれの民族間の関係を的確に、かつ有効に調整し得るか否かによって決定される。それには科学的な民族観と的確な民族政策が必要とされるのである。

民族観は、民族的現象やその過程に対する人々の科学的な認識に関する問題を解決せねばならないし、民族政策は民族問題を具体的に解決せねばならない。それらによって、人類社会における民族の過程は、社会の発展が促進される中、それ自体の規則的発展に従うのである。民族は十分な発展を基礎としてはじめて自覚的な融合を実現することができ、また民族は自覚的な融合を前提としてはじめて自然的な消滅を実現することができるのである。民族文化の個性は、この過程において相互に融合し吸収し合うことになるであろう。

中国における ナショナル・アイデンティティと多文化主義

三つのムスリム少数民族間の分節的ヒエラルキー

ドゥルー・C・グラッドニー

本報告は、中国の少数民族とナショナル・アイデンティティが、国家が提唱し、特定可能な歴史的経路依存に従う、多文化主義・多民族主義政策によって規定されることを示すものである。回族、ウイグル族、カザフ族の三つのムスリム少数民族の比較によって、本報告は、中国におけるナショナル・アイデンティティとエスニック・アイデンティティの歴史的経路が、国家政策と地域におけるアイデンティティの認知の双方の影響を受けることを指摘したい。これらの経路は、人類学的出自理論から導かれる分節的ヒエラルキー・モデルによって描くことのできる関係や対立を経て進む。しかし、本報告は、なぜ他の選択肢ではなく、ある特定の経路がたどられるのかを明らかにすることを試みる。

教育的、歴史的、経済的データの比較研究により、私は、中国におけるエスニック・アイデンティティの歴史的経路依存が、弁証法的・対話的な関係に影響されることを示す。

国家の統計調査、インタビュー、そしてフィールドワークに基づき、回族、ウイグル族、カザフ族は、彼らの民族的・宗教的背景との関連が明らかな経済、教育面での発展において、特定の経路をたどることが明らかになる。これらの経路は、それらの三つのムスリム集団間にいくつかの共通点があるだけでなく、同時にそれらが他のいくつかの重要な点において異なっており、各々の少数民族内部でも、宗教、エスニシティ、地域などの境界によって細分化していることを説明して見せる。実際のところ、外部との関係や民族内部での関係を抜きにして、彼らのその場、その場のアイデンティティの表現を理解することはできない。こうした関係から明らかなのは、人々が多くの多

元的アイデンティティを共有するというだけではなく。現代中国におけるさまざまなムスリム少数民族を理解するには、汎イスラム主義や汎トルコ主義の理論が全く不適切であるということも示されているのである。

最後に、なぜ私が、今日、とりわけ冷戦後の時代において、中国や他の近代国民国家におけるエスニック・アイデンティティやナショナル・アイデンティティの復興や重要性の高まりを理解する上で、歴史的経路依存や分節的ヒエラルキーの理論が有効であるかと考えるのかを明らかにしたい。

中国南部少数民族の直面する諸問題

雲南の事例を中心に

松本 光太郎

凍結状態にある民族識別工作

社会主義中国においては、国民党時代には認められていなかった少数民族の権利を、政治的に位置づけるといった政策がとられた。この政策を実現する基礎として行われたのが民族識別工作である。つまり、民族政策を実施しようとしたが、その対象が明確ではなかったところに、民族識別工作が必要とされた理由があると考えられる。この民族識別工作により、現在までに55の少数民族が承認されたが、一人っ子政策などにおける優遇を求めて本来少数民族でない人が承認を求めようになったため、1987年末に民族識別工作一時停止の措置がとられ、現在でも凍結されたままになっている。

仮に国民統合論的な視点だけに立つのであれば、民族識別はこれ以上必要ないという議論になるかもしれない。しかし、民族識別工作の実態から見るかぎり、この問題はまだ完全に解決されたとは言えない。これには二つの原因があると考えられる。

まず第一に、1950年代以来行われて来た民族識別工作はまだ未完成のものだということである。例えば、雲南省と四川省の省境に住むナシ族は、国家レベルではナシ族として承認されているものの、地方レベルでは四川省では蒙古族、雲南ではナシ族として承認されている。さらに雲南のナシ族の中にはナシ族の旧称である“モソ”を民族名称とすることを求めている集団があり、これらの要求を簡単には調整できない状況に陥っている。当初はイ族の中に入れられることになっていたチーヌオ族は、研究者及び民族自身の強い願望により単一民族として承認されたが、実際にはハニ族に近いのではないかと考えられる。楚雄イ族自治州のイ族の中には、リス族としての承認を求める集団がかなりいると言われる。こうした問題の背景には、イ語支の民族、言語の分類にあまり根拠がなく、内部の言語的相違の大きいイ族がなぜ一つの民族とされ、イ族とハニ族、リス族などがなぜ別の民族とされているのかについての合理的説明がなされていないという問題が存在している。

第二の問題は、少数民族に対する差別、不平等がまだ完全に払拭されていないということである。例えば、広西、広東、雲南などに住むチワン族は、解放前は自分たちが少数民族であると認めず、自分たちのことを漢族であると見なしていた。民族識別工作を通じて現在では人口約1500万人、中国最大の少数民族であるが、まだ完全に少数民族としてのプライドを持ちえていない。海南省の臨

高人が、実際にはチワン語を話しているのにもかかわらず、いまだにチワン族であることを承認していないのはその一例である。これは、主に広州市の方に住んでいる幹部や知識人が少数民族に対する蔑視を恐れているためである。

民族識別工作の問題を、優遇の問題だけに起因するものとみなすのではなく、それが本来は民族平等を実現するためのものであるという視点で見直す必要があるだろう。

拡大する経済格差

生産責任制の実施は、一方で農民の生産に対する積極性を高めたものの、他方で漢民族地域と少数民族地域の経済格差の拡大をもたらした。「民族平等政策」の意味もまた、民族平等を実現するための援助という意味から、各民族間の完全な自由競争という意味へと変化しつつある。中国の研究者は、こうした格差拡大のことをしばしば“マタイ効果”（豊かなものはより豊かに、貧しいものはより貧しくなるという意味）という概念で表している。

こうした格差拡大の一因となっているのが、少数民族地域の資源開発をめぐる国営企業と地元住民の間の利害対立の問題である。筆者は、この問題が表面化したのは開放改革以後であるが、“二元構造”とも呼ばれるこうした構造が作られたのは「大躍進」から「文革」にかけての時期ではなかったかと考えている。

費孝通が「輸血から造血へ」というスローガンについて説明しているように、開放改革による変化をすべて消極的なものとみなすことはできないであろう。むしろ、費孝通のいう「造血」を実現するためにも、一定の資源開発権と少数民族が持続して発展していけるような援助こそが求められている。

環境問題

環境破壊の各地の少数民族地域でそれなりに共通した問題となっているが、雲南省シーサンパンナを例にとってみれば、シーサンパンナの森林被覆率は解放初期の60%から20数%にまで低下している。その原因は、生態系の多様性や農業を行う上での現実性を無視した「大躍進」や「文革」によるものであるが、林業中心の多角経営政策に転換した後でもさらなる大きな破壊がすすみつつある。こうした環境破壊が深刻なことから、現象面だけを見ると、中国の経済発展はやり方こそ時期によって違い、自然環境を徹底的に収奪することで成り立ってきたように思われる。しかし、これはむしろ中国の政治の反映であり、「大躍進」や「文革」が終わったあとも、拝金主義的なやり方で市場経済化をはかっているところに本当の原因があるような気がする。

「文革」時代のイスラム教弾圧

日本の文化人類学者にはあまり重視されて来なかった問題として、雲南の回族、イスラム教徒の問題がある。回族の問題は、実は雲南における最大の民族問題ではないかと思われる。「文革」終結も間近の1975年に起こった沙甸事件では、不幸にも少なくとも1000人以上もの回族が「反革命」の理由で戦車などの集中砲火を受けて死んでいる。1979年にこの事件に対して名誉回復が行われたものの、現在でもまだ各地で衝突が起きている。現地研究者にとっても回族の問題はあまり近づきたくない問題であり、“回族はこわい”

といったイメージがまだ払拭されていない。他方で、最近では各地でアラビア語教育が復活し、中国全体からしてもイスラム研究の発展など、これまでのイスラムに対する見方の見直しの動きもある。

中国人になることを学ぶ？

中国の三つの少数民族における少数民族教育とエスニック・アイデンティティ

メッテ・ハルスコフ・ハンセン

中国共産党は、中華人民共和国の隅々にまで国家の教育システムを浸透させることに大変力を注いできた。少数民族地域においては、教育システムの重要な目的の一つは、非漢民族に、「中華民族」という中国のネーションに対する公的解釈の自己認識を持たせることであった。いわゆる「少数民族教育」の確立が、中国国家教育の水準の低い少数民族の特有の需要に国の学校を対応させるための戦略的手段として提唱された。しかし、カリキュラムを見れば、中国の教育システムは高度に標準化されたものであり、国中の生徒が、多かれ少なかれ、同様の中華民族のイメージや、中国の「少数民族」に属することの意味に関して同様な解釈を与えられている。中国の公立学校は、中華民族と民族の統合に関する政府のイデオロギーを伝達しようとしている。しかし、それと同時に、多くの少数民族において、民族固有の言語、歴史、文化的価値観や倫理の有用性（時には存在すらも）を、それらを教育内容からはずすことによって、否定する。

国の教育で伝達されるネーションのイメージと少数民族の概念を分析することにより、本報告は、どのように、またなぜ、中国西南部の三つの異なる民族集団（ナシ族、タイ族、ハニ族）がそれらのイメージや公立学校が要求する文化的適応に対して異なる反応を示したかを論じる。本報告は、標準化され、同質化された教育は、本来、少数民族の生徒に、民族的帰属意識の重要性を排除する国家やネーションあるいは党に対する一体感を植えつけられないということを主張する。標準化された教育システムは、少数民族独自の言語や慣習、あるいは歴史の文化的・政治的価値を減少させることによって、実際のところ、エスニック・アイデンティティと文化的相違の強調の拡大を助長する危険を冒している。標準化された教育への反応は、多種多様であり、大部分は予測不可能である。なぜなら、それは、中国国家との歴史的関係、国境を越えた民族的なつながり、宗教的共同体、地域の民族的ヒエラルキーなどの地域的要因に左右されるからである。標準化された、国家統制の下の教育は、これらの要因の重要性を排除することはできようもないが、それは確かに、エスニック・アイデンティティの方向とあり方を決定する際に、一定の役割を果たしている。

そこで、ある民族集団（たとえばナシ族）は、中国のすべての民族集団を含むアイデンティティとして中華民族という概念を浸透させようとする政府の意向と対立することなく、中国の国家教育に長期間参与することを通じて、人民共和国の脈絡の中の少数民族として自身を確立し、表現することに成功している。また、他の民族集団（たとえば西双版纳のタイ族の多く）は、中国の国家教育を拒絶する傾向がある。なぜなら、国家教育は、宗教的伝統と衝突し、更に生徒たちに、一つの民族・ネーションとしての自らの文化的遺産と歴史から自分自身を遠ざけることを強要するからである。また、ある民族集団（たとえば西双版纳のハニ族やチノ族）は、地域において定められた

歴史的・民族的ヒエラルキーにおける低い地位と闘争するために、中国の教育システムに順応し、エスニック・アイデンティティを軽視することに戦略的利点を見出しているかもしれない。本報告の目的の一つは、中国国家が、少数民族地域において、国家の教育システムを通じて、各民族のエスニック・アイデンティティを管理し、一つの中華民族という観念を鼓舞することが可能かどうかを論議することである。

民族社会の発展と民族文化の変遷

金 炳鎬

社会変動と文化接変（吸収と変容）の時期にある東アジア少数民族

現在の世界は冷戦終結の時代にあつて、世界の新しい秩序を作り上げる民族の時代に向かつており、平和と発展が時代の潮流となっている。

目下、全世界で経済発展が最も速い東アジア地域ではまさに、民族社会、特に少数民族社会の文化衝突と社会変動という問題に直面している。

中国の改革・開放の十余年来、中国の各民族、特に少数民族は伝統文化と現代文明との衝突と協調という問題に遭遇し、優れた伝統文化を保存し先進的な現代文化を吸収するプロセスを経験している。特に、社会主義市場経済を実行するという条件の下で、それぞれの少数民族社会の社会発展と文化変遷における変動と協調とがとりわけ注目されている。

中国のそれぞれの少数民族が社会主義市場経済に適応し参与する方式と程度は、それぞれに特色をもっている。

中国のそれぞれの少数民族が社会変動において遭遇する困難や問題も様々であり、それらの数量や程度もそれぞれに異なっている。

民族社会の発展と社会の変動

民族の社会・社会の民族というように、民族と社会とは密接に関係している。民族の発展は社会発展の法則や制約を受ける。社会の発展は民族の発展を決定する。多民族国家における民族の発展は、社会発展や民族間関係の発展と密接に関係している。

民族の発展は、民族自身の要素・民族が置かれている自然的要素や社会的要素の総合的な協調的作用のもとにある。民族自身の全体的な内部構造や性質、諸々の外在的特徴、および民族間の社会関係の不断の調整更新・協調適応が、民族の縦向きの質的進展と横向きの量的拡張を推し進め、民族の民族性の発展・社会性の発展・人の発展のプロセスを総合的に実現するのである。民族の発展は本質的には民族の生存と進展の質的・量的な向上である。

民族の発展は民族社会の発展でもある。現在の東アジア地域の少数民族の社会発展と中国の少数民族の社会発展は、社会発展における社会変動のプロセスである。社会変動のプロセスは、適切な民族文化の保存と他の民族文化の吸収の方式・方法を伴いながら、民族社会のより充実した発展の基礎の上に初めて、比較的良好かつ速やかに実現するのである。

良好な社会変動のプロセスが経験するであろう陣痛は相対的に少なく、また必要とする時間も相対的に短い。しかしながら、こうした良好な社会変動が必要とするところの基本的な前提条件はいくぶん複雑である。それは政治・経済・文化・社会の各方面の条件を包括するのである。

社会変動は社会の様々な要素の制約を受ける。第一に、時代の全体的な環境と周囲の社会環境からの影響を受ける。今や冷戦状態が終結し、いずれもが平和な環境において発展を遂げるために努力している。東アジア地域は驚くべき速さで発展を遂げており、中国では全面的な開放の情勢において全国的に迅速に発展している。これらはすべて中国の少数民族の社会発展に対していえば良好な社会的時代的環境である。第二に、国家政策という要素の影響を受ける。政策は一種の環境でもあり一種の資源でもある。少数民族社会の発展にとって有利な、優遇的で特殊融通性のある政策を採用することにより、少数民族の社会発展を助けていると言えよう。第三に、ある具体的な民族の生活空間と居住形式・居住状態の民族社会の発展に対する影響である。例えば、農業区・牧畜業区・都市工業区、民族集居地区・雑居地区・散居地区という異なる条件は、わが国の少数民族の社会発展に異なる影響を生み出している。

民族文化の変遷の民族社会の発展に対する作用

それぞれの民族はすべて、文化交流や融合を含む他の民族との交流のプロセスにおいて発展するのである。

それぞれの民族の発展はどれも一定の文化的背景を有している。民族文化の背景は民族の発展に対して、促進させる作用を生み出したり、消極的な作用を生み出したりする。こうした民族文化の背景は、実際には過去の民族間の文化交流や融合の要素が結晶した結果でもある。今日の民族の発展はこうした民族文化を背景としてはいるものの、しかし他の民族文化の影響を完全に防ぐことはできない。このため、結局は元来の民族文化を中心として、他の民族文化を吸収して新たな民族文化の背景の一部分とするよりほかにはないのである。

民族文化の変遷と民族文化の真の発展は、これまで自民族の特徴を保持し他民族の文化を吸収することの基礎の上に実現してきた。他民族の文化の優れた部分を吸収し、自民族の文化の精髓の部分を保持し、さらにその二者が融合し消化することで、自民族の文化の新たな構成要素へと変化する。このことがまさしく民族文化の変遷のプロセスなのである。

民族文化の変遷は、民族社会の発展に重大な作用を及ぼしている。東アジア地域の少数民族や中国の少数民族に対してもまた同様のことが言えるのである。

現代におけるアイヌ民族自立運動に関する諸問題

近代の同化政策から現在の新法制定論議まで

大塚 和義

現代におけるアイヌの民族的権利運動

アイヌは近年、民族としての自立的な権利の獲得をめざしてさまざまな運動を続けている。アイヌは、少なくとも日本列島北部に古くから居住して特色ある文化を育んできたという歴史的事実をふまえて、アイヌの先住権を認めること、民族差別をなくすこと、経済的格差を是正することを訴え、伝統文化の継承を円滑に行い得る諸政策と、これらの実施をアイヌの主体的な意志のもとに行うことのできる自立化基金の創設を要求してきた。国連は1993年を「国際先住民年」とし、さらに94年から10年間を「世界の先住民の国際10年」と定めるなど、国際的な先住民運動の高揚のもとで、また国内的には連立政権の誕生もあずかって、1995年3月、「ウタリ対策のあり方に関する有

識者懇談会（ウタリ懇）」が五十嵐官房長官の私的諮問機関として発足した。1996年4月、「ウタリ懇」の報告が提出された。その内容は、現行憲法に抵触するアイヌの先住権を明確に認めたものではないが、日本列島におけるアイヌを明確に独自の民族として認め、その先住性を認識したうえで近代国家日本が著しくアイヌに差別と経済的困窮による苦しみを与えてきたことを反省し、否定されてきた文化の再生を軸に、民族的諸政策を実施していくための立法を求めるものである。これを受けて政府は、「アイヌ関連施策関係省庁連絡会議」を設置し（5月）、検討を続けた結果、1997年度予算案に文化政策を中心とした諸施策を盛り込んだ。そして1899（明治32）年制定以来、幾度も改正しながらも現行法として存在している「北海道旧土人保護法」に代わる「アイヌ民族に関する法律（アイヌ新法）」が1997年度の通常国会で審議される見通しとなった。この法律は、実質的には、日本におけるはじめての民族法といえるなど、現代的意味は多様である。

近代以前のアイヌ政策

本州の和人による本格的な蝦夷地「アイヌモシリ（アイヌの大地）」に対する資源収奪体制確立への画期は、1550年にアイヌの首長と結んだ「夷狄商船往來の法度」によって、蝦夷地（現在の北海道）の一部を植民地化したことである。この取り決めによって、和人はアイヌの攻撃を受けない占有の交易拠点を確保した。以後、近代以前の蝦夷地支配は、アイヌから組織的な資源収奪を大規模におこない、さらに使役を強制するなど、アイヌに過酷な負担を課した。しかし、基本的にアイヌ語や信仰・儀礼など、アイヌの文化を破壊したり否定するまでには至らなかった。究極のところ、和人は資源収奪が目的であった。当時において商品価値のあるものが、極めて安価に大量に安定的に入手できればよかったのである。

蝦夷地に近接する地域へのロシア勢力の南下にともなって、北辺警備と蝦夷地経営を直接行うために、1799（寛政11）年、幕府は東蝦夷地を松前藩より召しあげて直轄支配した。それに先立つ予備調査を幕府から命じられた近藤重蔵は、1798年に東蝦夷地を巡見する。その結果彼は、蝦夷地からの資源収奪をもつばらの目的とする従来の幕藩体制支配のありかたを変更するように、いくつかの政策を提示した。これは日本的な同化政策の原形ともいべきものであった。つまりアイヌの生活と文化を「粗野」として否定し、日本語の読み書きを習得させることをはじめ、漁労や狩猟・採集という彼らの生業を高度で文化的な農業に変えて、アイヌを農民化すべきであるという意見書を幕府に報告したのである。衣服、髪型、姓名など、すべて日本風に改俗させることを基本にしていた。創氏改名に代表される日本文化の強制を行った日本型帝国主義の植民地支配形態の原形が、すでに幕府の官吏によって発想されていた。しかし、この試みは蝦夷地の一部で実施されたが定着しなかった。基本的に近代以前のアイヌ支配は、隔離政策によるものであった。

近代国家日本の成立とアイヌ生活地の収奪と民族文化抹殺

近代国家日本の構築をめざした支配権力は、欧米列強のそれを手本にして模倣した。すなわち1868（明治1）年の明治維新の達成とともに、既存の幕藩体制下の一般領民は、いっしょに「国民」に

困り込まれた。いうまでもなく国民自身には、国民意識はもとより市民的自覚はなかったのである。さらに政府は、蝦夷地を北海道と改称して、そこにある豊富な資源を利用し、広大な土地を耕地化することこそ脆弱な国家資本の基礎にできると考え、翌1869年に開発のための行政機関である開拓使を設置した。そしてアイヌの伝統的な世界であるアイヌモシリの存在を無視して北海道を「無主地」と規定するなど、列強の植民地経営の法的手法をもちいた。また、お雇い外国人の力をえて開拓計画の立案と実施を強力に推進した。

近代国家成立期のアイヌ政策とそれがアイヌ社会にもたらした状況は、土地収奪と同化政策であり、生活困窮と伝統文化の破壊であった。

同化政策貫徹のための北海道旧土人保護法の制定

アイヌは近代日本に、先住してきた土地を奪われ、伝統的な生業である漁労や狩猟も規制されてほとんどできない状態になった。日本化をめざす同化政策のもとで、アイヌは異族の言語や文化を強制され、アイヌ語や伝統文化によって生きることが不可能な社会に囲いこまれていった。残された生活手段は最底辺の貸労働に頼るしかなく、開拓使の救済策も充分なものではなく効果をあげなかったために生活は困窮をきわめていった。アイヌの窮状が国際的にも非難されて、ようやく帝国議会は1899（明治32）年に「北海道旧土人保護法」を成立させた。しかしこれは、勸農と皇民化教育を柱にした福祉政策推進のための法律であって、アイヌを独自の民族と捉えて自立を助けるものではなかった。この法律の制定には、アメリカのインディアン政策のよりどころとなったドーズ法なども参考にされたといわれる。

この保護法は、農耕をする者には土地を給付することが盛り込まれたが、この最も重要な条文は削除されて、1997年2月現在も、存続しているのである。さらに、この保護法は、1910年の韓国併合で日本政府がとった皇民化政策の原形となっており、日本帝国主義の植民地政策は、アイヌ政策の延長線上にあったことを指摘したい。

現代の問題点

アイヌ政策は、国家によって特異な「民族」ではあるがそれは「同化されるべきもの」として扱われてきた。そしてすでに述べたように、アイヌに対する諸政策は福祉政策の枠内でのみ行われてきた。しかし、いまやこれでは成り立たないことは明らかである。アイヌ自身の要望はもとより、内外の世論の高まりや国連の動向を踏まえて、政府は福祉対策から民族政策に一步近づく政策を行うための立法化を図ろうとしている。これらの政策転換は、世界的な先住・少数民族問題の顕在化と国際的連帯が進んできたことも力となっている。アイヌ新法制定に関する最近の動向は、さまざまな障害がありながらも北海道開発庁内に「アイヌ政策推進室」が設けられ、立法化への作業が進められている。

コーカサス高地少数民族における社会経済変化

セルゲイ・アルチュノフ

ソビエト時代、主として1930年代初頭の集団化以後、とりわけ第二次世界大戦（WW2、もしくはソビエトの正史では「大祖国戦争」と呼ばれる）が終結して国家経済が再建されて後、北コーカサスの高地少数民族における伝統的な経済や社会構造はほとんどその姿をとどめなかった。厳格な意味でのロシア系の農民と同様、彼らも、村落単位、或いはいくつかの村落をまとめた形で集団化され、大規模な集団農場に組織化された。ソフホーズと呼ばれる賃金労働者からなる国営の専門化農場も広く組織された。集団農場のメンバーやソフホーズの雇用労働者らは過去には土地を持たない農民であったが、非常に狭い小区画地と限られた数の家畜の所有を許された。しかしながら、これら家族所有の経済区画の生産性は、集約的な労働力の投入により、大規模な集団農場や国営農場よりも高かった。ここでは、戦後時代の状況を詳しくは述べないが、農民（或いは労働者）らと地方及び中央の権力者たちは絶え間ない闘争を続けた。農民は自分たちの小区画地や家畜を増やそうと必死であったし、権力者は逆にそれらを限りなくゼロに近づくよう減少させ、農民が集団化された農場や酪農場に労働力をもっと費やすようにさせようとした。

その間、教育と都市志向の社会の流動化が進み、もとは90%以上が農民だった少数民族集団の内からも都市住民が出現し、その多くが今や知識人（学者、教師、医者、政府役人やその他の職員）、販売人、事務員、そしてもちろん採掘者や工場労働者として働くようになった。

とはいえ、正確な数はそれぞれのケースによってばらつきがあるが、ロシア民族の場合、地域によっては約70%が都市居住者であるのに対し、少数民族の場合は逆に、通常60~80%かそれ以上が地方居住者、すなわち農民である。

私は本稿で「少数民族」という言葉を個別の事情を考慮せず、たとえばチェチェンのようなネイションをも含めて使用する。チェチェンの人々は、人口は100万を超え、その本来の民族領域においては勿論多数派である。しかしながら、彼らもロシア連邦の中では少数派とみなせる。それはロシア人と比較した数の上からだけでなく、その社会的地位の点からもそうである。

確かに近年になって、旧ソビエトでは実質的に見られなかった現象がロシアで展開しつつある。ほぼあからさまな民族差別的な軽蔑や疑いが、少数民族、特にいわゆる「コーカサス系民族の人々」に対して向けられている。内務省からは秘密指令が出され、彼らが自分たちの共和国の外にすむことを阻止あるいは最小限にとどめ、彼らを警察署で登録することを義務づけている。彼らは事実上、警察によって絶え間なく威嚇されており、正当な登録書類一式を所持していようが事態は変わらない。こうしたことすべてが、かつての南アフリカのアパルトヘイト体制に酷似している。「純粋なロシア人」と異なって見えるものは誰でもそれらの態度の犠牲になりうるし、警察のみならず、多くの一般の人もこうした態度をとるのである。私はこのような事態がチェチェン人やダゲスタン人、アルメニア人やグルジア人だけでなく、ブリヤート人、ヤクート人にも、また時として、髪の色濃い、「コーカサス的容貌の」モスクワ在住のユダヤ人にも起きていることを知っている。この次第に強まる新たなロシア人の異民族嫌悪の根源の詳細をここで述べることはできないが、そ

これは確実に、少数民族の間にみられる以下の傾向を生みだしている。つまり、彼らは固有の民族領域内にできるだけとどまるようにつとめ、それが結果的に彼らの権力、影響力、自治権を拡大し、領土内での独立を勝ち取ることに繋がった。また彼らの社会的経済的地位を、しばしば隣接するロシア民族の負担によって強固にし、強大にした。また彼ら自身が自分たちの伝統文化とみなすもの、つまり土着の言語や宗教—ここでは特にイスラム信仰であるが—を復活させ、活性化させ発展させるようになったのである。

こうした傾向は、多くの場合、他のイスラム教国、特にトルコからの強力な支援を受けている。が、より重要なのは、かつてのマハジール (mahadjir) 、つまり1860年代にトルコ、シリア、ヨルダンやその他の中近東諸国に移民した人々の子孫からの反応である。今、彼らはかつての故郷を積極的に訪ね、その影響力を拡大している。だが今のところ、当然のことながら、ここに永住するために戻ってくるものの数は非常に少ない。しかし、彼らは合弁事業に参加し、故郷に残った親戚たちに多大な支援を寄せている。このようなことは1980年代初頭にはまだ考えられないことだった。

前述した要因すべてが、劇的な社会・経済状況の変化を、かつての自治共和国、現在は正式に「主権」国家となった北コーカサスの諸国にもたらした。これら諸国の主な資源と産業は何であろうか。チェチェンの場合、今や戦闘によって深刻な被害を受けている大規模な油田地帯と精油所、機械製造工場などがあるが、これはかなり例外的である。他の共和国では第一に農業であり、特に綿、ゼラニウム、コリアンダー、タバコ、ワイン・ブランデー生産用のぶどう、ジュース・缶詰用の果物を栽培する果樹園など、専門的栽培が盛んである。トウモロコシ、穀物、野菜も多く生産されているが、主にその地での消費に当てられている。

産業も、機械、道具、合成繊維や皮革、缶詰工業、地域で採掘された鉱石 (タングステン、モリブデン、亜鉛、鉛など) の溶解など、いくつかはある。

サナトリウム、保養地、スキー・リゾートなどの観光、レクリエーション産業が重要な位置を占めている。ソビエト時代には、利益が上がらないにも関わらず、それらに対して国家と労働組合 (ほとんど同じものであったが) から多額の助成金が出されていた。機械および道具製造産業に対しても同様に助成がなされ、特に軍事産業コンビナートの一部であればなおさら優遇された。

これらの産業全てにおいて、部分的に地方の人材が充てられたが、それ以上にロシア人労働者が通例、雇用された。ロシア人労働者は両極端な位置で多数を占めた。すなわち、「汚い」、一流ではないレベルと、特に高度な専門技術を要するレベルにおいてである。農業は現地労働力によって担われたが、約30%ほどは (ダゲスタン以外)、やはりロシア人が占めた。

現在までに、農業における例外を除き、これらの産業全てが多かれ少なかれ危機に瀕している。缶詰食品やその他の類似した製品は、中央ロシアの市場において、西側の食品との熾烈な競争に直面している。ロシアの人々の購買力は、概して非常に落ち込んでいる。労働組合の補助金なしでは、人々の大半は、もはや保養地やスキー場に行くことはできない。それができるだけの財力がある人なら、むしろキプロスや南トルコへ行く方を好む。北コーカサス地域の諸共和国の住民の総現金収入は大幅に減少した。今やモスクワの平均収入の50~60%かそれ以下である (東に行くほど低

い)。それは部分的には自然経済で埋め合わせがなされている。つまり、果物、野菜、牛乳、肉やその他の食料は購入できなくても家庭内で栽培されていることがあり、現地では都市の世帯でさえ、その恩恵を受けている。だがロシア人の場合、親族的紐帯があまり発達しておらず、都市住民はこのような援助が受けられない。

1980年代半ばの調査（R.タジエフ（Taziev）、未発表）によると、チルニーアウズ（Tyrm-Auz）のタングステン・コンビナート（カバルダーバルカル地区）の採掘者や労働者の中では、バルカル人家庭の収入を100とすると、カバルダ人家庭の収入は90を少し上回る程度で、ロシア人家庭はたったの70である。

これはつまり、バルカル人は言うに及ばず、カバルダ人の家庭などよりも、ロシア人家庭がこの地方で子を産み、定着する率が低いことを意味する。そして北コーカサスの他の地域での一般的な傾向として、より西洋化・ロシア化していないほど、伝統文化の特徴が保持されており、その活力や出生率、一般的な成功率も高いといえる。

都市化している人々に比べて、都市化の度合いの少ない人々の方が、新しい状況が要求する変化に対応できる。すなわち、近代的な機械化された産業での雇用から、自営業、家内工業、様々な種類の小規模産業へ容易に転換できるのである。

観光産業は、以前は国家と労働組合、すなわちロシアの完全な管理のもとに置かれていたが、現在は地域の人々の手に移りつつある。しかしながら、観光産業の再建と実施においてよりよい成果を挙げるには、現在はまだまだかなり欠けている条件を満たしていくことが必要である。これについての詳細は後で述べたい。

私営化は、北コーカサスの諸共和国においては、実質的にまだ始まったばかりである。ロシアの他の地域と同様、まだそのための確固とした法的基盤は整っておらず、統制のない、規則性が見られない乱れた形で進行している。このような状況下では、統制のとれない私営化の進む間に、超国家主義的な感情や動きが容易に引き起こされる。それは私営化のプロセスを民族の境界に沿って独占化しようと言う狙いからくるものであり、終わることのない民族間の緊張と対立の源となることはほぼ運命づけられている。

このため、コーカサス諸共和国の大統領や権力者たちは、もとはといえば皆、共産党の有力幹部だったこともあり（チェチェンの分離主義指導者たちとイングーシュ共和国のルスラン・アウシェフ（Ruslan Aushev）は除く）、私営化の進展を制限し、そうして多少は修正された形ででも、集団化農業およびソフホーズ農業の現状維持に全力を挙げている。それにもかかわらず、私営化は進む。そこで、最後に、その進展の詳細とそこに待ち受ける主要な問題点について述べたいと思う。

観光を中心とする経済発展と文化

雲南省大理盆地の場合

横山 廣子

雲南省は中国の西南端に位置し、4,000キロ余りの国境線で東南アジアの3ヶ国と接する所謂「辺

境」の省である。山地が総面積の9割以上を占め、山間に「パーツ」と呼ばれる比較的人口密度の高い平地が点在している。これらの地理的条件は、漢族を含めて26種類の民族が代々居住してきたという歴史と不可分に結びついている。雲南は少数民族人口が三分の一に上る典型的少数民族地域であり、従来、全国的に見て、経済的に立ち遅れた地域であった。

ところが、近年は、煙草産業や観光の発展、東南アジア諸国との関係などにより、雲南の経済は少しずつ上昇しており、条件に恵まれた一部の少数民族地域では、かなり急激な経済発展が見られる。本報告では、その典型例と思われる雲南省西部の大理盆地の白族を取り上げる。観光を中心とする経済発展の中で、彼らの民族文化の変化の動態について、具体的事例を通して考察する。

経済発展と観光

大理盆地では、改革開放の具体的実践が、1982年頃から始まった。農村では82年末から生産責任制の導入が始まり、穀物生産が増大するとともに副業の奨励によって、収入が徐々に増加していった。この過去15年ほどの経済的变化を見ると、観光業の発展が経済全体に対して少なからぬ影響を及ぼしている。

大理白族自治州では、その自然的、歴史的、民族的条件を意識して、改革解放の初期から、観光業の発展を重視してきた。とりわけ、自治州の中心地である大理盆地地域は、82年3月には全国24ヶ所の第一期「歴史文化名城」の一つとして、また同年12月には全国44ヶ所の「風景名勝区」の一つとして、それぞれ国務院に批准されている。84年4月に、同地域が外国人にも開放され、特別の許可なくそこを訪問することができるようになったのも、観光地としての優れた立地を評価されたことである。

特に91年から始まった国家の第8次5ヶ年計画の中で、大理州では第三次産業の成長を大きな目標に掲げた。7次5ヶ年計画終了時の産業構造（第一次産業：第二次産業：第三次産業の比率が46：27：27）は、95年末までに変化（比率は38：31：31）したが、観光は第三次産業の拡大の旗頭としてほぼ期待通りの役割を果たした。

大理州の統計では、83年までわずか100人余りであった年間の海外旅行客数が、84年に5,000人を超え、95年には4万人を上回るようになった。特に91年以降の伸びがめざましいが、この間、大幅に増大したのは、まずは香港や台湾からの客であり、93年頃からシンガポール、タイ、マレーシアからの客が急増した。いずれも中国系住民を中心とするアジアの旅行者である点が特徴的である。また、国内旅行者も著しい増大を見せている。

絞り藍染め産業の発展と「土」のカテゴリーに対する再認識

私が1984年の春以来、調査を続けている蒼村では、解放前から絞り藍染めが行われていたが、83年に村営の工場ができて以来、観光や輸出用の商品生産が発展し、それが村民の現金収入の増大に多く貢献している。

ここで注目されることは、この産業の発展自体、外国人観光客や輸出相手国の業者との双方向的

コミュニケーションを伴う接触、つまり、国外の異文化との交流を通じてもたらされたことである。それはさらに、白族自身の自らの伝統技術・文化の見直しにつながった。換言すると、白族に、彼らにとって「土」のカテゴリーに属する事物に対する再認識を促したのである。

絞り藍染めのブームは漢族の間にも広がり、中国国内でも一時は観光商品の枠をこえて日常着の服地としてその販路を拡大した感があった。現在、すでにブームは去ったが、蒼村の白族の間では、日常的にも従来以上にこの布地が使われている。絞り藍染めは、少なくとも、彼らの自らに対する誇りやアイデンティティの根幹の一部を支えているように思われる。

三道茶の「発明」から規範化へ

この2、3年、急激に「三道茶」という名称が大理盆地や白族に関連して多く語られるようになった。「三道茶」とは、3種類のお茶による客人に対するもてなしで、それを形容して、「南詔（8世紀建国）以来の伝統の」というような宣伝文句も見られる。しかしながら、「三道茶」という言葉が使われるようになったのは、1980年代になってからのことで、それは、大理で文化面の仕事に携わる人々が造語したものである。白族において伝統的に存在したといえるのは、独特の小型陶器を直接火にかざしてほうじる茶や、黒砂糖をベースにした甘い飲み物を「茶」として人に供する慣習であった。

今のような形式の三道茶が広く普及するようになったのは、地域の観光開発に精通し、個人的才能に恵まれたある漢族が、白族の慣習を基礎として、三道茶の商品化に成功したためである。さらに、お茶を飲みながら民族舞踊を見るという形式へと発展することにより、白族文化を提示する演出の場として、昆明の民族村内にある白族村の「目玉商品」にもなっている。

このいわば、三道茶の「発明」と普及拡大のプロセスの中で、地元の文化人あるいは研究者の間では、三道茶の「規範化」も論議されている。また、白族農民も観光商品としての三道茶を積極的に押し出し始めている。しかし、現在までのところ、その生活の中にまでは「発明された」三道茶が浸透しているとは言えず、それは白族の日常の生活文化のレベルにはフィードバックしていない。

文化変化と経済発展

以上のような状況を通して、文化変化と経済発展に関して、以下の指摘をしたい。

1) 絞り藍染め産業と三道茶の二つの例には、共通して、民族文化が観光を通じて商品化され、経済的な利潤をもたらすという側面が見られる。しかしながら、商品化に着手した主体と文化に対する商品化のフィードバックにおいて明確な違いが見られる。

2) 絞り藍染め産業は、白族が従来、頻繁に接触してきた人々とは異なる価値観の人々との交流から発展した。これは多数が長距離を移動する観光によって生じた。また輸出が本格化してからは、貿易会社を媒介とした商取引という形で、間接的ながら効果的なコミュニケーションが成立している。注目点は、従来の政治的・文化的力関係に起因する価値体系が、その体系外の人々との交流を通して変質あるいは多様化したことである。また、従来の経済圏外との接触が経済状況を転換させ

るような発展につながる可能性がある。

3) 観光化により「伝統的文化」が損なわれるという見方は、単純すぎる。白族は、観光のために商品化される文化と自身の生活に根差す文化とを区別している。改革開放以後、観光化の進展と歩調を合わせて展開してきた文化変化は、最終的には彼らの選択に基づいている。そこで、たとえば大躍進以後、政治的に停止された宗教活動のように容易に元に戻るとは思えない。また、表面的に文化が変化しても、それに対する愛着や誇りは失われていない。

4) 大理の観光資源としては、自然環境も大きな位置を占めている。この地域のシンボルの一つ、洱海という湖は、その汚染が観光によって悪化したとも言えるが、また、観光重視政策のために、汚染対策が前進したという面もある。観光業の発展と自然保護をともに実現するために政府が実施した措置は、湖での漁業に深刻な打撃を与え、白族漁民の生活を大きく変化させるであろう。矛盾の中に解決策を探る難しい問題だが、今回の決定が唯一の道なのか、白族自身の声はどのように反映されたのか、検討に値する。

オロチョン族の民族文化と現代化

洪 時榮

現代世界はますます縮小しており、人々は工業時代以前の人が近隣の城鎮を訪れるのに要した時間で地球を半周することさえ可能である。毎年ますます多くの人々が世界市場経済に吸引され、さらに新聞・ラジオやテレビの放送、コンピューターの影響により、人々の生活様式に変化が生じている。本稿は、文化の伝播現象の過程におけるオロチョン族の文化的適応・文化的特徴および民族発展の問題に対して初歩的な探究を試みたい。

オロチョン族の伝統文化の概略

オロチョン族は中国東北部の大小興安嶺の山奥の密林に居住している民族である。1949年に中華人民共和国が成立するまで、原始社会末期の地域共同体の発展段階にあった。すなわち、未開の時期から連綿と続いてきた古くて典型的な狩猟を主とし、採集と漁労を副とする生活をしてきた。一つの民族全体が太古から残存してきた狩猟経済に従事しているのは、中国と現代世界とを問わず非常に少ない。オロチョン族は狩猟・採集・漁労において非常に豊富な経験と知識を蓄積している。物質文化と精神文化の側面においては、狩猟経済と密接に結び付きながら、独特の衣・食・住や行動の文化とシャーマニズムを中心とする古い精神文化を創造した。ここからオロチョン族が内包する要素が非常に豊富であるということが見て取れる。オロチョン族が作り出した狩猟文化は、たとえどんなに単純で原始的であろうとも、非常に長い歴史を持つ技術・経済・社会形態・観念形態などの様々な要素の莫大な蓄積である。それは中華民族の文化の重要な構成部分であり、なおも非常に大きな意義を持っているのである。

現代化の進行過程におけるオロチョン族文化の特色

1) 新中国の建設と国家のマクロな発展戦略の実施に伴って、現代化の波はオロチョン族地区にも波及した。

- 2) (1) 鉄道の開発・汽車の轟音が静寂な大興安嶺を打ち破った。
- (2) 主体民族の人口が大量にオロチョン族の生活区域に移住した。
- (3) 大興安嶺地区の原始林の大いなる開発。

政府のこうした措置はすべてオロチョン族居住地の未開発の生態環境をひどく破壊し、この地域の民族構造を変化させ、オロチョン族の人口比率は元来の98%から2%前後へと変化してしまった。大興安嶺というこの大舞台での主役は、すでにオロチョン族から漢族へと移ってしまっている。

3) 生存環境の変化と民族構造の変化は、オロチョン族をしてこうした変化に受動的に適應せざるを得なくさせており、そうすることで直面する狩猟の場の減少や狩猟資源の不足といった現実の挑戦を解決している。

- (1) 季節に応じて移動しながら狩猟をする生活スタイルが変化したのに伴い、グループや村ごとに別れて定住するようになり、そのためにより良い生存と更なる発展を求めることとなった。
- (2) 定住がオロチョン族の経済構造を変化させた。彼等は他の生産技術・文化を学び始め、生産の多角経営を行うようになり、これにより単一的な狩猟経済が終了した。
- (3) 小学校・中学校、さらには民族中学をあまねく建設することで、当該民族の教育者となる人材を育成している。
- (4) 政府の資金援助を受け、ラジオ局・テレビ中継局・図書館・映画館といった施設を建設し、先進的で豊富な文化的生活を享受している。
- (5) 民間療法によって疾病を治療するという以前の原始的な方法を改変し、医療隊を組織し、衛生所（中規模の診療所）を建設し、また科学的な医療技術を採用し、オロチョン族地域に蔓延するいくつかの主要な流行性疾病を徐々に抑えている。

4) 現代化の進行過程にあるオロチョン族の文化的特徴

この40年余りの発展を経て、特に80年代に導入が始まった市場経済体制によって、オロチョン族の物質文化と精神文化に大きな変化が生じた。

- (1) オロチョン族の社会構造の深層部に隠れていた民族感情が、より広範な形式で表現され始めた。伝統的風俗・祭りの儀礼などの大量の復活がそれである。
- (2) 現代化の進行過程が、オロチョン族の伝統的な祭りの祝賀儀礼に新たな内容を加え入れた。オロチョン族は伝統的な篝火節（篝火祭り）（毎年6月18日）を基本として、その上に定期市での交易、科学技術に関する諮詢（コンサルタント・サービス）などを発展させ、篝火祭りを単一の娯楽や消費機能を持つ文化から、交易・文化交流といった商品発展の助けになるような多種機能を持つ文化へと転化させた。
- (3) 商品経済の発展は、オロチョン族の民族文化の伝播を促した。オロチョン族の「白樺樹皮文化」などのオロチョン族が特に必要とするものは、すでにオロチョン族のみのもの

ではなく、オロチョン族の周囲のほかの民族にますます多く受け入れられている。

- (4) オロチョン族文化は、観光資源として、大興安嶺地区の観光事業において日増しに重要な地位を占めるようになってきている。馬に乗ってホロンバイル草原を旅行したり、仙洞の歴史巡りをするといった民族の祭りの活動は、国内外の観光客が参加を期待する活動である。

- (5) オロチョン族の民族意識が強化された。

社会変動は、オロチョン族地区の人の流れや物資の流れ・情報の流れの量をますます増大せしめた。このことが客観的にみて民族の自立意識の発展を促した。オロチョン族の自尊心や名誉感、自らが主人公であるという意識、利害関係における平等意識などは、これまでのいかなる時代より強烈である。

上述のオロチョン族文化の特徴は、オロチョン族文化の現代化の過程における適応性を示している。もちろん、伝統文化の基礎の上に根差した観念や潜在意識の中には、時に負的作用を引き起こすものもいまだに存在している。

民族文化とオロチョン族の発展

- 1) 民族文化に対して「良いものを伸ばし、悪いものを放棄する」という態度を取ることで、はじめてオロチョン族の更なる発展が促進される。
- 2) オロチョン族文化の観念の変革は、その民族の自覚による転換が中心にならなければならない。
- 3) 切入点(切り換えのポイント)を適切に選択することが、オロチョン族文化とオロチョン族の発展を推し進める。

チベット仏教とチベット伝統文化

江 平

中華人民共和国のチベット自治区は、チベット仏教の発祥地である。仏教が七世紀に吐蕃に伝わって以来、1350余年もの、複雑で紆余曲折の多い歴史的過程において、特色のあるチベット仏教が形成され発展してきた。チベットにおいて、それは広範かつ深い影響を有した。中華人民共和国が成立するや即ちに次の方針を確定した。すなわち、チベットの宗教問題に対しては十分に慎重な態度を取らねばならないこと、民衆の宗教信仰を尊重しなければならないこと、そして民族宗教の上層部の人々の団結を勝ち得ることである。チベットが和平解放されて以降、人民政府は宗教信仰の自由の政策を真摯に貫徹実行した。然る後、社会制度の改革を経て、宗教における封建的な特権・抑圧・搾取制度・管理制度を排除して民主的な管理制度を実行に移し、宗教が社会主義と相い適応する道を徐々に歩むよう推進した。宗教が一種の思想信仰や特定の意識形態(イデオロギー)としてチベットに長期にわたって存在しうるであろうことは、いささかも疑いがなくあることである。まさしくそれゆえに、宗教に関わる問題を研究することが必要なのである。ここではチベット仏教とチベット伝統文化の問題のみを取り上げ、いくつかの視点を提起したい。

チベット仏教はチベット伝統文化の重要な構成要素である

チベット族の伝統文化の発展は、チベット族の社会発展の段階性を基準として、原始社会文化・奴隸制社会文化・封建農奴制文化のいくつかの段階に大きく分けることができる。チベット族の先民がそこで生存し発展してきた原始社会は、非常に長い歴史過程であった。この歴史過程において、高く聳え連なる大雪山、怒濤のように流れる大河、幽静で密生した森林、出没し襲いかかる野獣、というチベット族の先民たちを取りまいた環境は、彼等が生活資料を獲得するための源であるとともに大きな災害を被る禍根でもあった。彼等は石器や大自然と戦うための簡単な道具を作ると同時に、簡単な思考様式で自然を認識し始めた。ここにおいてトーテム崇拜や山神・精霊・竜神の神話伝説など最初の宗教観念が生まれた。それは原始社会文化の精神的生産物となり、また、後には本教（ボン教）の形成の基礎を築くことにもなった。本教では、贄普（ツェンポ）が天神が降臨して人間世界を統治することになった支配者であるとみなしている。こうした教えは、本教が奴隸主による統治に奉仕する理論的な拠り所であることを示している。本教徒は、鼓・弓矢・刀剣などを法器とし、人々のために、悪鬼・魔物を駆逐し、神に福を求め、吉凶を占い、福を祈り災いを払い、病を治し死を見送る。さらに、生け贄をささげて神を祭る様々な儀式が頻繁に催され、それは奴隸制社会における人々の社会生活や精神生活の重要な内容となっていた。仏教が伝わる以前の吐蕃の奴隸制社会の発展過程においては、本教は思想の領域において支配的な地位を占め続けた。それは奴隸制度下の社会生活や政治生活・精神生活に対して非常に大きな影響を与え、チベット族の伝統文化の形成と発展に対して重大な作用を及ぼした。そしてそのために当時のチベット族の文化の主体となったのである。

七世紀、仏教はインドと中国の内陸部からの二つの主要な経路を通してチベットへ伝わった。仏教は一つの外来文化として、またインドと中国内陸部の封建文化の特色をも伴いながら、意識の領域において本教文化の独断場であったチベットへと入った。当然、この二つの文化の間には激しい衝突が生じた。仏教は王室と一部の貴族権臣によって支持され崇拝された。しかし本教は、統治者のイデオロギーに留まっていただけでなく、社会の中に深く根を下しており、さらには一種の強大な社会的政治的勢力さえも形成していた。本教の仏教に対する排斥と反対は非常に激烈であり、本教・仏教間のイデオロギー上の陣地争いは、そのいずれかが消滅しなければならない程度にまで達した。この争いは二百余年の時を経た。仏教の思想文化は本教のそれと比較して非常に先進的であったので、社会発展の需要に適応し、統治階級の支持を得て、発展してきた社会制度と次第に結合するようになった。加えて、本教に対する闘争の過程において不断に調整を行った。すなわち、闘争のみならず、ある時は一定程度の妥協をもした。そして、宗教儀式や神格などにおいて、本教のものを少なからず吸収した。こうして、地方化し民族化したチベット仏教が形成され、多くのチベット族人民の信奉を得た。それは、その後の発展において政教合一の道を進んだ。ここにおいて、チベット仏教の思想は水銀が漏れ出るようにチベット族の社会生活や政治生活・精神生活のあらゆる部分に滲み込んだ。哲学・文学・芸術・天文曆算・医薬・建築などの方面やチベット族の風俗習慣・倫理道徳・心理素質などにおいて、仏教の刻印が深く刻み込まれていないものはないばかりで

はなく、イデオロギーの領域においても絶対的な支配的地位ををせめており、チベット伝統文化の重要な構成要素の一部となったのである。

チベット仏教のチベット伝統文化に対する貢献

1) チベット語・チベット文字を豊富にし発展させた。七世紀に吐蕃王朝の英主、松贊幹布(ソツェン・ガムボ)は、統治のための必要性から文臣吞米桑布扎(トゥンミ・サンボタ)などの人々を西域・天竺などの国々へ派遣し、諸国の文字に対する学習と比較研究を進めた。彼等が吐蕃へ戻ってから、梵文(サンスクリット)を下敷きとして、原始チベット文字のはじめての歴史的な規範の改革を行った。これはチベット族文化の発展の歴史において画期的な意義を持つ重大な事業である。チベット文字の史籍の記載によると、それが作られた初期の最も重要な役割は仏教經典の翻訳であった。仏教經典の翻訳は七世紀から始まり十四世紀に至ったが、その間、梵文や漢文の中から大量の經籍が翻訳された。徳格(デルゲ)版の『藏文大藏經』に基づいて数えると、合わせて經典4,570種余りが集められた。それには仏教学以外に、哲学や文学芸術・天文曆算・医薬・工芸など数多くの学問の著作が含まれており、実質的にはチベット文字版の百科全書である。もともとそれほど科学的・規範的ではなかったチベット文字が、この仏教教典の翻訳という「訳語の統一」運動を経て、よりいっそう規範的で科学的なものになったのである。

2) チベット族の文学の発展を推し進めた。仏教の中には数多くの仏教文学作品があったので、仏教經典の翻訳と普及は、チベット族の文学に新たな文体をもたらし、チベット族の文学の発展に新たな境地を切り開いた。

3) チベット族の教育の発展を促進した。十世紀以降、寺院はチベット族の文化教育を独占した。そこは宗教活動の空間であるのみならず、文化的科学的知識を学習し普及させる中心地となった。比較的大きな寺院には顯教・密教学院が設けられていたばかりではなく、因明学院・医方学院・時輪学院も設けられていた。寺院の僧侶は仏教の知識を学ぶ以外に、天文曆算・論理法則・歴史・言語・工芸・医薬・文学芸術などの知識、いわゆる大小五明(学科・知識)の学をも学習した。したがって、僧侶は宗教職能者であったばかりではなく、医者・画家・歴史学者・言語学者・天文曆算学者・文学者などといった知識分子でもあった。歴史上の数多くの著名なチベット族の人材は、その大部分が寺院による育成の中から誕生したのである。

4) 建築・絵画・彫刻が空前の発展を遂げた。仏教の伝来に伴い、仏教を信仰するようになった贊普と奴隸主階級は、仏教寺院の建立を非常に重視した。このため、チベット族の建築・絵画・彫刻・塑像などの芸術もそれに伴って発展した。

チベット仏教のチベット族文化に対する消極的な作用

チベット仏教は、チベット族文化の重要な構成要素として、先に述べたように、チベット族の伝統文化の継承と発展に対して、軽視することのできない積極的作用を及ぼし大きな貢献をした。しかしながら、別の側面ではまた、チベット族文化の発展に対してある程度消極的な作用をも及ぼし

た。甚だしい場合には、ある領域において一定の範囲内でチベット族文化の発展を阻害さえもしたのである。

チベット仏教のチベット族文化に対する消極的な作用は、主に以下の部分において表われている。チベット仏教はそのイデオロギーの領域全体において、人生苦海・世事無常・六道転回・因果応報・修仏解脱という観念主義的な世界観と人生観を宣揚している。そしてチベットの農奴制社会の一切の苦難と不平等をすべて前世の因果応報であるとし、自ら罪業と為し、報いを受けるのだとしている。「服従」や「忍従」を鼓吹することは、現実の一切の不合理な現象に対する反抗と闘争を放棄することである。また、来世のために善業を行うが、最も良いのは、出家して修行し、解脱し成仏し、永遠に巡り来る苦しみから逃れることにあるとしている。こうした観念主義的な世界観の核心は、現生を放棄し来世を追求することにある。かくしてそれは人々の思想を制限し、人々の行動を束縛し、人々が現実の素晴らしい生活を追求することに影響を与え、経済・文化の発展を阻害することとなったのである。

社会改革とエスニシティの諸問題

ミハイル・V・クリューコフ

中国の「左伝」や古代ギリシアのヘロドトスの著作以来、学者たちの多くは伝統的服飾や飲食物などの文化的特徴を、民族集団間の境界やエスニシティそれ自体の主要な客観的基準としてきており、それは現代にいたっても依然として変わらない。19世紀も末になって、こうした側面に始めて重要な突破口が開かれ、エスニシティ理論は、旧態依然とした「客観論」から「主観論」へと転換し、エスニシティは共通の自己意識がその本質的な要素であると強調されるようになった。

非常に残念なことではあるが、スターリンが提起した「民族」の定義は、「共通の経済生活」といったエスニシティの本質とは無関係な現象を取り上げている一方で、自己アイデンティティの重要性は全く軽視していた。このようにそれが提起された当初からすでに時代遅れであったスターリンの定義は、社会主義国家のイデオロギーの状況に終始多大な影響を与え、そのため、こうした国々におけるエスニシティ研究は数十年間停滞した状態に置かれた。

中国の民族学者について言えば、80年代になって始めてスターリンの定義に部分的修正が加えられ始めた。例えば、エスニシティの諸特徴における文化的要素の重要性が再び特別に強調され始めたり、50年代に民族識別工作を行っていたときには、そうした観点が基本的な理論的根拠となっていたなどといわれたりしている。しかし、当時の実際の状況が必ずしもそうではなかったということは、明らかである。もし「客観的な」文化的な特徴を根拠としていたならば、「瑤」や「彝」といった人為的に構成された実体をそれぞれ個別の民族であるとすることは元来、全く不可能であった。

現在の中国では、半世紀前に行われた民族識別を批判的に再検討しようとはしていないが、当時以来の多くの問題が残されていることは明白である。正にこうした理由により、民族識別の理論的根拠を議論することは、今も依然として非常に大きな意義を持っているのである。

さらに今日では、民族集団間の境界を確定するために、民族意識といった「主観的」基準を採用する必要がある、ということのみに問題が存在するのではない。エスニシティ理論研究の現段階においては、エスニシティの本質を認識するための、より有効な別の方法を探す必要があるだろう。というのも、アイデンティティの認識あるいは自己意識といったものは、民族集団との関連においてのみ存在するのではなく、その他の種類の社会的集団との関連においても、多くそれが見いだされるからである。したがって、エスニシティ理論においては、新たな突破口を見つけ出さねばならないであろう。

本稿は以上を踏まえた上で、「文化」と「エスニシティ」との関係に関する問題を解決するために、新たな研究の方向性を提起するものであり、皆様のご教示を期待する。それが従来のアプローチと異なるところは、エスニシティが共有している「客観的」あるいは「主観的」特徴、すなわち、ある民族集団の成員が共有する特徴を立論の出発点にはしておらず、そのかわり、エスニシティとその他の各種の社会的集団との間にいかなる相違点があるのかを認識することを重視している点である。

こうした角度から現在の民族名のリストを検討すると、以前にはしっかりとした理論が欠如していたために生じた誤りが、その中に見受けられる。早晩もう一度民族識別工作を実施する必要があるかないかは、我々が現在直面する改革の情勢によって決定される。人類の社会は、各種の関係が分解され得ない総体をなしており、経済や政治をその出発点としたにしても、必ず、その他のあらゆる側面と関係せざるを得なくなる。したがって、民族関係も改革の対象の一つとならざるを得ない。

中国少数民族の現代化における基本問題の探求

唐 屹

民族とそれに関係する研究は、そもそも感情、学術、政治などにかかわる一種の総合的研究である。

民族及び国家は、本来世界中でいまだに一種の誤りであるとは証明されていない道理—変動—をうけており、それに支配されている。民族と国家の内包と外延は歴史の長大な流れの中で、常に変化しているものである。いわゆる地域・言語・宗教・風俗習慣、更には血縁を共有している民族の内在と外在はすべて、あらゆる時代、あらゆる場所に変化し続けている。

民族・国家・文化そのものが変動の過程にあるというのは、もともとそれらがそうした性質を持つものなのだとすることであり、決して新しく生じた事象なのではない。中国民族・中国国家及び中国文化の誕生・成長・繁栄、更には停滞・衰退・復興などの変化は、まさにこうした変動理論の最も上手く証明するものである。

中国の歴史は様々な民族が打ち立てたそれぞれの王朝によって、先に成立したものを後のものが受けて発展するというかたちで、かつては成長してきたのであり、統一的な多民族国家の形成は長期にわたる歴史的発展の一つの過程である。数多くの諸々の少数民族と主体となる民族—漢族—は

すべて、以前はある一つの時空における中国国家の核心となる力であった。実際には、歴史上の中国の数多くの偉大な王朝及び時代は、少数民族や少数民族の血を大量の含む集団によって成立してきた。ところが、これらの王朝やその民族はいまだかつて中国と対立してはいない。

中華民族は、それぞれに異なった起源と文化的特色をもつ民族集団から次第に発展してきた。初期的な民族集団から、初期的な統一、さらに農業と牧畜業との二つの大きな統一を経て、また各民族の流動・混住・離合集散の発展過程を経て、核心としての漢族を形成し、さらに漢族をその核心として、時には能動的にまた時には受動的にそのほかの東アジアの民族を凝集し、最後に即自的（自在的）な中華民族の実体を形成した。アヘン戦争以降は、列強の抑圧の下に、即時的な民族実体が禍福を分かち合うような民族の実体へと進化してきた。こうした中華民族多元一体格局は史実においても、現状においても、また将来においても発展する。

秦朝の大一統以来、中国が政治的に統一された時期は全体の三分の二を占めており、一方分裂していた時期は三分の一を占めているが、たとえ分裂していた時期においても、分裂していたそれぞれの集団は中国と対立していたわけではなかった。民族の形成においてもこれと同じことが言え、離合集散の中で、たとえ分かれていた時期でも、分かれても未だ裂せず、混しても未だ合せず、という相対的な安定性が出現しており、最後にはまた合へと回帰していった。

中国の国家・民族・文化の歴史的事実や現状の特色をはっきりと認識するに当たっては、以前の西洋社会の「近代ナショナリズム」（modern nationalism）や「民族国家（国民国家）」（nation-state）の観念のみを用いて完全に解釈することは当然できない。

もし「近代ナショナリズム」や「民族国家」の観念を用いて中国・中華民族・中華文化の発展を解釈しなければならないとしても、「多元一体構造」のみを用いることができる。

アヘン戦争以降、中国の国家・民族及び文化は、近代に世界の近代化を創始した西欧文化の衝撃を受けた。いわゆる、衝撃を受けて、秩序の喪失・摩擦・衝突・対立などを引き起こした問題は、内在的・外在的にかかわりなく、すべてすでに存在していたものであり、その激しさの程度の認知は、それぞれの時代によって定められている。言い換えるならば、以前には激しい衝突であると認識されていた問題が、現在ではそれほど激しくないと思われたり、あるいはすでに解決されていたり、甚だしきは解決しようとせずして解決されていたりする。

中国民族は近代に西洋文化の衝撃を受け、それぞれの少数民族と主体となる民族—漢族—などを内部に含む総体としての中華民族が、日本や西洋の軍事的・政治的・経済的・文化的等各種の力による圧力を受けていたと考える必要があり、こうした圧力が当然中国を傷つけた。しかし一方で、中華民族を即時的（自在的）な民族実体から、苦楽を共にする民族実体へと変化させた。激しい列強の圧力の下において、さらに堅く凝集していった。別の角度から見ると、この圧力の下で、中華民族が追及した自由解放は、個体を内在させた総体としての中華民族の自由解放を含んでおり、それぞれの（個体の）少数民族の自由解放と総体としての中華民族の自由解放は密接につながっており、切り離すことはできない。自由解放は、列強の圧迫から脱却し、さらにそれらの水準に追いつこうとするものであった。さらに言うと、実際には、中国少数民族の自由解放は、総体としての中

華民族の解放以前には非常に達成され難いものなのである。

先に述べた、中国の国家・民族・文化的特色を理解するために、今回のシンポジウムの討論の要点を見ておこう。

1) 現在の世界の文化の変動の速度は、以前と比較すると大きい。しかし、こうした大きさは相対的なものである。中華民族の外在及び内在が受ける相互の衝撃はすべて、以前に受けたそうした衝撃と比べると、大きくなっている。外来の衝撃を受け入れるということのみからいえば、外来の西欧文化が中国の主体的民族である漢族及び少数民族に衝撃を与えたといえよう。一般的にいうならば、漢族の受けた衝撃が比較的大きくまた直接的であり、少数民族の受けた衝撃は比較的小さくかつ間接的であった。少数民族が西欧文化の衝撃と影響を受けるのは、往々にして漢族の伝達を通してなのである。

中国の国家・民族・文化による対外的な衝撃についての問題は、ここではひとまずおいておく。

このため、もし中国の少数民族の西欧文化による衝撃と変化の発生を討論しようとするとき、漢民族の要素をしっかりと考慮に入れる必要があり、しかも国家主権の観念は政治のレベルにおいて作用するのみならず、同時に民族と文化のレベルにも影響を及ぼす。

中華人民共和国は、中国の国家・民族・文化の伝統的特色と時代の潮流などに基づいて、民族区域自治の法律と制度を提出し、各民族の平等・団結・共同の繁栄の原則の堅持・実行を現実のものとした。また、その社会主義民族間関係を発展させ、高度な文明・高度な民主をなす社会主義国家を建設した。

台湾側では、少数民族問題に対しては、元来の1946年の中華民族憲法からであろうと、あるいは最近の憲法修正案であろうと、少数民族の地方自治制度・参政権・民族的な地位に対して保障をあたえ、その自治事業・文教経営建設及び人民の生活習慣を保障し、発展させている。

海峡兩岸政府は、それぞれ時代背景や程度が異なる状況の下で、中国の少数民族の様々な権利と事業に対して保障をし、発展を進めている。こうした保障と発展の中で、歴史的な背景と現実的な需要などの要素に基づいて、中華民族のそれぞれの少数民族と主体となる民族の間での、またそれぞれの少数民族間での互助、協力は必然的に生じる。いわゆる中国は土地が広く資源が豊富で、人口が多いということについては、その前者が少数民族地区に比較的相当し、後者が漢族人口を主体とするものを指しているが、漢族が比較的充実した技術・資金・情報などを擁している。その両者の互助・協力、共同繁栄は必然的な過程（途径）であり、当然こうした過程の中で衝突と秩序の喪失が引き起こされる。以前の中国民族の発展の歴史をつぶさに見てみると、前者は必然的に後者を内包しており、後者もまたそれによってとこしえに存在することができた。

2) 統一された多民族国家、あるいは民族の中において、総体性を持った文化やその下位レベルにある主体的文化、それにそれぞれの少数エスニシティ文化が当然出現してくる。こうした現象は様々な形態・様々な程度・様々な内包などの方式を以て示すことができる。たとえ比較的単一な国家や民族、文化の中においても、様々な差異が存在し得、問題は、総体性・主体性・個性の三者の間での同質と差異が妥当な強調を獲得できるかどうかにある。それが可能であればこそ、相対性

が長く維持され、不可能であれば、秩序の崩壊・衝突・更には分裂さえも招くことになる。中国の歴史においては、総体性は常に存在しており、また作用してきたが、一方で個別的な差異もずっと存在してきた。

中央の権力が強力であった時には、総体（一体化する）力の作用が大きく、個別的な力はそれに包み込まれて弱くなった。その長い歴史の発展中で、それぞれの個別存在の間や個別存在と主体的な存在との間で、相互に影響を与え、浸透し合ったことにより、総体は拡大し、主体も拡大し、主体は変形し、個体も変形し、更には個体の消滅などさえもが、時空の変化に合わせて変化した。

文化的レベルから見ると、総体文化の包容性は非常に重要であり、包容性を欠いた文化は長年にわたって存在しにくい。中国文化は非常に包容性を持ったものであり、中国の少数民族の文化にいたっても、この種の包容性を備えており、このことがつまり、中国の民族と文化が連綿と発展してきた主な要因の一つである。

中国文化のこうした性質を理解することによって、いわゆる文化の二層次説を、非常に容易に分析し、調和させることができる。中国全体としての国家や民族の歴史や文化と、個別の歴史や文化とは必ずしも衝突するわけではない。例えば、元史は元王朝やモンゴルの歴史であるとともに、中国や中国の民族の歴史と関係した部分でもある。また、清史は満族や清王朝の歴史であるとともに、中国及び中国の民族の歴史に関連した部分でもある。元代と清代の蒙・満両王朝は両者とも、中国の正統的王朝を自認しており、その他の民族もその正統的な地位を承認している。過去においてもそうであったし、現在もそうであるし、また将来もそうである。

国語（普通語）と民族言語の両者は決して明らかに対立するものではなく、とくにここ数年来はそれが時代の趨勢であり、海峡の兩岸当局は国語（普通語）を推進する際に、法律や規定を以て民族言語の継承と使用を保障している。こうした保障の実際の運用状況は様々であるものの、大方の方向性は一方で国語（普通語）を推進し、もう一方で民族言語を保存し発展させるよう、できる限りの立法化を行っている。

3) 文化が民族のアイデンティティなどの問題を再組織化し、新たに考え直すという基礎の上にも、先に述べたのと全く同様の総体・主体・個別という三層の関係の相互作用がある。三者の間関係は決して明らかに対立するものではなく、少数民族のアイデンティティとその総体としての中華民族に対するアイデンティティも、敵対関係にあつて調和不可能であるというわけではない。世界の先進国における多民族の互助協力や調和的並存の例はすこぶる多く、こうした調和が成功するか否かは総体としての民族、とくに主体となる民族の発展の盛衰という視点から見れば、現代はなおさら経済発展が重要な要素となる。これをつぶさに見ると、中国の歴史は中央王朝の繁栄であり、つまり四方の辺境の地の帰順である。中原版図の動揺は、つまり四方の辺境の離反である。繁栄の成否、経済の優先は、即ち海峡兩岸当局が経済発展を強力に推し進めるための基本的原因となる。

前述の中国国家・民族・文化などの総体性・主体性・個別性の三つの層次から、中国の少数民族の近代化を見つめる。そうすることで我々は人口・文化・教育及び民族間関係などの方面から以下

のことを詳細に検討することができる。

- (1) 人口：少数民族人口・少数民族地区人口・漢族人口・全国の総人口の規模と質的な差異；人口と生態関係，民族矛盾；民族人口政策及び国内移住等の問題。
- (2) 文化：中国の民族文化の特色；民族文化と民族意識；民族文化と近代化の調整・適応など。
- (3) 教育：民族教育の意義・性質・政策・発展；教育と宗教；教育と近代化など。
- (4) 民族間関係：民族間関係の発展過程；現代の民族的自覚と民族間関係；大民族主義と民族の分裂主義など。

現代中国の少数民族の近代化の基本的な問題は，非常に雑然としているというべきであり，前述の人口・文化・教育及び民族間関係などは，ただそのうちの一部分にすぎない。中国少数民族の近代化は，中国の主体的民族である漢族の近代化や中国民族の総体としての近代化と全く軌を一にするものであり，その基礎は経済が発展し得るか否かにかかっている。経済の発展が良好であれば，四つの現代化を施行することができ，いわゆる「社会的生産力を発展させることは，新たな時代の民族工作の根本的な任務」であり，経済開発は少数民族を内包する当面の中国の近代化問題の基本である。

満族の社会・文化の変革と民族の発展

果 洪昇

満族は悠久の歴史と文化を有しており，中国史上に輝かしい貢献をした少数民族である。先秦の肅慎，漢・三国時代の挹婁，北朝時代の勿吉，隋唐時代の靺鞨，遼・宋・元・明時代の女真，これらはすべて満族の祖先である。明朝中期，女真は建州・海西・東海の三部に分かれており，中国東北の広大な地域に生活していた。明朝に冊封された建州三衛指揮使の末裔であるヌルハチは，1583年に兵を挙げ，11年の歳月を要して女真の各部を統一し，ニル（牛録，八旗の基礎的単位）を単位として屯田を行ない，八旗制度を確立し，満州文字を新しく作り，1616年（明の万暦44年）に後金政権を打ち立てた。1635年，ホンタイジが族名を正式に満洲とし，1636年，後金を大清と改めた。また，蒙古八旗，漢軍八旗を編成し，八旗制度を拡大した。そして1644年に入関し，中原に入り支配者となった。その後，清朝の全国統治は267年間に及んだ。1911年，辛亥革命によって清朝の統治が打ち倒された。1949年，新中国が成立し，民族を抑圧する制度を廃止した。満族は他の各民族とともに，真の一律平等を実現した。満族が比較的集居する地域の各レベルの人民代表大会はすべて自民族の代表を有し，国家の各レベルの政府の管理業務に参加した。全国に11の満族自治県が立て続けに作られ，他のそれぞれの少数民族と同様に，区域自治の権利を享受している。ヌルハチが後金を樹立し満族が正式にその名を定めてから今に至るまで400年にもなろうとしているが，その間，満族社会には四度の大変革が生じ，それらは民族文化全体に対し非常に大きな影響を及ぼした。民族文化の変革に伴って満族は，中国の各少数民族の中でも最も開放的で，祖国の発展に重要な貢献をした民族となった。

社会と文化の最初の大変革は，ヌルハチとホンタイジの時期に起こっている。ヌルハチは女真の

各部を統一してから、元来の「ニル」を完備したその基礎の上に八旗制度を創設した。また、ホンタイジは八旗蒙古、八旗漢軍の組織の編成を完成させた。この社会組織は、行政、軍事、生産の三方面の機能を合わせ持っており、社会経済の発展を促進して、農業生産が経済生活において重要な地位を占めるようにならしめた。後金の奴隸主政権の統治下の満族社会においては、様々な要因の作用と影響によって、封建的關係が徐々に形成された。ヌルハチの時代に、モンゴル文字と満語の語音を基礎として、満文（満洲文字）が新たに作られた。ホンタイジの時期には、それはさらに完成度を高め、満族の言語・文字が形成された。その上、漢族の史書や典籍、文学作品が大量に翻訳された。シャーマニズムの発展と同時に、仏教、ラマ教も満洲に伝わってきた。農業の発展によって、馬術や弓術に優れているという生活面での特徴が大きな影響を受けた。これにともない服飾も次第に変化し、礼俗、建築、音楽、歌舞も他民族の要素を吸収していった。この時期は、満族がその名を得、清朝を樹立した時期であり、また社会が奴隸制から封建制へと変化し、民族と文化が大きく発展した時期である。

社会と文化の第二の大変革期は、清朝が中原に進軍して全国を統治し始めた時期である。1644年、清軍は機に乗じて入関し、全国を統治する王朝を建国した。八旗の兵士は全国を転戦し、主要な城鎮に駐屯して防備にあたった。こうして満族はもともとの東北地域での集居から全国的規模での大分散・小集居へ、という分布上の特徴を形成していった。満族貴族の政権は各民族の人民を奴隸のように酷使し、人民に髪を剃り服を替えるように迫り、満化の目的を達成した。また、抵抗を厳しく弾圧し、民族対立を不断に激化させた。康熙帝が帝位を継承してからは、民族対立を緩和する政策を徐々に実施した。農業が発展し、社会の生産力は著しく向上し、人々の生活は安定した。満族の封建荘園制度は次第に地主経済へと移行し、満族全体の社会、経済、文化生活が、次第に漢族の発展水準に近付いた。文化の面では、漢族の封建思想文化を大量に吸収し、漢語を通用させ、儒家の倫理観念が次第に共通の道徳基準となった。満人は文学・芸術・科学技術の領域において人材を輩出し、しかも優れた成果を挙げた。この時期には、満族が全国を統治し、漢民族の先進的な文化を吸収し、祖国の文化を豊富にし発展させるために輝かしい貢献をしたのである。

社会と文化の第三の変革期は、清末から辛亥革命に至る時期である。清朝中期以降、貴族統治者の腐敗が内外の矛盾の激化を引き起こした。辛亥革命は清朝を打倒し、八旗制度を廃止し、満族貴族の統治者としての地位を改変した。この大変革は、満族の社会生活の様々な方面に非常に大きな変化を生じさせた。多くの知識人が封建的で腐敗した統治に反対する愛国者や革命者となった。それらの中には社会科学や自然科学、文化や芸術の学者・専門家となる者や、改良派としての道を歩む者もいた。貴族のなかには己れの生計の道を探し求めて奔走する者もいた。全国各地に居住する満族民衆は、社会生活のそれぞれの分野においても次第に漢族に近づき、相互に優れた要素を吸収し保持した。満族文化と漢族文化の相互浸透は、それぞれの民族の文化の宝庫を豊かにした。歴史は、満族をして全国を統治する地位にまでに高めたが、また、満族が少数民族の中で最も開放的な民族となることをも決定づけた。この時期の変革において満族は大量に漢族の中に融合した。漢民族も、ある方面においては陋習を变革し、満族文化の秀でた部分を吸収して中華の各民族の共同の

財産としたのである。

社会と文化の第四の変革期は、新中国の成立から改革開放に至るまでの数十年の期間である。満族は「排満」の影響から脱却し、各民族の真の一律平等を実現し、自治の権利を享受するに至った。全国で社会主義の現代化が実現される過程において、満族の各階層の人民は自分の役割を十分に果たした。満族の人口は200万人余りから900万人にまで回復・発展し、中国第二の規模を持つ少数民族となった。ここ一世紀の変革において、満族は多くの特徴を失ったが、しかしその民族文化はこの数十年の間で十分に発揚された。その民族意識と民族的アイデンティティは今後とも長く存在し続けることになる。現在の社会主義市場経済の衝撃の下、満族文化はさらに発展を遂げ、価値と品位を高め、中国各民族の文化の重要な構成部分となった。満族は中華民族大家族の一構成員であり、今後も長期にわたって存在し発展していくことであろう。

若干の分析と結論：1) 満族は悠久の歴史と輝かしい文化を有する民族であり、その上層部は200年余りにわたって全国を統治し、祖国の政治・経済・社会・文化を豊かにした。満族は全体として中国の歴史に対し非常に優れた貢献をし、中華民族大家族の重要な一構成員である。2) 歴史は、満族をして全国を統治する地位にまで高めたが、同時にまた、満族が少数民族において最も開放的な民族となることをも決定づけた。満族貴族が全国を統治し始めた時期に、他民族を「満化」させようとした。結果的には、発展した民族の先進的な制度や思想、文化を吸収しないわけにはいかなかった。こうして統治者としての自己の地位を揺るぎないものにするという目的を達成した。貴族の腐敗によって清朝政権は滅亡する結末となったが、全国各地に分布していた満族は、人口の多い漢民族の大海の中で生活するうちに最も開放的な民族を自ずと形成した。新中国の成立以後の数十年間で、民族は発展し、民族文化は回復・発揚した。しかし、保守的になることが非常に少なく、先進的な思想と科学技術を吸収することに長けており、そうすることで自らを豊富にし、発展させ、自覚的に民族を開放的にした。したがって、満族は大きな希望のある大きな貢献をなす民族である。3) 辛亥革命以後、満族はその特徴を失い、とくに民族の言語・文字は、満族においてすでに歴史となった。しかしながら民族の伝統文化の優秀な部分はそのまま維持されてきており、しかも、それは今やまさに発揚されつつある。民族意識と民族的アイデンティティはさらに長期にわたって存続することになる。満族は全国の各民族とともに中華民族の大家族を構成し、今後も長きにわたって存在・発展して行く。4) 民族は一つの歴史的範疇に属するもので、その誕生、形成、発展、消滅には法則がある。民族は、人々の社会的な集団として、階級や国家の生成に伴って形成される。国家や階級が消滅した後に、民族もはじめて消滅し得るのであろう。しかし、こうした民族の消滅は、ある一つの民族による同化ではなく、非常に長い歴史の中で達成される各民族の融合なのである。満族の社会と文化の変革における変化は、民族の歴史的発展法則に完全に一致しており、他の民族の発展にとってモデルを提供している。

少数民族文化与社会动态

—从东亚细亚的观点—

〈论文摘要〉

目 录

关于 21 世纪中国少数民族的若干考察	
纠纷还是和解?	托马斯 海伯勒 322
台灣南島民族的文化復振與族群認同	
1980 到 1995 年	蔣 斌 322
人類學家與原住民研究	
一些個人的經歷與反思	喬 健 323
现代化过程中的少数民族文化	郝 时远 323
中国的国家认同和多文化主义	
三个穆斯林少数民族间的分节的阶层结构	杜 磊 324
关于中国南部少数民族的诸问题	
以云南为例	松本 光太郎 325
少数民族怎麼学做中国人?	
民族教育和中国三个少数民族的自我意识	贺 美德 326
民族社会发展与民族文化变迁	金 炳镐 327
有关现代阿伊努民族自立运动的诸问题	
从近代的同化政策到现在的新法制定议论	大塚 和义 328
高加索高地少数民族的社会经济变迁	啊儒就诺甫 330
观光为主要的经济发展与文化	
以云南省大理盆地为例	横山 广子 332
鄂伦春民族文化与现代化	洪 时荣 334
藏传佛教与西藏传统文化	江 平 336
社会改革与认同的诸问题	刘 克甫 338
中國少數民族現代化基本問題探索	唐 屹 338
满族社会文化变革与民族的发展	果 洪升 341

关于 21 世纪中国少数民族的若干考察

纠纷还是和解？

托马斯 海伯勒

近十年世界性的民族冲突在激化，这一问题已成为多民族国家内部政治不安定的主要原因之一。同政治、经济、文化、宗教及历史等有关的冲突一样，民族复兴也成为了主要的原因。例如象苏联及东欧的历史经验表明，同思想体系的评价、经济和社会的变化一样民族复兴过程的结果和影响也给多民族国家的中国带来了新的民族挑战。这与苏联那样的多民族国家的崩溃及同中国相邻的中亚的民族主义的扩大和中国国内的状况（自由化、开放政策、社会变化）有关。

社会科学研究者们长期以来一直认为，随着经济的发展和现代化，不同社会间的宗教、民族和文化的差异可以被统一化。他们认为现代化的发展结果，将导致民族差异的消减。但相反地，事实上却引起了民族复兴和民族族群性的高涨。这种情况在中国也是同样的，近十年几乎所有的民族都表现出了民族复兴和民族族群性的高涨。所以，做为中国为了防止长期性的民族冲突，有必要寻找出解决对立的新的方法。这篇报告的实际出发点是披露可能产生的民族冲突的过程，并寻找解决的方法。

因此，本文试图通过四个例子，来说明中国在经济和社会的变化过程中民族冲突的主要原因：(1) 集团性的记忆：是官方对少数民族的公认形象，中国的不同民族集团的历史评价和经验，给它们对现在多数民族同少数民族关系带来的影响；(2) 政治性的问题：地方自治政策上的欠缺及民族族群性的高涨；(3) 经济性的问题：发展的差距；(4) 类似多数民族 / 少数民族的文化评价等的文化问题。最后，为了讨论，本文提出一些缓和民族冲突的建议。

台灣南島民族的文化復振與族群認同

1980 到 1995 年

蔣 斌

1980 到 1995 的 15 年間，台灣的政治社會與文化各個方面都經歷了一系列重大的轉變。也就是在這 15 年間，台灣島上說南島語的原住民族在族群與文化意識方面，進入了一個新的發展階段。本文的主要目的，在探討過去 15 年台灣原住民運動中，是哪些南島文化面向特別受到強調？為何在華人殖民體制的社會文化脈絡中，這些特定的文化面向會被台灣原住民選擇作為建立族群認同的表徵？

本文包含二個部分。第一部分簡短回顧過去一世紀日本人與華人在台灣的殖民統治，特別是一些對於當前情勢仍然具有深遠影響的政策，例如保留地制度與教育政策等。同時，在這一部分，我會簡短地回顧台灣在解嚴前後與原住民相關的主要社會事件，這些事件如何催生出一個全面性的台灣原住民運動。第二部分討論台灣原住民不同族群認同的過程中，特別倚重的一些文化表徵。這些文化表徵包括：(1) 恢復使用個人與團體的南島語名氏；(2) 年度部落祭儀及若干（但非全部）個人生命儀禮的擴大舉行；(3) 對於傳統生計中若干（而非全部）面向的強調；(4) 若干視覺與表演藝術形式超越固有族群文化脈絡的傳佈與發揚。我將透過這些文化脈絡中的意義，與它們在華人殖民的特殊情境的“再脈絡化”兩個方面，來討論這些表徵之所以能夠作為有效的族群象徵，其基礎何在。

人類學者與原住民研究

一些個人的經歷與反思

喬健

對於斷續研究台灣少數族群逾四十年的筆者。在近十年來卻在其中看到一種嶄新甚至是陌生的局面，這便是澎湃而起的「台灣原住民運動」，而後者又是正在全球各地如火如荼地進行的原住民運動的一部份；他們有著共同的訴求：

- (1) 對於其祖先原居住土地之所有權或使用權的主張。
- (2) 對於其族群的歷史與文化的重新建構。
- (3) 國家權力共享及族群自決的權利。

這些訴求往往是透過劇烈的政治抗爭來表達。抗爭的對象主要是當地的強勢族群與政府。以研究少數族群為專業的人類學家，在台灣，過去一直受到被研究者尊重。但在新的原住民運動中卻被質疑其從事研究的動機與立場。

面對抗爭所產生的緊張局勢與不斷受到被研究者質疑的尷尬處境，提出何種相應之道及如何自處是台灣人類學家目前最迫切的問題。筆者在此提出兩個解決方案：(1) 多元文化與(2) 文化諮詢，同時詳細討論：(1) 在落實「多元文化」主張時如何對文化的內涵與層次重新界定以及如何解決一系列有關的理論與實際的問題，(2) 文化諮詢的範疇與方法為何，以及(3) 作為文化諮詢者的人類學家扮演何種新的角色及如何重新釐定其專業倫理。

现代化过程中的少数民族文化

郝时远

在人类社会即将跨入 21 世纪之际，现代化的理念正以它前所未有的广泛实践推动着世界各国和各民族的发展。

亚洲崛起，东亚地区经济迅速发展，环太平洋经济圈的形成及其对全球经济一体化的推动作用，使东亚发展中国家为主导的现代化进程表现出迅速发展和剧烈变动的社会特点。市场经济的普遍化、商品流通的国际化、生活方式的趋同化，使人们对物质生活现代化水平的衡量标准趋于一致。同时，又面临现代化过程中传统文化的变迁和适应的矛盾。

现代化过程促进着各个国家和各个民族开放、交流、借鉴和吸收，国际之间、族际之间的共性因素显著增多。但是这并不意味着民族文化多样性的消弥。文化的整合过程远比经济生活趋同要复杂和漫长，这是由人类社会民族过程的长期性决定的。

在当代世界的国家中，多民族国家占绝大多数。国家现代化的过程将极大地促进国内少数民族的经济文化发展。各民族经济发展水平的趋同和经济生活融通，将对国家整合和国内各民族的凝聚提供坚实物质基础。与此同时，少数民族文化的保留、传承、发展乃至与社会主流文化的融汇，将经历从自觉到自然的发展过程。

20 世纪是政治民族主义广泛兴起的时期，以国家独立、民族解放为主要特征的民族主义运动随着西方殖民主义体系的瓦解形成高潮，并在冷战格局消失后随着霸权主义的衰落进行了“最后的释放”；20 世纪 80 年代以来，随着经济发展的“无国界化”，经济民族主义正在为日益广泛的国际合作和统一

市场原则所溶解；而文化民族主义在这一剧烈变动时代则处于方兴未艾的上升时期，并将构成 21 世纪人类社会民族主义反应的主流。欧美发达国家少数民族文化自觉复兴的反映，发达国家之间对文化渗透的抵制，发展中国家对殖民文化残余的清除和文化霸权主义的反对，都在证明着这一趋向。

对于人类社会的民族过程来说，地域观念的改变、经济生活的融通，都在促进着各民族的相互接近和逐步融合。民族之间的区别也因此越来越体现在文化的多样性方面，而且民族文化也将作为民族自尊的主要依托为各民族所珍视。东亚发展中国家在现代化进程中已经清醒的认识现代化并非西方化，每一个国家要根据各自的国情特点和文化传统来选择现代化的发展道路和模式。对于多民族国家的少数民族而言，现代化的过程也必须遵循这一原则，即实事求是的原则。

国际关系中文化民族主义的表现，在多民族国家的族际关系中也会有所反映。这种反映的程度取决于多民族国家能否正确有效的调节各民族之间的关系。这就需要科学的民族观和正确的民族政策。

民族观要解决人们对民族现象及其过程的科学认识问题，民族政策则要具体地解决民族问题，从而使人类社会的民族过程在社会进步的推动下遵循其自身的规律发展。民族只有在充分发展的基础上才能实现自觉的融合，民族只有在自觉融合的前提下才能实现自然的消亡。民族文化的个性，将在这一过程中相互融汇、吸收。

中国的国家认同和多文化主义

三个穆斯林少数民族间的分节的阶层结构

杜 磊

这篇文章指出，中国的少数民族和国家认同，是遵循某些可认明的历史途径依存的、并且国家提倡的多文化主义和多民族主义政策所制约的。通过比较三个穆斯林少数民族：回族、维吾尔族、哈萨克族，本文指出中国的国家及民族的认同是受国家政治和地方对认同的了解两方面影响的。这些途径是，经过按照人类学理论归纳的分节的阶层模式能够描绘的关系和对立而进行的。本文试图指出，选择的为什么是特定的途径，而不是其它的。

通过教育、历史和经济的比较研究，我将证明中国的民族认同的途径依存，受辩证和对话的关系影响。

根据国家性的统计调查、采访和实地调查为基础的数据可知：回族、维吾尔族、哈萨克族的经济和文化的发展是遵循同他们的民族和宗教背景有特定关系的特定途径实现的。这些途径表明，三个穆斯林集团虽然有很多相同点，但是在一些重要方面存在着差异。同样各民族内部也可因宗教、民族和地方的境界而细分化。实际上，排除了他们与外界的关系及他们自身内部的相互关系，是不可能理解他们现时的认同观的表达。从这些关系可以了解，现代中国的这三个或其他穆斯林少数民族不仅仅共有不少多样认同，并且，用泛伊斯兰主义理论及泛土耳其主义理论不能充分了解他们的情况。最后，我将指出为什么我认为特别是在冷战後的今天，途径依存和分节的阶层理论，有助于理解现代中国和其它现代国家的越来越重要而复兴的民族和国家认同现象。

关于中国南部少数民族的诸问题

以云南为例

松本 光太郎

处于冻结状态的民族识别工作

社会主义中国采取了在国民党时代没有存在的政策，即政治上承认了少数民族的权利。作为实现这一政策的基础所进行的则是民族识别工作。进行这一工作的理由是：欲实施民族政策时，其对象却不明确，因此需要进行民族识别工作。通过这一工作得到承认的少数民族至今为止有 55 个。但是，由于一些本来并非少数民族的人为了在独生子女政策上得到优惠，也要求得到承认，所以，民族识别工作于 1987 年暂时中止，至今仍处于冻结状态。

如果仅从国民统一论的观点来看，也许有人会认为，民族识别工作已无必要进行，但是，如从民族识别的实际状况来看，还不能说这一题已完全解决了。这可以从以下两个原因来考虑。

第一，1950 年代以来所进行的民族识别工作尚未完成。如：居住于云南、四川两省交界地区的纳西族被国家承认为纳西族，但在地方上则分别被四川省认定为蒙古族，被云南省认定为纳西族。云南省境内的纳西族中有些集团还要求将纳西族的旧称“摩梭”作为其民族的名称，对于这些要求，政府方面不能轻易地给予满足。最初被归入彝族的基诺族，由于研究者及民族自身的强烈愿望而被承认为单一民族，但它实际上与哈尼族很相近。据说楚雄彝族自治州的彝族中有相当一部分集团，要求政府承认其为傣傣族。在这些问题的背景中，存在着如下的问题：彝语支的民族及语言的分类缺乏明显的根据；民族内部语言差异相当大的彝族为什么被认定为一个民族，而彝族、哈尼族、傣傣族等为什么被分别认定为不同的民族，对这一问题没有进行合理的解释。

第二个问题是对少数民族的歧视及不平等现象尚未完全消除。如：居住在广西、广东、云南等地区的壮族，解放前他们不认为自己是少数民族，而将自己看作汉族。通过民族识别工作，现在是人口约 1500 万的中国最大的少数民族，但壮族人还是缺乏作为少数民族的自尊心。而海南省的临高人尽管实际上讲的是壮语，但他们至今不愿承认自己是壮族人。这是因为主要住在广州市的临高人干部和知识分子惧怕对少数民族歧视。

对于民族识别工作的问题，不应该仅仅将其看作是起因于民族优惠问题，而应该从实现民族平等这一观点来重新认识民族识别工作的问题。

经济差距的扩大

生产责任制的实施，一方面提高了农民对生产的积极性，另一方面也逐渐拉大了汉族地区与少数民族地区之间在经济上的差距。“民族平等政策”的含义也正在从为实现民族平等而进行的援助这一含义逐渐向各民族间的完全的自由竞争这一含义转变。中国的学者常常将这种差距扩大用“马太效应”（富有的越来越富有，贫穷的越来越贫穷）这一概念来表达。

这种差距扩大的原因之一是围绕少数民族地区的资源开发问题所产生的国营企业与当地居民之间的利害冲突。笔者认为，这—问题是改革开放以后才开始表面化的，但是“二元结构”这一状况则是从“大跃进”到“文化大革命”这一时期就已形成的了。

正如费孝通对“从输血到造血”这一口号所作的解释一样，不能将改革开放所带来的所有的变化都看作是消极的东西。要想实现费孝通所说的“造血”，最需要的是一定程度的资源开发权及帮助少数民族持续发展的援助。

环境问题

环境破坏在不同程度上已经成为各少数民族地区的一个共同问题。以云南省西双版纳为例，西双版纳地区的森林覆盖率从解放初期的60%已下降到现在的20%。其主要原因是，“大跃进”和“文革”期间，无视生态的多样性和农业生产上的现实性的做法使环境受到很大的破坏，但在向以林业为中心的多种经营转变后，仍然对环境进行了更大的破坏。如果仅从表面现象来看这种环境破坏的严重性，似乎可以得出这样一个结论：中国经济发展的方式，尽管各个时期有所不同，但都是建立在对自然环境的彻底剥夺这一基础之上的。但是，我觉得这莫如说是中国政治的一种反映，真正的原因在于，“大跃进”和“文革”结束以后，中国也是以“拜金主义”的方式来对待市场经济的。

“文革”时代对伊斯兰教的镇压

日本的文化人类学者向来不太重视的一个问题就是，云南的回族、伊斯兰教徒的问题。回族的问题实际上可以看作是云南最大的民族问题。于“文革”即将结束的1975年所发生的“沙甸事件”中，至少有一千多名回族人被定上“反革命”的罪名，并遭到坦克炮火的攻击而不幸死亡。虽然政府于1979年对此事件进行了重新评价，并为死者恢复了名誉，但到目前为止，各地仍不断发生冲突。对于当地的学者来说，回族问题也是一个他们所不太愿意接触的问题，“回族可怕”这一印象还未消除。另一方面，在各地最近又恢复了阿拉伯语的教育，在中国整体上也有一种开展对伊斯兰教的研究，重新认识伊斯兰教的动向。

少数民族怎么学做中国人？

民族教育和中国三个少数民族的自我意识

贺美德

在中国各地共产党已经建立了国家教育制度。在少数民族地区，教育的一个主要目的是宣传中华民族，让少数民族和中华民族打成一片。中国政府建立了特别的民族教育方针主要是为了提高少数民族的教育水平，而同时让他们接受中国政府关于中华民族、民族团结的思想。中国教育制度的课程很标准化，关于怎么做“中华民族”和做“少数民族”的意义和内容全国的学生都学一样的课程。中国学校必需宣传政府关于中华民族和民族团结的意识形态。同时很多少数民族地区的学校由于不是课程的一部分，少数民族自己的语言、历史和文化价值都被撇在一边。

在分析教育内容的民族形象和国家形象的基础上，本文章要介绍和讨论的是为什么不一样的民族对学校关于民族和中华民族的内容有不一样的看法和反应。文章的焦点是云南省的纳西族、傣族（西双版纳地区）和哈尼族（西双版纳地区）的反应。文章辩论说：国家统一化的民族教育不一定能够成功地使少数民族学生和中华民族、共产党及国家打成一片。因为正规的教育内容经常不包括少数民族

自己的语言、历史和风俗习惯，所以有时，教育的结构与教育的目的是相违的，比如使少数民族更强调民族自我意识和文化区别。由于不一样的历史、宗教、民族关系等等，国家教育只会影响民族自我意识，不会决定或者控制民族自我意识的内容。本文章通过上述的讨论来比较统一的民族教育对不一样的少数民族的自我意识会有什么样的影响和意义。

民族社会发展与民族文化变迁

金炳镐

东亚少数民族处在社会转型与文化接变的时期

当今世界处在冷战时代结束，正朝着建立世界新秩序民族时期。和平与发展成为时代的潮流。

目前世界上经济发展最快的东亚地区，正面临着民族社会尤其是少数民族社会的文化冲突和社会转型问题。

中国改革、开放十多年来，中国各民族，尤其是少数民族遇到了传统文化与现代文明的冲突与协调问题，经历着保存优秀的传统文化和吸收先进的现代文化的进程。特别是在实行社会主义市场经济条件下，各少数民族社会的社会发展与文化变迁的转型与协调尤其引人注目。

中国各少数民族适应并参与社会主义市场经济方式和程度，各具特色。

中国各少数民族在社会转型中遇到的困难和问题，也各式各样，多少轻重有所差别。

民族社会发展与社会转型

民族的社会，社会的民族，民族与社会是密切联系着的。民族的发展是受社会发展规律制约的。社会的发展决定民族的发展。多民族国家中的民族发展，是与社会发展、民族关系的发展密切联系着的。

民族发展，是在民族自身因素，民族所处的自然因素，社会因素的综合协调作用下，民族自身的整个内部结构、素质和诸种外在特征以及民族之间社会关系的不断调整更新、协调适应协调适应，推进民族纵向质的演进和横向量的扩展，综合实现民族的民族性发展、社会性发展、人的发展的过程，本质上是民族生存和演进的质和量的提高。

民族的发展，也是民族社会的发展。当前东亚地区少数民族社会有在比较充分的民族社会发展基础上，伴随适当的民族文化保存和它民族文化吸纳的方式方法，才能比较好地、比较快的实现社会转型过程。

良好的社会转型过程所经历阵痛相对少一些，所需的时间也相对少一些，但是，这种良好的社会转型所需的基本的前提条件比较复杂一些，包括政治的、经济的、文化的、社会等各方面的条件。

社会转型受社会各种因素的制约。首先是受整个时代环境和周围社会环境的影响。当今冷战状态结束，都在和平的环境中争取发展，东亚地区以惊人的高速发展，整个中国在全面开放的形势下迅速发展。这些都对中国少数民族社会发展来说，是个良好社会和时代环境。其次是受国家政策因素的影响，可以说，政策也是一种环境，也是一种资源。采取有利于少数民族社会发展的优待的、特殊灵活的政策，来帮助少数民族社会发展。再次是某个具体民族的生活空间和居住形式、状态对民族社会发展的

影响。比如，农业区、牧业区、城市工业区、民族聚居地区、杂居地区、散居地区，都对我国少数民族的社会发展产生不同的影响。

民族文化变迁对民族社会发展的作用

每个民族都是在与其他民族的交往，包括文化交流、交融过程中发展的。每个民族的发展都有一定的文化背景。民族文化背景对民族的发展或产生促进作用，或产生消极作用。这种民族文化背景，实际上也是过去民族间文化交流、交融因素凝结的结果。今天的民族发展虽以这种民族文化为背景，但它又不能完全杜绝其他民族文化的影响。因此，结果只能是以原有的民族文化为主导，吸纳他民族文化为新的民族文化背景的一部分。民族文化的变迁、民族文化的真正发展，历来都是在保持本民族特点，吸收它民族文化的基础上实现的。吸收它民族文化优秀部分，保持本民族文化的精髓部分，并将二者交融消化，变成本民族文化的新的组成部分。这就是民族文化的变迁过程。

民族文化变迁对民族社会发展起着重要的作用。对东亚地区少数民族、对中国少数民族来说，也都是这样。

有关现代阿伊努民族自立运动的诸问题

从近代的同化政策到现在的新法制定议论

大塚 和义

现代阿伊努的民族权利获得运动

近年来，阿伊努为了争取获得民族自立权利而持续展开各种运动。阿伊努至少在以下几个方面进行了努力：鉴于自古居住于日本列岛北部，孕育了具有特色的文化这一历史事实，呼吁承认阿伊努的先住权，消除民族歧视，改变经济差距，要求制定传统文化能够顺利继承的各项政策，并且创设能够根据阿伊努的主体意志而加以实施的自立化基金。联合国将1993年作为“国际先住民年”，又将自94年起的10年间定为“世界先住民的国际10年”等。在国际性的先住民运动高涨，加之国内连立政权的诞生之下，1995年3月，“关于乌塔里对策应有之方法的有识者恳谈会（乌塔里恳）”，作为五十岚官房长官的私人咨询机构成立了。1996年4月，“乌塔里恳”的报告被提交。其内容是，与先行宪法抵触的阿伊努先住权，虽然未被明确承认，但明确承认日本列岛的阿伊努是自成系统的民族，认识其先住性，并且反省近代国家日本由于明显地歧视阿伊努，以及经济上的穷困所带来的痛苦，以被否定的文化之再生为轴，为实施民族的各项政策而要求立法。为此，政府设置了“关于阿伊努政策实施的有关省厅联席会议”（5月），持续研究讨论的结果，在1997年度的预算案中，添加进以文化政策为中心的各项政策实施的内容。于是，自1899年（明治32年）制定以来虽几度修改，但仍作为先行法存在的“北海道旧土人保护法”，将被“有关阿伊努民族之法律（阿伊努新法）”取代。该法预计将由1997年度的通常国会审议。该法律从实质上来，可以说是日本的第一部民族法，其现代意义多种多样。

近代以前的阿伊努政策

本州的和人，真正地对虾夷地“阿伊努莫西里（阿伊努的大地）”进行资源掠夺的体制确立，是以1550年同阿伊努首长缔结“夷狄商船往来之法度”而将虾夷地（现在的北海道）的一部分殖民地化而开始的。由于这一协定，和人确保了不受阿夷努人攻击的占有的交易据点。那以后，近代以前的虾夷

地支配，主要是对阿伊努进行大规模有组织的资源掠夺，甚至强迫使役他们，对阿伊努施加过重的负担。但是，基本上没到破坏，否定阿伊努语言、信仰、礼仪等阿伊努文化的地步。毕竟和人是资源掠夺为目的。在当时，有商品价值的东西，能够极其低廉并且大量安定地入手地话也就满足了。

随着俄罗斯势力逼近虾夷地附近，为了北部地区的警备及直接经营虾夷地，1799年（宽政11年），幕府节接收了松前藩的东虾夷地进行直辖统治。在此之前，被幕府命令前往预备调查的近藤重藏，于1798年巡视了东虾夷地。结果，他提出了几项政策，希望变更原来的完全以掠夺虾夷地资源为目的的幕藩体制支配的状态。这应该说是日本同化政策的原形。也就是视阿伊努的生活，文化为“粗野”而加以否定，以令其学会日语的读写为重点，将渔捞、狩猎、采集等他们的谋生方式改为高度文化性的农业，必须使阿伊努农民化，这样一种意见书向幕府报告。这报告对风俗习惯方面建议的基本方针是将衣服、发型、姓名等都改变为日本式的。可见，以创氏改名为代表的强迫接受日本文化的日本型帝国主义地殖民的统治形态的原形，已由幕府的官吏设想出来。但是，这一尝试虽在虾夷地的部分地区实施，却并未固定下来。基本上，近代以前的阿伊努统治是根据隔离政策而实施的。

近代国家日本的成立与阿伊努生活地区的掠夺及民族文化的抹杀

努力构筑近代国家日本的统治权力，以欧美列强的统治权力为样本加以模仿。即随着1868年（明治1年）的明治维新的达成，现存幕藩体制下的一般领民，突然被容纳为“国民”。勿需讳言，不仅是国民意识，而是市民意识都不存在于“国民”本身。政府进一步把虾夷地改称为北海道，使用那里丰富的资源，认为只有将广阔的土地耕地化，才能为脆弱的国家资本打下基础，次年的1869年，设置了负责开发的行政府机关开拓使。于是，无视阿伊努传统世界的阿伊努莫西里的存在，把北海道定为“无主地”等，采用了列强的殖民地经营的法律性手法。同时，借助被雇的外国人劳力，竭力推行开拓计划的主案与实施。

近代国家成立期的阿伊努政策及其带给阿伊努社会的状况是，土地掠夺和同化政策，生活穷困与传统文化的破坏。

贯彻同化政策的北海道旧土人保护法的制定

阿伊努在近代日本，先住的土地被剥夺，传统的生计渔捞和狩猎受到限制，几乎处于不能从事的状态。在力图使其日本化的同化政策下，阿伊努被强迫使用异族的语言、文化，被迫陷于用阿伊努语及传统文化无法生存下去的社会环境之中。余下的生活手段只能是社会最底层的雇工，开拓使的救济政策也不充分，并无成效，故生活极其穷困。阿伊努的穷困状况受到国际上的谴责，终于，帝国议会于1889年（明治32年）设立了“北海道旧土人保护法”。但这是以劝农与皇民化教育为支柱的推进福利政策的法律，而不是将阿伊努做自成系统的民族而帮其自立的东西。该法律的制定，被认为参考了成为美国印第安政策依据的道威斯法。

该保护法包含的对农耕者分给土地，这最重要的条文，后来却被删除，但其他部分保留下来，直到1997年2月的今天仍然存在。再者，我想指出的是该保护法成为日本政府1910年吞并韩国时采取的皇民化政策的原形，日本帝国主义的殖民地政策也是阿伊努政策的延长。

现代的问题点

阿伊努政策是将阿伊努视为国家的特异“民族”而“应被同化者”来对待的。于是，正如上述那样，对阿伊努的各项政策都只置于福利政策的框架内处理。但是，现在已显然行不通了。阿伊努自身的迫切要求自不待言，国内外舆论的高涨，加之联合国的动向，政府正考虑由福利对策朝进一步接近民族政策的政策转变进行立法。这些政策的转换，也是由于世界性的先住·少数民族问题的突出及国际性联合的进一步发展汇成力量之故。有关阿伊努新法制定的最新动向是，虽存在各种各样的障碍，但在北海道开发厅内设立了“阿伊努政策推进室”，立法化的工作也在进行之中。

高加索高地少数民族的社会经济变迁

啊儒就诺甫

苏联时代，主要在1930年代初的合作化之后，特别是第二次世界大战（或者苏联历史上被称作伟大卫国战争时期）结束后的国家经济重建后，北高加索山区少数民族的传统经济和传统社会结构几乎未能留下痕迹。和俄罗斯农民一样，他们以一个或几个村落为单位进行合作化，被组织在大规模的集体农庄内。被称作国营农场（Sovkhoses）的由工薪农业劳动者所组织的专业化的国营农场也以很大的规模组织起来。集体农庄的成员和国营农场的雇工们以前都是不拥有私有土地的农民，此时只允许他们拥有非常狭小的自留地和头数有限的家畜。然而，这些家庭所有经济由于投入了大量的劳动力，其生产效率比大规模集体农庄和国营农场要高很多。在此尽管不必赘述战后时代的历史状况，但有必要指出的是农民或劳动者们和地方及中央当权者们之间的斗争在不断增加。农民利用各种手段争取增加自己的自留地和家畜，而当权者们却与此正好相反，企图将那些农民的自留地和自留畜数量减少到接近零，以便让农民们全力以赴地投入到被合作化了的土地的牲畜上面去。

在此期间，出现了以教育和城市为目标的社会流动现象，从以前农民比例占90%以上的少数民族集团中也出现了城市居民，他们中的许多人现在都成为知识分子（学者、教师、医生、政府官员和其他职员）、售货员、办事人员，当然还有矿工和工厂工人。虽说这样，准确的统计数字由于不同的事例而有很大变化，但人们可以猜想，俄罗斯人中的城市居民，在有些地区达到俄罗斯人总数的70%或更高，而少数民族的情况则与此相反，一般60~80%的人或者更多的人是农村居民，换言之即农民。

本稿中我们所使用的“少数民族”概念是不考虑地区情况的。譬如，象车臣（Chechens）这样的民族也被包括在内。车臣人的人口已超过100万，在他们的区域肯定属于多数民族，然而在俄罗斯联邦中他们被当作少数民族来看待。这不仅仅是和俄罗斯人相比而言的人数上的问题，从其社会地位而言也是那样。

的确，近年来在前苏联未曾有过的现象在俄罗斯不断在发生。出现了几乎明目张胆的民族歧视和猜疑针对着少数民族，特别是所谓的“高加索民族的人们”。内务部发出秘密指令，阻止他们到自己共和国之外的地方居住，或把迁出的人数限制到最小的程度，规定他们必须要去警察局登记。他们实际上不断在受到警察的恐吓，虽有正当的登记证明之类的东西，但那些也未必能改变他们的处境。所有这些做法都和从前南非的分区域治理体制极为相似。一眼就能被认出和“纯种俄罗斯人”不同的那些

人，不管他是谁都会有可能成为那些成见的牺牲者。不只是警察，其他的普通人也持有这种成见。据我所知，这种事态不仅在车臣人、达吉斯坦人、阿尔美尼亚人和格鲁吉亚人中时有发生，还有布里雅特人、雅库特人乃至偶尔在住在莫斯科的头发颜色较浓的“高加索容貌（长相）”犹太人中也时有发生。在此虽然不能够详细地论述俄罗斯人的这种讨厌异族的新动向的根据，但它的确在导致少数民族中常见的如下倾向：即他们尽量留在他们所固有的领土之内工作，而这一点与他们努力在自己的领土上扩大自己的权力、影响力、自治权和争取独立连在一起。他们加强自己经济、政治地位的努力常常以邻近的俄罗斯人地位的降低为代价。他们还越发力图振兴、复活和发展他们认为是自己传统文化的那些东西，即本土的语言和宗教（在此特别是伊斯兰信仰）。

这种倾向在一般情况下都会得到来自其他伊斯兰国家，特别是来自土耳其的大力支持。而更重要的是以前的宗教难民——即1860年代去土耳其、叙利亚、约旦和其它中东诸国的移民——的后代的反应。现在他们积极地探访过去的故乡，扩大其影响。然而从目前来看决定要回到那里定居的人数理所当然地非常少。但是他们参加合资企业，并给予留在家乡的亲戚很大的支援。这种事情在1980年代初期还是不可想象的。

上面所述的所有重要原因给曾经是自治共和国——现在已成为正式“主权”国家的北高加索诸国——带来了激剧的社会·经济状况的变化。

这些国家有哪些主要资源和主要产业呢？车臣拥有大规模的产油地带和煤油厂、机械制造厂，这些目前遭受到战争的损害，但这属于特殊情况。其它共和国都以农业为首要产业，特别是栽培棉花、天竺葵、香菜、烟草、生产葡萄酒、白兰地所用的葡萄、生产橘子汁、罐头所需水果的果树园等专业栽培业比较盛行。虽然也种植玉米、谷物、蔬菜等，但主要供当地消费所需。也有机械、工具、合成纤维、皮革、罐头工业、以及提炼当地所采掘的金属矿石（钨、钼、锌、铅等）等几种工业。疗养院、休养所、滑雪场地等等有关旅游、娱乐场所的产业占重要地位。在苏联的时代这一产业并不赢利，还需要政府和贸易工会（几乎是一回事）补贴很多援助款。机械和工具制造也一样得到补贴，特别是属于军事工业集团公司的部门尤其受到优待。所有这类产业中使用一部分当地人，而一般情况下多雇佣俄罗斯工人。俄罗斯工人大多在两个极端的岗位上，即在脏乱的，不被推崇的岗位和特别需要高尖端技术的岗位上。农业由当地劳动力来承担，但俄罗斯人仍占30%左右（除达吉斯坦外）。

至今为止，除农业以外，所有这些产业多多少少都面临着危机。罐头食品和类似的其它产品在俄罗斯中部市场上面临着来自西方国家进口食品的激烈竞争。俄罗斯人的整体购买力下降得非常严重。没有贸易工会的补贴，或大多数人无法去休养所和滑雪场，而能够具备去这些地方财力的人都喜欢去塞浦路斯和南土耳其。北高加索地区诸共和国居民的现金总收入都已大幅下降。从目前来看只有莫斯科的平均收入的50~60%或者更低（越是东部越低）。这一点在一定程度上靠自然经济来补贴。即在家里生产而不用去购买的水果、蔬菜、牛奶、肉和其他食品。连城市居民也能从中受益。然而俄罗斯人的亲属网络不太发达，城市俄罗斯居民缺乏这种援助。

据1980年代中期的调查（R. Taziev, 未发表）表明，蒂尔尼澳（Tyrmny-Auz）的生产钨的联合厂的（卡巴尔达—巴尔卡尔地区）的矿工和工人的收入情况，如果假定巴尔卡尔人家庭的收入为100的话，则卡巴尔达人的家庭收入为90稍强一些，而俄罗斯人家庭则只是70。

这意味着与卡巴尔达人和巴尔卡尔人家庭相比，俄罗斯人家庭在这一些地区的出生率和定居率都比较不稳定。并且在北高加索其它地区出现了如下倾向：在较少西方化和俄罗斯化的人口中，传统文化的特色保存得更多，其生存能力、出生率和一般性的成功率都更高。

与较高城市化了的人们相比，较少城市化的人们更容易适应新情况所要求的转变。譬如，从机械化的现代企业的工人很容易地转入到私营、家庭工业及各种小型企业中去。

旅游业从前完全归属于国家和贸易工会，即俄罗斯人的管辖之下，而现在则正在转到当地人手里。然而，在旅游业的重建和实际运营中想更为成功的话，还需要完善一些现在尚欠缺的条件。对此以后详述。

在北高加索的各共和国，私营化实际上刚刚在起步。和俄罗斯的其它地区一样，还缺乏与其相应的稳定的法律基础，是在没有统一管理的无规则的混乱状态下进行的。在这种状况下，在缺乏控制的私营化进程中容易发生超国家主义的情绪的动向。这来自按照民族的界限来垄断私有化的过程的企图，它几乎发展成为永久性的民族间紧张和冲突的根源。

正因为这样，高加索各共和国的总统和当权者们——他们以前都是共产党的有实力的官员（车臣的分裂主义领导者和印古什共和国的 Ruslan Aushev 除外）——都在全力以赴地去限制私营化进程，企图以此达到以稍做修正的方式来维持集体化农业和集约农业现状的目的。然而，私营化总是要进行下去的。在我文章的其它部分，我将论述其进展的详细情况及将要遇到的主要问题。

观光为主的经济发展与文化

以云南省大理盆地为例

横山 广子

云南省位于中国西南端，是有四千多公里的国境线与东南亚3国接壤的所谓“边境”省份。山地占总面积的90%以上，山间点缀着被称为“坝子”的人口密度较高的平地。包括汉族在内的26个民族世代居住繁衍的历史是与这种地理条件分不开的。云南是少数民族人口达三分之一以上的典型的少数民族地区。从全国范围来看，一向是经济落后的地区。

然而，近年来，由于烟草产业、观光业的发展，以及与东南亚各国的关系，云南的经济也在逐步发展。在条件优越的一部分少数民族地区，也能见到经济迅速发展的现象。本报告围绕具有典型意义的云南省西部大理盆地的白族，通过具体事例来考察在以观光为中心的经济发展过程中，其民族文化变化的动向。

经济发展与观光

大理盆地的改革开放的具体实践始于1982年前后。农村于82年底开始实施生产责任制，随着谷物的增产、奖励副业，收入逐渐增加。回顾过去15年的经济变化，可以看出观光业的发展对于经济整体产生了不少影响。

大理白族自治州意识到其自身自然、历史、民族的条件，从改革开放的初期起，就始终重视观光业的发展。尤其是自治州中心的大理盆地地区，分别于82年3月做为全国24个第一批“历史文化名

城”之一，同年12月做为全国44个“风景名胜区”之一，先后获得国务院批准。84年4月，该地区对外国人开放，境外游客无须特别许可即可前往访问。这也是作为观光地的优越条件受到评价的结果。

特别是91年开始的国家第八个五年计划中，大理州打出了发展第三产业的宏大目标。第七个五年计划结束时的产业结构（第一产业：第二产业：第三产业的比率为46:27:27）到95年底所发生的变化（比率为38:31:31），说明观光作为第三产业发展的火车头，几乎按预期的那样发挥了主导作用。

据大理州的统计，到83年止每年仅100余人的海外游客人数，84年超起5,000人，95年则跃升过4万人。尤其是91年以后的增长最为显著。其中大幅度增加的首先是香港、台湾游客。从93年前后起，新加坡、泰国、马来西亚游客也急剧增加。明显的特征是以海外华人为主的亚洲游客为多。另外，国内游客也明显增多。

扎染产业的发展与对“土”的范畴的再认识

在我1984年以来持续调查的苍村，解放前就有扎染的生产。83年村办工厂建立以来，观光及出口用的商品生产得到发展，大大提高了村民的现金收入。

值得注意的是，该产业发展本身，是伴随着与外国观光客、商品出口对象国的客户之间双向的讯息传递的接触，亦即通过与外国的异文化的交流而带来的。这又进一步使白族对自己的传统技术、文化的重新认识联系起来。换言之、促使白族对他们自己的属于“土”的范畴的事物进行再认识。

扎染的热潮扩大到汉族，在中国国内也曾突破观光商品的框框，成为日常服装的布料，一时销路大增。如今热潮已经消退，可是苍村的白族在日常生活里，还是较从前更多地使用这种布料。至少可以说，扎染已成为他们维持民族自豪以及认同感基础性内容之一。

从三道茶的“发明”到规范化

近二、三年，“三道茶”这一名称迅速与大理盆地、白族联系起来而经常被提及。“三道茶”即用三种茶来招待客人。甚至可见到用“南诏（八世纪建国）以来的传统”这种宣传词句来形容它。但是，“三道茶”一词的使用，实际上是80年代以后的事，是从事大理文化工作的人创造的新词。可称为白族传统上存在的是用一种特制的小陶器烘焙的烤茶、及以红糖为主制成的甜饮料当“茶”供人饮用的习惯。

如今的三道茶能够普及开来，是因为精通地区观光开发、富有个人才干的某些汉族，以白族的习惯为基础，成功地将三道茶商品化的结果。而且进一步向边品茶边欣赏民族舞蹈这种形式发展。为此，成为昆明民族村内展示白族文化的白族村的“热门商品”。

在三道茶的“发明”和普及扩大的过程中，当地的知识份子或研究者们，也在议论三道茶的“规范化”问题。另外，白族农民也开始积极地把三道茶作为观光商品推向市场。但是，至今为止，“被发明”的三道茶还不能说已深入到白族的生活中，还未能反馈到白族日常生活文化的层面上来。

文化变化与经济发展

关于文化变化与经济发展的问题，根据上述情况可以指出以下几点：

(1) 从扎染产业和三道茶两个例子的共同点可以看出,一方面民族文化通过观光而被商品化、带来经济上的利润。但是,在着手商品化的主体和商品化对文化的反馈方面,可以看出其间的明显区别。

(2) 扎染产业是白族同与之长久以来频繁接触的人们具有不同价值观的人们进行交流而发展起来的。这大多是由远距离移动的观光而产生的。另外,出口走上正轨以后,以外贸公司为媒介的交易形式,导致了虽是间接但却相当有效的讯息传递。值得注意的是,长期以来由政治、文化上的力学关系而产生的价值体系,通过与该体系外的人们的交流而产生变质或多样化。其次,同长期以来的经济圈外的接触,也有可能导致诸如经济状况产生转变之类的发展。

(3) 因观光而破坏“传统文化”的看法失之片面。白族能够把由观光而商品化的文化与根植于自身生活的文化区别开来。改革开放以后,与观光发展步调一致的文化变化,最终还是建立在他们自身的选择之上。在此,不能认为文化变化能象大跃进以后因政治原因而被迫停止的宗教活动那样容易复原。另外,即使表面上的文化变化,对于文化的感情和自豪并未丧失。

(4) 作为大理的观光资源,自然环境占有重要位置。该地区象征之一的湖泊—洱海,可以说因观光而加剧了污染,然而,另一方面又因观光重视的政策,在污染对策上也有所前进。为实现观光业的发展和自然保护,政府所采取的措施使湖区的渔业受到严重打击,可能会令白族渔民的生活产生很大变化。这是在矛盾中寻找解决方法的难题,值得探讨的是,这次的政府决定是唯一可行之路吗?白族自身的呼声是如何被反映的呢?

鄂伦春民族文化与现代化

洪 时荣

当代世界是一个正在缩小的世界,人们可以用前工业时代的人访问一座邻近镇的时间绕地球半圈。每年有更多的人被吸引世界市场经济里,还有报纸、广播、电视和电脑等的影响,使人们的生活模式发生变化。本文拟就文化传播现象过程中鄂伦春族的文化适应、文化特征及其民族发展问题进行初步探索。

鄂伦春民族传统文化概述

鄂伦春族是居住在中国东北部大小兴安岭深山密林中的民族,直到1949年中华人民共和国诞生时,尚处于原始社会末期地域公社发展阶段,还在过着从蒙昧时期延续下来的古老而典型的以狩猎为主、辅以采集和捕鱼的生活。一个民族全部从事远古遗留下来的狩猎经济,不论在中国还是在当今世界上都是少有的。鄂伦春族在狩猎、采集和捕鱼方面积累了极其丰富的经验和知识。在物质文化和精神文化方面,紧密结合狩猎经济,创造了特殊的衣、食、住、行文化以萨满教为主的古老精神文化。由此可见,鄂伦春族的内涵是非常丰富的。鄂伦春族所创造的游猎文化,不管怎样地单纯和原始,但它却是漫长历史时期技术、经济、社会形态和观念形态等各种因素之巨大积累,是中华民族文化重要组成部分,它仍具有极大的意义。

现代化进程中的鄂伦春民族文化特征

(1) 随着新中国的建立和国家宏观发展战略的实施，现代化的浪潮也波及到鄂伦春族地区。

(2) 政府的措施，第一：铁路的开发、火车的轰鸣打破了寂静的大兴安岭，第二：主体民族人口大量迁入鄂伦春族的生活区域，第三：大兴安岭地区原始森林的大力开发，都严重破坏了鄂伦春族的地区原始的生态环境，也改变了这个地区的民族结构。鄂伦春族人口比例由原来 98% 变化为 2% 左右。大兴安岭这个大舞台的主角，已由鄂伦春族变成汉族了。

(3) 生存环境的变化与民族结构的变化，使鄂伦春族不得不被动地适应这种变化，以解决所面临的狩猎猎场狭小、猎源奇缺等现实的挑战。

第一：改变随着季节的生活方式，分批分村地进行定居，以求更好地生存和发展。

第二：定居改变了鄂伦春族的经济结构。他们开始学习其它生产技术、文化、进行多种经营生产，从此结束了单一的狩猎经济。

第三：普遍建立小学、初中，甚至民族中学，以培养本民族教育人才。

第四：接受政府资助，建立广播站、电视转播台、图书馆、电影院等设施，接受先进文化并丰富文化生活。

第五：改变以往用民间土法治疗疾病的原始方法，组织医疗队，建立卫生所，采用科学的医疗技术，使蔓延在鄂伦春族地区的几种主要流行疾病逐渐得到控制。

(4) 现代化进程中鄂伦春族的文化特征。

经过 40 多年的发展，尤其是 80 年代开始导入的市场经济体制，使鄂伦春的物质文化和精神文化发生了巨大的变化。

第一：潜藏在鄂伦春社会结构深层的民族情感开始以更广泛的形式表现出来。如传统风俗、节日礼仪等的大量恢复。

第二：现代化进程给鄂伦春族的传统节日庆典注入了新的内容。鄂伦春族在传统的篝火节（每年 6 月 18 日）的基础上发展集市贸易、科技咨询等，使篝火节由单一娱乐、消费功能转化成具有贸易、文化交流等有助于商品发展的多种功能的文化。

第三：商品经济的发展推动了鄂伦春族民族文化的传播。如鄂伦春族的“桦树皮文化”等特需品不再为鄂伦春民族所“特需”，而是越来越多地被周围其他民族所接受。

第四：鄂伦春族文化作为旅游资源，在大兴安岭地区旅游业中占据着日益重要的地位。骑马遨游呼伦贝尔草原、嘎仙洞历史的巡视等民族节日活动成为国内外游客期待参加的活动

第五：鄂伦春民族的民族意识增强。

社会转型使鄂伦春族的地区人流、物流、信息流的通过能力越来越大，这客观上启迪了民族自立意识的发展，鄂伦春族的自尊心、荣誉感、当家作主的意识及对利益关系的平等要求比任何时期都要强烈。

上述鄂伦春族文化特征，体现了鄂伦春民族文化在现代化进程中的适应性。当然，有些根植于传统文化基础上的观念和潜意识有时仍然起着负作用。

民族文化与鄂伦春民族发展

- (1) 对民族文化采取“扬弃”的态度，才能促进鄂伦春民族的更大发展。
- (2) 鄂伦春民族文化观念的变更，要以自觉转化为主。
- (3) 选好切入点，推动鄂伦春民族文化及其民族的发展。

藏传佛教与西藏传统文化

江 平

中华人民共和国的西藏自治区，是藏传佛教的策源地。佛教从公元七世纪入吐蕃，历经 1350 多年，在复杂曲折的历史进程中，形成和发展了独具特色的藏传佛教。在西藏有着广泛深入的影响。中华人民共和国一成立，就确定对西藏宗教问题必须采取十分慎重的态度，必须尊重群众的宗教信仰，争取团结民族宗教上层。自从西藏和平解放以后，人民政府认真贯彻执行了宗教信仰自由政策，然后经过社会制度改革，废除了宗教中的封建特权、封建压迫，封建剥削制度和封建管理制度，实行了民主管理制度，推动宗教逐步走上了同社会主义相适应的道路。宗教作为一种思想信仰和一定的意识形态在西藏将长期存在，这是毫无疑问的。正因为如此，研究宗教方面的问题就是十分必要的。这里仅就藏传佛教与西藏传统文化的问题，提几点看法。

藏传佛教是西藏传统文化的重要组成部分

藏族传统文化的发展，依藏族社会发展的阶段性，可以分为原始社会文化、奴隶制社会文化、封建农奴制社会文化等几个大的阶段。藏族先民生存和发展的原始社会是一个漫长的历史过程。在这个过程中，高耸环绕的雪山，咆哮奔腾的江河，幽深浓密的森林，出没袭扰的野兽，对藏族原始先民来说，既是获取生活资料的源泉，又是遭受灭顶之灾的祸根。他们在制作石器和作为同大自然斗争的简单工具的同时，开始用简单的思维方式去认识自然，于是产生了图腾崇拜和山神、精灵、龙魔的神话传说等最初的宗教观念，成为原始社会文化的精神产品，也为后来本教的形成奠定了基础。本教认为赞普是天神下凡统治人间的主宰，这种说教是本教为奴隶主的统治服务的理论依据。本教徒以鼓、弓箭、刀剑等为法器，给人们驱鬼降魔，求神赐福、占卜吉凶、祈福禳灾、治病送死，以及频繁的宰牲祭神等种种仪式，成为奴隶制社会里人们社会生活、精神生活的重要内容。在佛教传入以前吐蕃奴隶制社会发展过程中，本教在思想领域一直居于统治地位，对奴隶制度下的社会生活、政治生活和精神生活产生着巨大影响，对藏族传统文化的形成和发展起着重大作用，以至成为当时藏族文化的主体。

公元 7 世纪佛教从印度和中国内地两条主要渠道传入西藏。佛教作为一种外来文化，又挟带着印度和中国内地封建文化的特色，进到在意识领域属于本教文化一统天下的西藏，必然要引发两种文化的激烈冲突，尽管佛教得到了王室及部分贵族权臣的扶持和推崇，但由于本教不仅是居于统治地位的意识形态，深深植根于社会之中，并且已形成一种强大的社会政治势力，它对佛教的抵制和反对十分强烈，本佛之间争夺意识形态阵地的斗争，达到了你死我活的程度，经历了二百多年的时间。由于佛教思想文化比本教思想文化有相当的先进性、适应社会发展的需要、得到统治阶级的支持、逐步同发展中的社会制度相结合，加之它在斗争中不断调整，对本教既斗争又有一定的妥协、在宗教仪式、宗教神祇等方面，吸收了不少本教的东西，形成了地方化、民族化的藏传佛教、得到了众多藏族人民的

信奉，在后来的发展中，走上了政教合一的道路，于是藏传佛教思想像水银泄般地渗入到藏族社会生活、政治生活和精神生活的每一个角落，无论哲学、文学、艺术、历算、医药、建筑等各方面，以及藏族的风俗习惯、伦理道德、心理素质等无不深深地打上了佛教了印记，在意识形态领域居于绝对的统治地位，成不藏族传统文化的重要组成部分。

藏传佛教对西藏传统文化的贡献

(1) 丰富和发展了藏语文。公元7世纪吐蕃王朝的英主松赞干布为了治理朝政的需要，派他的文臣吞米桑布扎等人赴西域、天竺等国，对诸国文字进行了学习和比较研究，返回吐蕃后以梵文为兰本，对原始藏文进行了一次历史性的规范改革，这是藏族文化发展史上具有划时代意义的重大创举。据藏文史籍记载，初创时期的藏文，其作用最主要的就是翻译佛经。佛经的翻译从7世纪开始，到14世纪，先后从梵文、汉文中翻译了大量的经籍，根据德格版《藏文大藏经》计算，共汇集经文4570余种，除佛学内容外，还包括许多其他学科著作，诸如哲学、文学艺术、天文历算、医药、工艺等，实际是一部藏文百科全书。通过佛经的翻译，使原来不那么科学、规范的藏文，经过“厘订译语”运动，使藏文更加规范化、科学化了。

(2) 推动了藏族文学的发展。由于佛教中有相当数量佛教文学作品，佛经的翻译和传播，给藏族文学带来了新的文体，给藏族文学的发展开辟了新的园地。

(3) 促进了藏族教育的发展。十世纪以后，寺庙垄断了藏族的文化教育，寺庙不但是宗教活动的场所，而且成为学习和传播文化科学知识的中心。较大寺庙里不但设有显宗、密宗学院，还设有因明学院、医方明学院和时轮学院。寺院中的僧人除了学习佛学知识外，还学习天文历算、逻辑、历史、语言、工艺、医药、文学艺术等知识，即所谓大小五明（学科、知识）之学。从而使许多僧人，不但是宗教职业者，而且是知识分子，如医生、画家、历史学家，语言学家、天文历算学家和文学家等。历史上的许多著名藏族人才，大都是从寺庙培养出来的。

(4) 建筑、绘画、雕塑得到空前发展。随着佛教的传入，历史奉佛赞普及农奴主阶级，十分重视佛寺的兴建。因此，藏族的建筑、绘画、雕塑等艺术也随之发展起来。

藏传佛教对藏族文化的消极作用

藏传佛教作为藏族文化的重要组成部分，如前所述，对藏族传统文化的继承和发展起了不可忽视的积极作用，有重大贡献。但在另一方面，又对藏族文化的发展起了一定的消极作用，甚至在某些领域、在一定范围内阻碍了藏族文化的发展。

藏传佛教对藏族文化的消极作用，主要表现在：它在整个意识形态领域中处处宣扬人生苦海、世事无常、六道轮回、因果报应、修佛解脱的唯心主义世界观和人生观。把西藏农奴制社会的一切苦难和不平等，都说成是前世的因果报应，是自作孽、自受苦。鼓吹“服从”、“忍让”放弃对现实一切不合理现象的反抗和斗争。为来世造善业，最好是出家修行，解脱成佛，永远脱离轮回之苦。这种唯心主义世界观的核心是放弃今生，追求来世。因而禁锢了人们的思想，束缚了人们的手脚，影响了人们对现实美好生活的追求，阻碍了经济文化的发展。

社会改革与认同的诸问题

刘 克甫

自从中国《左传》以及古希腊希罗多德（Herodotus）之著作以来，学者多以传统服饰，饮食等文化特征作为族体边缘及族体本身的主要客观标准，直到现代仍然是如此。只有到了十九世纪末叶，这方面才有了一种重要突破，族体理论由老一套的“客观论”转到“主观论”，开始强调族体以共同自我意识为其本质要素。

十分可惜的是，斯大林所提出“民族”定义，列举了与族体本质无关的若干现象，如“共同的经济生活”等，而根本忽略了自我认同的重要性。如此自从被提出时早已成为过时的定义，对社会主义国家的思想状态却始终发生广泛影响，使得族体理论研究数十年来处于停带不进的情况之中。

至于中国民族学者，直至八十年代才开始对斯大林定义加以局部修正，譬如重新开始特别强调族体诸特征中文化因素之重要性，并声称五十年代进行民族识别时，曾以此种观点为基本理论依据云云。其实不难看出，当时实际情况并不尽然。如果从文化特点着眼，则“瑶”，“彝”等人为族体的说法，本来根本无法成立。

目前在中国虽然似乎不再提起半个世纪以前所作的民族识别工作中曾有不少问题，这种情况却显而易见。正因为如此，讨论民族识别的理论依据仍然具有极大的现实意义。

而今天问题并不仅仅在于要运用族体意识等“主观”标准，以便确定族体边缘。在族体理论研究的现阶段，有必要也有可能寻找另外一种途径来认识族体的本质。其之所以有此必要，是因为认同意识这一层并非族体所独有，其他类型之社群亦多有之。因此，在族体理论上，似乎非要实现一种新的突破不可。

敝文基于以上考虑，对于解决“文化”与“族体”之间关系问题方面，提出新的研究取向，以请教与有志之士。其与传统作法不同之处，即非以族体所共有“客观”或“主观”特征作为立论出发点，而着重于确认族体与其各类社群之间有何不同。

从这一方面来检讨现有的民族名单，可以发现其中因本缺乏较严谨的理论所造成的失误。而早晚再度进行一次民族识别工作之必要，取决于我们目前所处改革局势。人类社会是各种关系不可分隔的整体，勿论以经济与政治为起点，将必然牵涉到所有其他方面，而民族关系也将不可避免地成为改革对象之一。

中國少數民族現代化基本問題探索

唐 屹

民族及其相關事務研究本是涉及感情、學術及政治等的一種綜合研究。民族及國家原本即受世界上至今尚未被證實為一種錯誤的道理——變動——所支配。民族及國家的內涵及外延在歷史長河中是常變動不居的。所謂擁有共同地域、語言、宗教、風俗習慣，甚至是血緣的民族其內在及外在均時時在變、處處在變。

民族、國家、文化之本身即在變動，原本即如此，而非新生事務。中國民族、中國國家及中國文化的孕育、生長、茁壯，甚至停滯、衰退、復興等的變化，就是這種變動理論的最佳證明。

中國歷史是曾由不同民族所建立各個王朝承先啓後發展而成的，統一的多民族國家的形成是一個長期歷史發展過程。諸多少數民族與主體民族——漢族都曾是某一時空裡中國國家的核心力量。事實上，諸多歷史上中國偉大的王朝及時代是由少數民族或含有大量少數民族血緣的集團所建立的，然而這些王朝及其民族未自外於中國。

中華民族是由各個不同起源及各具文化特色的民族集團逐漸發展，由初級的民族集團，經過初級統一體，農牧兩大統一體，再經過各民族流動、混雜、分合發展過程，形成漢族核心，再由此核心主動或被動凝聚其他東亞民族，最後形成自在的中華民族實體。鴉片戰爭之後，在列強壓力之下，自在的民族實體又演變成休戚與共的民族實體。這個中華民族多元一體格局是史實、現狀及未來發展。

自秦朝大一統以來，中國在政治上統一時期佔三分之二，分裂時期佔三分之一，即使在分裂時期，分裂各方亦不自外於中國。民族形成上也雷同於此，在分分合合過程中，即使在分時，也曾出現過分而未裂、混而未合的相對穩定性，而最後又回歸於合。

認清中國的國家、民族、文化的史實，以及現狀的特色，當然不能完全用以往西方社會那種“現代民族主義（modern nationalism）”或“民族國家（nation-state）”的觀念去詮釋。如果一定要用“現代民族主義”及“民族國家”的觀念去詮釋中國、中華民族及中華文化的發展，那也只能用“多元一體格局”。

自鴉片戰爭之後，中國的國家、民族及文化即受近代開創世界現代化的西歐文化衝擊。所謂受衝擊而引發失序、摩擦、衝突及對立等問題，不論是內在的或外在的，都是早已存在的，其激烈程度的認知是依不同時代而定的。簡言之，以往認為激烈衝突問題，現在看來是並不激烈，或者已經解決，甚至不解而解。

中國民族近代遭受西歐文化之衝擊，應該看做是包含各個少數民族及主體民族—漢族等均在內的整體中華民族受東西洋軍事、政治、經濟、文化等各種力量的壓力，這種壓力固然傷害中國，但也造成中華民族由自在的民族實體轉化成休戚與共的民族實體。在列強船堅炮利的壓力下更堅實的凝聚在一起。從另一角度看，在此壓力下，中華民族追求的自由解放，是包括個體在內的整體中華民族的自由解放，個體的少數民族自由解放與整體中華民族的自由解放是密不可分的。自由解放是擺脫列強壓迫，及迎頭趕上等。進而言之，實質上中國少數民族的自由解放在整體中華民族自由解放之前是很難達成的。

爲了了解前陳中國的國家、民族及文化特色，我們來看看本次研討會的討論要點：

(1) 當前世界文化變動速度是較以往爲大，但這種大小是相對的。中華民族的外在及內在所受的互動衝擊都比以往所受者較爲大。單從接受外來衝擊而言，外來西歐文化衝擊到中國的主體民族漢族及各個少數民族，一般而言，漢族受到的衝擊是較大及較直接的，少數民族受到的衝擊是較小及較間接的，少數民族受西歐文化衝擊及影響，常常是經過漢族的傳導。中國的國家、民族、文化對外衝擊問題，目前暫時不談。因此，若要討論中國少數民族西歐文化的衝擊而發生變化時，必須將漢民族的因素列入重要考慮，何況國家主權觀念不僅是在政治層面發生作用，同時也影響民族及文化層面。

中華人民共和國基於中國的國家、民族、及文化之傳統特色及時代潮流等因素，而提出民族區域自治的法律及制度，體現其堅持實行各民族平等、團結及共同繁榮之原則，發展其社會主義民族關係，以建設其成爲高度文明、高度民主的社會主義國家。

台灣方面對少數民族問題，不論是從原本 1946 年的中華民國憲法，或者最近的憲法修正案，對少數民族的地方自治制度、參政權利、民族地位等予以保障，對其自治事業、文教經建及人民生活習慣之行宜，予以保障及發展。

海峽兩岸政府在先後及程度不同的情況下，對中國的少數民族的各項權利及事業予以保障及發展。在此保障及發展當中，基於歷史背景及現實需要等因素，中華民族的各個少數民族與主體民族之間，以及各個少數民族之間的互助合作是必然的。所謂中國地大物博、人口眾多，前者用於少數民族地區較妥，後者是指漢族人口為主，但漢族擁有較充沛的技術、資金、資訊等。二者互助合作，共同繁榮是必然途徑，當然在此過程中會產生衝突及失序。徵諸以往中國民族發展史，前者必然含蓋後者，而後者也會長存。

(2) 在統一的多民族國家或民族中，當然會出現整體性文化及其下屬的主體文化同各個少數族群文化，這種現象可能會以不同形態、不同程度及不同內涵等方式來表示之。而即使在比較單一性的國家、民族及文化中，也會存在著各種不同的差異性，問題是整體性、主體性及個性三者之間的同質與差異是否能夠獲得妥善協調。能的話，整體性才能長存；不能的話，則導致失序、衝突，甚至於分裂。徵之中國歷史，整體性是一直存在，並且發揮作用，然而個別差異也一直存在。

在中央權力強盛時，整體力作用大，個別力受其籠罩而削減。在長程歷史發展中，各個個別體間、各個個別體與主體間互相影響及滲透，整體擴大、主體擴大、主體變異、個別變異，甚至個別消失等都隨時與時空俱變。

而從文化層次來看，整體文化的包容性非常重要，缺乏包容性的文化難以長存發展。中國文化是深具包容性的，甚至中國少數民族文化也具備此種包容性，此即中國民族及文化綿延發展的主要原因之一。了解中國文化的這種性質，對於所謂文化二層次之說很容易解析及調和。中國整體國家及民族的歷史及文化與個別的歷史及文化並非衝突，例如元史是元王朝及蒙古史，也是中國及中國民族史的相關部分；清史是滿族及清王朝史，也是中國及中國民族史之相關部份。元清二代之蒙滿二朝皆以中國正統王朝自居，其他民族也承認其正統地位；過去如此，現在如此，將來也如此。

國語（普通話）與民族語言二者並非截然對立，尤其是在晚近時代潮流所趨，海峽兩岸當局在推行國語（普通話）之際，皆以立法或規定保障民族語言之傳承及使用；實際運作情況雖有不同，但大體方向是一方面推行國語（普通話），另一方面儘量設法保存及發展民族語文。

(3) 在文化重組、重新思考民族自我認同等問題基本上，也一如前陳之整體、主體及個別三層關係的互動。三者間之關係並非截然對立，少數民族之自我認同及其對整體中華民族之認同也非敵對而不可條調和，世界上先進國家中多民族互助合作及調和並存之例子頗多，這項調和之成敗與否要以整體民族，尤其是主體民族的發展盛衰來看，當代尤以經濟發展為重要因素。徵之中國歷史，中央王朝強盛，則四裔來歸；中原版蕩，則四裔離析。強盛與否，經濟優先，此即海峽兩岸當局大力發展經濟的基本原因。

從前陳中國國家、民族、文化等的整體性、主體性、個別性三層次來看中國少數民族的現代化。吾人可從人口、文化、教育及民族關係等方面來探討：1) 人口：少數民族人口、少數民族地區人口、漢族人口、全國總人口的數量、質量差異；人口與生態關係及民族矛盾；民族人口政策及國內遷移等問題。2) 文化：中國民族文化之特點；民族文化與民族意識；民族文化與現代化的調適等。3) 教育：民族教育的意義、性質、政策、發展；教育與宗教；教育與現代化等。4) 民族關係：民族關係的發展過程；當前民族自覺與民族關係；大民族主義與民族分裂主義等。

當代中國少數民族現代化基本問題可謂千頭萬緒，前陳之人口、文化、教育及民族關係等僅其中之部份要項而已。中國少數民族現代化一如中國主體民族漢族現代化及中國民族整體現代化一樣，其基礎是在於經濟能發展。經濟發展良好，四個現代化能落實，所謂“發展社會生產力是新時期民族工作之根本任務”，經濟開發是包含少數民族在內的當前中國現代化問題的根本。

滿族社會文化變革與民族的發展

果 洪升

滿族具有悠久的歷史和文化，在中國歷史上是一個有過輝煌貢獻的少數民族。先秦的肅慎，漢、三國時的挹婁，北朝時勿吉，隋、唐時的靺鞨，遼、宋、元、明時的女真，都是滿族的先人。明朝中葉女真分為建州、海西、東海三部，生活在中國的東北廣大地區。被明王朝冊封的建州三衛指揮使的後裔努爾哈齊，1583年起兵，用11年時間統一了女真各部，實行了牛錄屯田，建立八旗制度，創制滿文，並於1616年（明萬曆44年）建立了後金政權。1635年皇太極正式定族名為滿洲，1636年改後金為大清，建立了蒙古八旗、漢軍八旗，擴大了八旗制度。1644年進關，入主中原，統治全國達267年。1911年辛亥革命推翻了清王朝統治。1949年新中國成立，廢除了民族壓迫制度，滿族同其他各民族真正實現了一律平等；較聚居的滿族地區的各级人民代表大會都有本民族的代表，參加了國家各级政權的管理工作；在全國陸續建立了11個滿族自治縣，同各少數民族一樣，享受了區域性自治的權利。從努爾哈齊建立後金和滿族正式定名到現在近400年時間里，滿族社會發生過四次大變革，對整個民族文化產生了巨大影響。隨着民族文化的變革，滿族在中國各少數民族中已成為一個最為開放、對祖國的發展做出了重要貢獻的民族。

第一次社會與文化大變革是努爾哈齊與皇太極時期。努爾哈齊統一了女真各部以後，在完善原來“牛錄”的基礎上，創建了八旗制度，皇太極又完成了八旗蒙古、八旗漢軍的組織建設。這一社會組織，具有行政、軍事、生產三方面的職能，推動了社會經濟發展，農業生產在經濟生活中佔據了重要地位。在後金奴隸主政權統治下的滿族社會，由於多種因素的作用和影響，封建關係逐步形成。努爾哈齊時期，在蒙文、滿音基礎上，創制了滿文；皇太極時期又加以完善，形成了滿族的語言文字，並且大量翻譯了漢族的史書、典籍與文學著作。在薩滿教發展的同時，佛教、喇嘛教也傳入了滿洲。由於農業的發展，精於騎射的生活特點大受影響，隨之裝束也逐步發生了變化，禮俗、建築、音樂、歌舞也吸收了其他民族的內容。這一時期是滿族定名，建立清王朝，社會從奴隸制向封建社會變革的民族與文化大發展階段。

第二次社會與文化變革是清軍入主中原，開始統治全國時期。1644年清軍乘機入關，建立了統治全國的王朝，八旗兵丁轉戰全國，駐防各主要城鎮，滿族從原來聚居東北地區而形成在全國範圍大分散、小聚居的分布特點。滿族貴族政權殘酷奴役各族人民、強迫人民剝削易服，達到滿化的目的，嚴厲鎮壓反抗，民族矛盾不斷激化。康熙繼位後，逐步實行了緩和民族矛盾政策，農業得到發展，社會生產力顯著提高，群眾生活穩定。滿族的封建莊園制逐步向地主經濟過渡，整個滿族的社會、經濟、文化生活，逐漸接近漢族的发展水平。在文化上，大量吸收了漢族的封建思想文化，通用了漢語，儒家的倫理觀念，逐步成為共同的道德準則。滿人在文學、藝術、科學技術領域的人才倍出，並且取得

卓越成绩。这一时期是满族统治全国，吸收了汉民族先进的文化，为丰富和发展祖国文化做出了辉煌的贡献。

第三次社会与文化变革是清末至辛亥革命时期。清中叶以后，贵族统治者的腐败，引起内外矛盾激化。辛亥革命推翻了清王朝，废除了八旗制度，改变了满族贵族统治地位。这种大变革，使得满族社会生活各个方面发生了重大变化，不少有识之士，成为反对封建腐朽统治的爱国者与革命者，有的成了社会科学和自然科学与文化艺术的学者，专家；有的人走上改良派道路；一些贵族也纷纷自找生计。居住在全国各地的满族群众，社会生活各个方面也逐渐同汉族接近，相互吸收与保留了优秀成份。满汉文化的相互渗透，丰富了各民族的文化宝库。历史将满族推到了统治全国的位置，历史又决定了满族在中国少数民族中成为一个最为开放的民族。在这一时期的变革中，满族大量融于汉族之中，汉民族在某些方面也改变了陋习，吸收了不少满族的优秀文化，成为中华各民族共同财富。

第四次社会与文化变革是新中国成立到改革开放的几十年时间。满族摆脱了“排满”的影响，真正实现了各民族一律平等，享受到了自治权利。在全国实现社会主义现代化过程中，满族各阶层人民充分发挥了自己的作用。满族人口从 200 多万，恢复和发展到 900 万，成为中国第二个大的少数民族。近一个世纪的变革中，满族虽然失去了很多特点，但民族文化在近几十年中得到充分发扬，民族意识及民族认同感将长期存在。在当前社会主义市场经济冲击下，满族文化进一步得到了发展，提高了价值品位，成为中国各民族文化的重要内容。满族是中华民族大家庭中的一个成员，将长期存在与发展下去。

几点分析与结论；(1) 满族是一个具有悠久历史与辉煌文化的民族，其上层统治全国 200 多年，丰富了祖国政治，经济，社会与文化。整个满族对中国历史作出了突出贡献，是中华民族大家庭中的一个重要成员。(2) 历史将满族推到了统治全国的地位，历史又决定了满族是一个最为开放的民族。满族贵族开始统治全国时期，企图“满化”其他民族，其结果不得不吸收较发达民族的先进制度、思想与文化，达到巩固自己的统地位的目的。由于贵族的腐朽，导致清王朝政权的灭亡，分布在全国各地的满族，生活在人口众多的汉民族的汪洋大海之中，自然形成了一个最为开放的民族。在新中国成立以后的几十年中，民族得到了发展，民族文化得到了恢复和弘扬，但又很少保守，善于吸收先进思想与科学技术，来丰富自己、发展自己，使民族开放成为自觉行为。因而满族是一个大有希望、大有作为的民族。(3) 辛亥革命后，满族失去了很多特点，其民族语言文字，在本民族中都已成为历史。但民族传统文化的优秀部分，保留了下来，并且正在得到发扬；民族意识与民族认同感更会长期存在。满族将同全国各民族一起，构成中华民族大家庭，长期存在与发展下去。(4) 民族是一个历史范畴，有它的产生、形成、发展和消亡的规律。民族作为一个社会人们群体，随着阶级、国家的产生而形成；民族也将在国家、阶级消亡之后才能消亡。但这种消亡，不是被某一个民族同化，而是在很长的一个历史时期达到的各民族的融合。满族在社会与文化变革中的变化，完全符合民族的历史发展规律，为其他民族的发展做出了榜样。

**Dynamics of Cultures and Societies
of Ethnic Minorities in East Asia**
Summaries of papers

Contents

Some Considerations on China's Minorities in the 21st Century: Conflict or Conciliation?	Heberer, Thomas	346
Cultural Revitalization and Ethnic Identity of the Austronesian Peoples in Taiwan: 1980 to 1995	Chieng, Bien	347
Anthropologists and the Study of Indigenous Peoples: Some Personal Experiences and Introspection	Chiao, Chien	347
The Culture of Minority Nationality in the Process of Modernization	Hao, Shiyuan	348
National Identity and Multiculturalism in China: Segmentary Hierarchy among Three Muslim Minorities	Gladney, Dru C.	349
Problems of the Ethnic Minorities in Southern China: In the Case of Yunnan	Matsumoto, Kotaro	350
Learning to be Chinese?: Minority Education and Ethnic Identity among Three Ethnic Groups in China	Hansen, Mette Halskov	351
Development of Ethnic-Society and Change in Ethnic-Culture	Jin, Binggao	352
Various Problems Concerning Contemporary Ainu Ethnic Independence Movements: From the Modern Policy of Assimilation to Current Discussions for Enacting a New Law	Ohtsuka, Kazuyoshi	354
Social and Economic Changes among Highland Minorities of Caucasus	Arutiunov, Sergei	357
Ethnic Culture and Economic Development Brought by Tourism: In the Case of the Dali Basin, Yunnan	Yokoyama, Hiroko	361
Oroqen Culture and Modernization	Hong, Shirong	365
Tibetan Buddhism and Traditional Culture of Tibet	Jiang, Ping	367
Social Reforms and Problems of Ethnicity	Kryukov, Michael	370
Some Basic Questions of Modernization Concerning Chinese Minority Peoples	Tang, Chi	371
Social-Cultural Changes and the Ethnic Development of Manchu	Guo, Hongsheng	375

Some Considerations on China's Minorities in the 21st Century: Conflict or Conciliation?

Heberer, Thomas

From a global perspective there exists a significant increase of ethnic conflicts in the last decade. They constitute one of the main sources of domestic political instability in multi-national countries. Political, economic, cultural, religious, and history-related conflicts as well as the worldwide ethnic revival are the main causes. Historical experiences, ideological assessments, consequences and effects of the process of economic and social change as well as the ethnic revival, e. g. in the former Soviet Union or in Eastern Europe, led to new ethnic challenges in the multinational country of China, too. This has to do with inner constellations (liberalization, opening policy, social change) as well as with the disintegration of multi-ethnic states like the Soviet Union and with an increasing ethnic nationalism in neighbouring Central Asia.

Social scientists held for a long time the opinion that with economic development and modernization religious, ethnic and cultural differences between different societies would be equalized. Ethnic de-differentiation would be the result of modernization processes. But in fact the opposite was the case: ethnic revival and rising ethnicity. This is true also for China, where in the last decade among most of the ethnic groups ethnic identity and ethnicity are on the rise. So in China new mechanisms of conflict solutions will have to be found as well, in order to prevent protracted ethnic conflicts. And this is actually the starting point of the paper: to reveal to possible lines of conflict and to search for methods of solution.

The paper starts from a multi-causal approach, referring to four strings of conflicts: (a) collective memory, like historical conflicts in the memory of an ethnic group or historical assessments of the other group; (b) Political conflicts, like lack of autonomy; (c) economic conflicts, like modernization and social change as an imagined menace for ethnic identity; economic negligence of an nationality or its settlement area; (d) cultural conflicts, like non equal treatment of cultures, different conceptions of state and law or different cultural or religious expectations and objectives. Ethnic conflicts result from a "profound psychical and social rootedness" that needs a thoroughgoing "therapeutic intervention", as a German sociologist put it.

Therefore the paper tries to demonstrate with the help of three examples potent segments of conflict in the process of economic and social change in China: (1) collective memory: historical assessments and experiences of different ethnic groups in China as well as official images of ethnic minorities and their impact on present majority-minority relations; (2) political questions: deficits of regional autonomy policy and rising ethnicity; (3) economic questions: e. g. development gaps; (4) cultural questions like assessments of the cultures of majority/minorities. Finally the paper offers some suggestions on easing ethnic conflicts for discussion.

Cultural Revitalization and Ethnic Identity of the Austronesian Peoples in Taiwan: 1980 to 1995

Chiang, Bien

The years between 1980 and 1995 witnessed a series of radical changes in Taiwan in both socio-political and cultural respects. Also during this period of time, a new trend of ethnic and cultural awareness became evident among the Austronesian speaking indigenous peoples of the island. The main purpose of this paper is to examine the particular aspects of Austronesian culture that have been emphasized in the course of the Taiwan Indigenous Movement in the past fifteen years. How and why particular representations are chosen by these Austronesian peoples in their endeavor in maintaining as well as establishing ethnic identities in a Chinese colonial context?

The paper consists of two sections. The first section provides a retrospect of Japanese and Chinese colonial rule in Taiwan for over a century. Special attention is paid to those policies that have long lasting effects on the contemporary situation, such as education policy and the "reservation system". Also in this section, I recount briefly the major events, both before and after the revoking of martial law, that lead to a full-fledged, though far from unified, Indigenous Movement.

The second section discusses a number of more prominent cultural representations that different indigenous groups use to propagate their identities. These cultural representations include: (1) The reinstallation and use of indigenous personal and collective names; (2) The aggrandizement of yearly community rituals and some but not all personal life-crisis rites; (3) The emphasis in certain, but not all, aspects of "traditional" livelihood, and (4) The dissemination of certain visual and performance art forms beyond their original ethnic-cultural context. The validity of these representations as symbol of ethnic identity is then examined, first, in their respective contexts in the "indigenous cultures" and, second, in their recontextualization in a particular Chinese colonial situation.

Anthropologists and the Study of Indigenous Peoples: Some Personal Experiences and Introspection

Chiao, Chien

The Current Indigenous Movement in Taiwan is Global in nature and shares the same demands of the indigenous peoples in other parts of the world; (1) Rights to recapture or at least to use the land occupied by their ancestors, (2) Reconstruction of their history and culture, and (3) Self-determination. These demands are pressed, unfortunately, through violent struggles which in turn create tensions, both political and social.

To these tensions, this paper proposes two possible solutions:

(1) cultural pluralism, and (2) cultural counseling, and gives detailed discussion to the definition and contents of them. It further depicts the new role that anthropologists perform as the cultural counselor.

The Culture of Minority Nationality in the Process of Modernization

Hao, Shiyuan

As the human society is moving into the 21st Century, the concept of modernization is propelling the development of all nationalities in all countries the world over in a scale never before seen in history. Under the impact of the rise of Asia, the rapid economic growth of East Asia, the forming of the Pacific Rim Economic Circle, together with the impetus of global economic integration, the modernization process led by the East Asian countries is characterized by speedy development and shaking changes. The criteria used by peoples to measure the level of modernization tend to become more and more standardized. At the same time they are also faced with contradictions in coping with changes of the traditional culture which is being modernized.

The modernization process is pushing every country and every nationality to open-up, to exchange with others and to learn and absorb from others. There is growing meeting ground among countries and nationalities. However, this does not mean that the cultural multilateralism among the nationalities is disappearing. The restructuring of culture is a much more complex and longer process. This is determined by the fact that human society has come a long way in forming the nationalities.

In the modern world, most countries have more than one nationality. The national modernization will greatly promote the economic and cultural development of the minority nationalities. The leveling of the economic development of all nationalities and the mingling of their economic life will provide a sound foundation for the restructuring of their country and domestic integration of all nationalities. In the meantime, the minority nationalities will go through from conscientious efforts to a natural process in preserving, inheriting and developing their cultures and in blending them into the main stream culture.

The 20th Century has seen a wide surge of political nationalism. With the breaking down of the system of western colonialism, there was an up-surge of national movements for state independence and national liberation. The last outlet came after the end of the Cold War and the fall of hegemonism. Since the 1980s, as economic development is removing the boundaries, economic nationalism is being melted by the widening international cooperation and the principle of the unitary market. However, cultural nationalism is on the rise at the time of turbulent changes. It will form the mainstream of the responses of nationalism of the human world in the 21st century. This tendency can be seen in the self-conscientious renaissance of the national culture of the minorities in developed countries, the resistance by the developed countries to cultureale infiltration by others, the efforts by developing countries to clean out the cultureale remnants of the colonial stage and their fight against cultural hegemonies.

In the development of the nationalities of the human world, changes of their concepts about the indigenous land as well as the mingling of economic life are all promoting the nationalities to get closer and integrate gradually. The differences among nationalities are

more and more reflected in their cultural multilateralism. The nationality cultures are valued by the nationalities as the major means to show national self-respect. The East Asian countries have clearly realized in their process towards modernization that modernization does not mean westernization. Every country should choose its own road and mode to modernization in accordance with its unique national conditions and cultural traditions. The same principle is applicable for the minority nationalities in a multi-nationality country. We call this principle: seeking truth from facts.

Cultural nationalism is also reflected in international relations as well as in the inter-nationality relations in the multi-nationality country. The scale of such reflection depends on whether the multi-nationality country can correctly and effectively regulate relations among nationalities. Therefore it is very important to have a scientific outlook and a correct policy for the nationalities.

The outlook on the nationalities is meant for a scientific perception of the phenomena and process of the nationalities. The nationality policy deals with the practical issues. The purpose is to allow the nationalities, which are being pushed forward by social progress, to develop according to its own rules. The nationalities will conscientiously blend only on the basis of full development. The nationalities will naturally phase out only after conscientious blending. The unique characteristics of each nationality's culture will mingle and absorb with each other in this process.

**National Identity and Multiculturalism in China:
Segmentary Hierarchy among Three Muslim Minorities
Gladney, Dru C.**

This paper suggests that China's national minorities and national identity are defined by a state-sponsored policy of multi-culturalism and multi-nationalism which follows certain identifiable path dependencies. By comparing three Muslim minority nationalities, the Hui, Uygur, and Kazakh, this paper will suggest that paths of national and ethnic identity in China are influenced both by state policy and local perceptions of identity. These paths follow relations and oppositions that can be mapped according to segmentary hierarchy models drawn from anthropological descent theory, but this paper will attempt to suggest why it is that these particular paths are followed as opposed to many other possible alternatives.

Through comparing educational, historical, and economic data, I will argue that the path dependency of ethnic identity in China is influenced through dialectical and dialogical relations. Based on state statistical surveys, interviews, and fieldwork, this data will indicate that the Hui, Uygur, and Kazakh nationalities follow certain paths in terms of economic and educational development that are distinctly related to their ethnic and religious backgrounds. These paths will demonstrate that not only do these three Muslim groups share several commonalities, but that they are also quite distinct in several other important respects, as well as being divided internally along religious, ethnic, and local

lines. Indeed, it is only in relation with others and among themselves that we can understand their current expressions of identity. These relations will demonstrate that not only do people share many multiple identities, but that theories of pan-Islamism and pan-Turkism are completely inappropriate for understanding these and other Muslim minorities in contemporary China. Finally, I will suggest why I think a theory of path dependency and segmentary hierarchy is useful for understanding the increasing importance and revitalization of ethnic and national identity in China and other modern nation-states today, particularly in the post-Cold War period.

Problems of the Ethnic Minorities in Southern China: In the Case of Yunnan

Matsumoto, Kotaro

1. After the revolution in 1949, the Chinese government started an ethnic identification program as the basis of its policy toward minority nationalities. Under this policy, 55 groups have been recognized as minorities, but the Chinese government stopped recognizing new minorities in 1987 because some members of the Han population wanted to reregister as minorities, and some sub-groups of a minority group wanted to be recognized as an independent minority group and there are too many cases to be resolved. The Chinese government doesn't seem to want to reactivate the ethnic identification program. Some scholars also think that there is no need to continue it anymore, saying it is somewhat meaningless from the point of view of nation building theory. There are, however, some important problems that remain, and the present ethnic identification program has not been completed yet.

First, the inequality between the Han people and minorities has not been resolved, and some minorities do not want to be recognized as such. The inhabitants of Lin-gao prefecture in Hainan, for example, would want to be recognized as Zhuang, if the discrimination against the minority were absent.

Second, the classification of ethnic groups and their languages has many contradictions. For example, the Tibet-Burmese groups, especially the Lolo groups, have not been classified properly. Thus, constant explanation is hardly possible for the numerous sub-groups of the Yi while the Jinuo have been recognized as an independent group. The Yi should be divided into many smaller groups. Otherwise, the many Tibet-Burmese minorities should be united into one large group, such as the "Wu-man," as they were classified during the Tang dynasty.

2. The economic reforms that have taken place since 1978 brought some changes in the meaning of the policy of equality among nationalities. Specifically, the economic gap between the eastern Han area and the minority western area is widening (the "Matthew effect"). Exploitation of natural resources in the western area does not necessarily bring benefits to the minorities. More officials and scholars oppose giving preferential treatment to minorities recently, but I think the Chinese government should continue to offer

developmental assistance to minorities in order to grant their selfreliance.

3. "The Great Leap Forward," "The Cultural Revolution," and economic reforms all caused environmental disruption in minority areas, though the conversion from grain to cash crops improved conditions in mountain areas to some extent. The reason for the disruption was conventionally attributed to the contradiction between development and conservation, but the real cause was political mistakes that took place throughout modern Chinese history.

4. If the Muslim problem should be counted as one of the national problems, it is the most important national problem in Yunnan. In 1975, nearly at the end of "The Cultural Revolution," an unfortunate incident occurred in Sha-dien village, where almost one thousand Muslims were killed. Although the incident was later reviewed, and the Muslims retrieved their honor in 1979, some vestiges of the hostility between the Han and Muslim people (the Hui) in the area remain. The revival of Arabic language teaching and the Islamic studies in recent years may contribute to the coexistence of the Han and the Muslims.

Learning to be Chinese?: Minority Education and Ethnic Identity among Three Ethnic Groups in China

Hansen, Mette Halskov

The Chinese Communist Party has put great efforts into establishing a state education system reaching all corners of the People's Republic. In ethnic minority areas one of the important objectives of the education system has been to promote the non-Han peoples' identification with the official interpretation of the Chinese nation, the 中华民族. The establishment of so-called "minority education" (民族教育) has been put forward as a strategic way of adapting the state school to the specific needs of minorities with a low level of Chinese education. Still, in terms of curriculum the Chinese education system is highly standardized. Students all over the country are by and large presented with the same image of the Chinese nation, and the same interpretation of what it means to belong to a "national minority" (少数民族) in China. The Chinese state school seeks to transmit the government's ideology concerning the Chinese nation and the unity of the nationalities, but at the same time it denies, in many minorities, the usefulness (and sometimes even existence) of the minorities' own languages, histories, cultural values and ethics by omitting them from the content of the education.

Based on the analysis of images of the nation and the concept of national minorities as transmitted in state education, the paper discusses how and why three different ethnic groups in Southwest China (Naxi, Tai and Akha) have responded differently to these images and to the state school's demands for cultural adaptation. The paper argues that standardized, homogenizing education is in itself incapable of installing in the minority students an identification with the state, nation and party that eliminates the importance of their feelings of ethnic affiliation. By diminishing the cultural and political values of the minorities' own languages, customs and histories, the standardized education system risks

in fact to support an increased emphasis on ethnic identities and cultural differences. There is a wide range of different responses to the standardized education which to a large extent are impossible to predict because they depend on local factors, such as the historical relationship with the Chinese state, ethnic connections across borders, religious communities and local ethnic hierarchies. Standardized state controlled education is in no way capable of eradicating the importance of these factors, but it does play a role in determining the direction and form of ethnic identity.

Thus, some groups (for instance the Naxi) are actually able to use their long-term participation in Chinese education to establish and express themselves as an ethnic minority within the context of the People's Republic, without violating the government's intention of promoting the Chinese nation as an identity covering all ethnic groups in China. Others (for instance many Tai in Sipsong Panna, 西双版纳) tend to reject the Chinese education because it collides with religious traditions and compels students to alienate themselves from their cultural heritage and history as a nation. Others again (for instance the Akha and the Jinuo in Sipsong Panna) may find strategic advantages in adapting to the Chinese school system and downplaying ethnic identities in order to fight low positions in a locally defined historic ethnic hierarchy. One of the aims of the paper is therefore to discuss the ability of the Chinese state to direct ethnic identities and promote the vision of a common Chinese nation through the state education system in ethnic minority areas.

Development of Ethnic-Society and Change in Ethnic-Culture

Jin, Binggao

The Ethnic Minorities in East Asia in the Period of Social Transformation and Cultural Transition

Nowadays, the cold war has ended, and the world is to establish a new world order. Seeking peace and development is the tendency of the day.

East Asia, where the economies are developing most rapidly in the world, is confronted with conflict of culture and the problem of social transformation of ethnic society especially society of ethnic minorities.

After ten years' reform and opening to the world, all ethnic groups, especially ethnic minorities in China, are encountering the conflict between traditional culture and modern civilization, experiencing the process of keeping the genius of traditional culture and absorbing advanced contemporary culture. Particularly, with putting the Socialist Market Economic System into practice, the social development and cultural transition of ethnic minorities in China are all the more noticeable.

Approaches and methods as well as degrees of adaptability and participation in Socialist Market Economy of all ethnic minorities are varied. Each has its own features.

Difficulties and problems each ethnic group encountering in social transformation are different in quantity and gravity.

Development of Ethnic-Society and Transformation of the Society

Ethnic society, social ethnic groups, ethnic groups and society are closely related. The development of ethnic groups is restricted by the laws of social development. Development of ethnic groups in multi-ethnic countries is closely related with the social development and the development of ethnic relations.

With the action of overall coordination of ethnic people, the natural environment and the society, ethnic development is to renew, coordinate the ethnic group's whole internal structure, quality, and all the external features as well as the social relations among ethnic groups, promoting the ethnic qualitative evolution and quantitative expanding, to realize ethnic development, social development and people development. In essence, it is the improvement of an ethnic group's subsistence and evolution both in quality and in quantity.

Development of ethnic groups, also, is the development of ethnic society. At present, the social development of ethnic minorities in China and East Asia is in the course of social transformation.

Only on the basis of ethnic society's fuller development, with proper modes and methods of keeping ethnic cultural characteristics of its own, absorbing some acceptable elements of other ethnic groups' culture, can the social transformation be realized comparatively better and rapidly.

Good social transformation experiences fewer throes, and the time needed is comparatively complex, including political, economic, cultural, and social conditions etc.

Social transformation is affected by all factors of the society. First of all, it is influenced by the environment of times and society. Today, the cold war has ended, all the nations are managing to develop under peaceful circumstances. In East Asia China, under the situation of overall opening to the world, is developing very fast. And all these, given by society and the age, are the good environment for the development of ethnic minorities in China. Secondly, it is influenced by the policy of the government, we can say that, policy is also an environment, a resource. Special, preferential and flexible policy is given to the ethnic minorities to help them to develop their society. Thirdly, it is affected by concrete ethnic living space, ways and situation of residence. For example, influences from farming region, pastoral area, city industrial area, regions where ethnic groups live in compact communities, regions where inhabited by several ethnic groups, regions where ethnic groups live scattered are different from each other.

The Role of the Ethnic Cultural Change in the Development of Ethnic- Society

Each ethnic group grows in acculturation, cultural communication, and grows in the course of contacting with other ethnic groups.

Development of each ethnic group is based on a certain cultural background, which would affect the development of the ethnic group positively or negatively.

This cultural background, in fact, is the result of cultural communication and acculturation among ethnic groups. Today, although the development of ethnic groups is based on their own cultural background, they can't avoid the effects of other ethnic groups' culture from the outer world. So, consequently, taking the original ethnic culture as dominant, absorbing some acceptable elements of other ethnic culture as one part of the new ethnic cultural background.

The change in ethnic-culture and the real development of ethnic-culture, are always realized on the basis of maintaining its own ethnic cultural characteristics and absorbing some elements of other ethnic groups' culture.

Absorbing the acceptable elements of other ethnic groups' culture, keeping the marrow of its own ethnic-culture and digesting them as its new ethnic-culture, this is the process of change in ethnic-culture.

Change in ethnic-culture plays an important role in the development of ethnic-society. It is the case to both East Asian and Chinese ethnic minorities.

Various Problems Concerning Contemporary Ainu Ethnic Independence Movements: From the Modern Policy of Assimilation to Current Discussions for Enacting a New Law

Ohtsuka, Kazuyoshi

The Contemporary Movement for Ainu Ethnic Rights

In recent years, various movements have been developing that aim for the acquisition of rights for the Ainu as a distinct ethnic group. They base their case on the historical fact that from ancient times the Ainu have lived within the Japanese archipelago and produced their own unique culture. They have been demanding that a special fund be set up to appeal for the recognition of their rights as original inhabitants, the end of ethnic prejudice, the correction of economic discrimination, and other measures to guarantee the continuity of Ainu traditions.

In March 1995, round-table discussions were begun for a new law to protect the culture of the Ainu as an indigenous group within Japan, in the form of a personal advisory panel of academics and experts – the Utari Committee – serving Chief Cabinet Secretary Igarashi. The background to this was not only the rise of indigenous people's movements throughout the world, witnessed for example by the UN decision to institute 1993 as the Year for Indigenous Peoples, and an Indigenous Peoples of the World Decade starting in 1994, but also the appearance of a coalition government in Japan. In April 1996, the Utari Committee report was published. Although it failed to acknowledge how the rights of the Ainu as an indigenous people conflict with the present constitution, it nevertheless recognized how the Ainu form a distinct ethnic group within the Japanese archipelago and moreover regretted how the modern Japanese state is responsible for the fact that Ainu have become the victims of discrimination and economic destitution. It appealed for legislation to ensure the survival of Ainu culture, after so many years of

persecution.

In response to this report, the government included measures concerning its cultural policy in the 1997 budget. The relevant law is the Law for Protection of Native Hokkaido Aborigines, enacted in 1899 (year 32 of the Meiji era), and still in force despite so many other revisions. Thus in the course of 1997, the Diet will be debating legislation for the Ainu as an ethnic group. This in fact will be the very first law to mention ethnic rights, and its meaning for modern Japan is consequently enormous.

Past Policies Concerning the Ainu

The seizure of Ainu territory (Ainu Moshir) by Wa-jin (the inhabitants people of Honshu, the main island of Japan) began in 1550, when it was decided to annex a part of the Ainu chiefdoms in Ezo-chi (present Hokkaido) and integrate them as a single colony. The Wa-jin set up trading posts where they would not be subject to Ainu attacks. From then on, until the modern period, the organised exploitation of the Ainu took place on a large scale. Forced labour etc. made life very hard for them. Nevertheless, basically the aim of the Wa-jin was not the eradication of Ainu culture - their language, beliefs, rituals etc. - but the exploitation of natural resources. At that time, they wanted to obtain whatever was of commercial value as cheaply, as safely, and in the greatest quantity possible.

In 1799, when Russian power seemed to be encroaching upon Ezo-chi, the Shogunate decided to formally bring Ezo-chi and its Northern environs under its direct control. The year before, in anticipation of this move, it had commissioned Kondo Juzo to make a survey of this area. Kondo's report advocated various measures to change the motives of administration away from the simple extraction of resources. These recommendations became the origin of the Japanese policies of assimilation. Essentially he denigrated Ainu lifestyle and culture as 'uncivilized.' He recommended the Ainu first be taught to read and write in Japanese, and then be made into farmers, instead of making a living from fishing, hunting and gathering. In clothing, hairstyle, names etc., a complete conversion to Japanese styles was set in motion. Examples of future imperialist policy such as the forced changing of names as a sign of assimilation were thus already being conceived by Shogunate officials. Nonetheless, these schemes did not integrate Ezo districts. Basically, until the modern period, administrative policy kept the Ainu apart.

The Formation of the Modern Japanese State and the Eradication of Ainu Homelands and Culture

When government authority aspired to the formation of a modern Japanese state, it used the example of the Western powers as a model. The government re-named Ezo territory as Hokkaido. The lack of state capital prompted the appropriation of vast areas and thus immediate access to their resources. In 1869 a reclamation office with administrative powers was established to aid development. Thus legislative devices

ensured that it was Hokkaido and not the existence of Ainu Moshir, the traditional land of the Ainu, which would be recognized, i.e. a territory that could be labeled 'land with no owner' and hence government property.

The formation of the modern Japanese state and its policies of exploitation of resources and assimilation meant debasement for Ainu society, and led to destitution and the eradication of traditional culture.

Assimilation Policy and Enactment of the Law for Protection of Native Hokkaido Aborigines

It is only in the modern period that the Ainu have lost their traditional homelands and become virtually unable to continue traditional activities such as fishing and hunting. Due to the assimilation policies aimed at their Japanization, the distinctive qualities of their language and culture were suppressed. They became trapped within a society in which Ainu language and traditional culture were stifled. The reclamation office did not have any programme for their relief. What was left to them therefore was just to scrape a living as day labourers, i.e. the very lowest kinds of work. The result was extreme poverty.

The dreadful situation of the Ainu came under international censure and eventually in 1899 the imperial cabinet enacted The Law for the Protection of Hokkaido Aborigines. However this law saw welfare policy in terms of encouraging agriculture and nationalist education; it was not intended to help maintain the Ainu as a distinct ethnic group.

Under this preservation law, the confiscation of lands for farmers thrived. But serious mis-reading of the text continues even now, in February 1997. I want to show very clearly how this preservation law was used by the Japanese government in Korea, after its annexation in 1910, as the blueprint of its imperialist policy. I also want to show how the policies applied to the indigenous people under Japanese colonial rule or trusteeship (in the Pacific) and the province of Manchukwo in North-eastern China all stemmed from the policies applied to the Ainu.

Contemporary Problems

Although the Japanese government of the modern period regarded the Ainu as a peculiar "ethnic group," its official policy was that they had to be assimilated. As said above, various policies concerning the Ainu have been framed in terms of 'welfare.' This paper shows this to be a misnomer. At present, the Japanese government, in response to the current trends' the wishes of the Ainu people, rising public opinion at home and abroad, and the work of the United Nations, is about to legislate to make a change from welfare policy to ethnic policy. The realization that the reversal of these policies is a common problem for the indigenous and minority peoples of the world, together with the rise of international solidarity are becoming a source of strength. Despite all of the obstacles, progress towards the enactment of new legislation for the Ainu, is currently being prepared by the Council for Promoting Ainu Policy, on behalf of the government.

Social and Economic Changes among Highland Minorities of Caucasus

Arutiunov, Sergei

The Highlanders of Caucasus are divided into some forty or fifty ethnic units' depending on the degree of "lumping" or "splitting" tendency in the count: many groups are considered as subgroups of larger ethnic units and often do not deny the fact, but nevertheless constitute by themselves certain quite distinct groups with a definite feeling of a specific identity, like Digors among Ossetians, or Kaitags and Kubachins among Dargins, to quote but a few examples. They speak languages of at least three absolutely different linguistic families: the North Caucasian proper (very often the West North-Caucasian, or Abkhaz-Adyghean group, with Cherkessians, Kabardins, Abkhazians, Abazins, and the East North-Caucasian, or the so called Nakh-Dagestanic group, with Chechens, Ingushes, Avars, Lezghins etc., are considered as distinct linguistic families in themselves); the Turkic family, including Balkars, Karachais, Kumyks etc.; and the Iranian group (of the Indo-European family), represented first of all by Ossetians, and also by some other smaller ethnic enclaves. They have different customs and different traditional costumes (especially among women; the main item of men's traditional costume, the so-called 'cherkeska,' a kind of long, broad-sleeved coat, was since the 18th century more or less uniform in the whole of Caucasus). They differ in their economic specializations, some relying more on fruit gardening, others on plough agriculture or cattle-breeding, depending on the climatic zone they inhabit. However, apart of the traditional men's costume, there have always been certain similarities in values, orientations, in observing some common rules of etiquette and everyday behavior, that made these people in the eyes of their neighbors, especially Russians, look like some more or less monolithic mass of proud, freedom loving, independent, warrior-like people, called collectively and indiscriminately "Caucasian Highlanders." The economy of these people had one common characteristic: they were basically poor. This poverty originated mostly from the rural overpopulation of the area, from the scarcity of arable lands and pastures, the ownership and exploitation of which was a cause for incessant international warfare, and much less so from the exploitation by their own feudal lords. The latter preferred to maintain friendly, often kinship-bound relations with their subordinates, to rely on their loyalty during frequent robbing raids to the adjacent territories. Such raids often constituted the only respectable and decent occupation for a nobleman. The benefits of the raids were not so much in valuables and occasional captive slaves (though in the Western part of Caucasus in the 18th and early 19th centuries quite a number of slaves used to be exported to Turkey), as in cattle. Only under Russian rule, by the end of the 19th century, production of wool, hides, cereals, and milk products (cheese, butter) for cash gained importance.

In Soviet times, mainly after the collectivization of early 1930's and especially after the reconstruction of the national economy following the end of the Second World War (or

the Great Patriotic War of 1941–1945, as it is officially called in the Soviet historiography), very little remained of the traditional economy and traditional social structure of the Highland minorities of the Northern Caucasus. Similarly to the Russian proper rural population, they had been collectivized and organized into large collective farms, embracing each one or several villages. Sovkhoses, or the state-owned specialized farms, with a hired agricultural labor, were also organized on a large scale. Collective farm members or hired sovkhos laborers, in the past mostly land-less peasants, were allowed to have only very small land plots and a limited number of cattle. Due to an intensive labor input, however, the productivity of these household-owned parcels of economy was much higher than that of large collective or state-owned farms.

We shall not describe the details of the situation of the postwar years, which all were filled with the incessant struggle of the farmers (or laborers which was the same) and the local and central authorities: the farmers tried by all means to increase the size of their plots and herds, while the authorities tried to reduce them as near to the zero point as possible, to force the farmers to render more labor efforts to the collectivized lands and herds.

Meanwhile both education and urban-oriented social mobility proliferated and the minority ethnic groups which were initially more than 90% rural, became partly urbanized, many of their members now worked as intellectuals (scholars, teachers, doctors, government officials and other employees), vendors, clerks, and of course as miners and factory workers.

Still, though exact numbers in each case vary greatly, one can assume that while among ethnic Russians about 70% or more, depending on the region, are urban dwellers' among minorities, to the contrary, usually 60–80% and even more, are rural dwellers, i.e. farmers.

I use here the term "minority" indiscriminately, including even such nations as Chechens, who number more than one million and in their original ethnic territory are certainly a majority. However, they can be regarded as a minority within the Russian federation, not only in numbers compared to Russians, but also in their social status.

Indeed, in recent years, a phenomenon developed in Russia which was practically unknown in the former USSR. It is the practically undisguised attitude of a racist contempt and suspicion towards ethnic minorities, especially the so-called "persons of the Caucasian nationality." There are secret instructions by the Ministry of Interior to prevent and minimize their settling in the areas outside their republics, a requirement of their registration at police stations, they are virtually terrorized by the police at every occasion even when they have the due registration forms etc. All this looks very similar to the apartheid regime in the former South Africa. Everybody who looks differently from a 'genuine Russian' may become a victim of such attitudes, shared not only by the police but also by many ordinary people. I am aware of such incidents happening not only to Chechens or Dagestanys, Armenians or Georgians, but also to Buriats, Yakuts, and

accidentally to some dark-haired 'Caucasian-looking' Moscovite Jews.

The roots of this ever-increasing new Russian xenophobia cannot be discussed here in details, but certainly it contributes considerably to certain trends among minorities: to remain, as much as possible, within their own ethnic territory; consequently to increase their power, influence, autonomy and independence within this territory; to consolidate and strengthen their economic and social positions, often at the expense of the neighboring ethnic Russian population; to resuscitate, revitalize and develop the culture which is considered by themselves traditional, including the native language and religion, in this case Islamic faith in particular.

These trends receive in many cases some significant support from other Islamic countries, particularly Turkey, but much more important is the feedback from the descendants of the former Mahadjirs, emigrants of 1860's who settled in Turkey, Syria, Jordan and other countries of the Near East and now are actively visiting and propagating their influence in their old homelands, though so far very few, quite understandably, decided to return to settle here permanently. But they participate in some joint ventures and provide a considerable support to their relatives who stayed in the homelands. All this was unthinkable still in the early 1980's.

All aforementioned factors contribute to some dramatic changes in the general social and economic situation in the formerly autonomous, now technically "sovereign" republics of the Northern Caucasus.

What are the main resources and the main industries in these republics? Chechenia with its large oil fields, refineries, machine building plants, now badly damaged by the war, is rather an exception.

In all other republics we mention first of all agriculture, especially, technical cultures, like cotton, geranium coriander, tobacco, grapes for the production of wine and brandy, fruit orchards, supplying fruit, for the production of juice and canned preserves etc. Corn, grain, vegetables are produced in quantities, but mainly for local consumption.

There is some industry-machines, tools, synthetic fibers and leather, canning industry, melting of metals from locally mined ores (tungsten, molibdenium, zynk, lead etc), and so on.

A very important place was occupied by tourist and recreational industry-sanatoriums, health resorts, skiing resorts. In Soviet times it was not profitable, but heavily subsidized by the state and trade unions (which was almost the same). A good deal of machine building and tool making industry was also subsidized, especially if it was a part of military-industrial complex.

All of these industries were manned partly by the local population, but often more with Russian workers.

The latter especially prevailed at two extreme points: the 'dirty,' non-prestigious level and the level which requires especially high technical skills. The agriculture was manned by aboriginal man power but to some 30% (except Dagestan) also with Russians.

By now all of these industries, with some exception of agriculture, are more or less in a crisis. Canned foods and other similar products experience on the Central Russian market a strong competition from imported Western food products. The buying capacity of the Russian population on the whole has sunk considerably. Without subsidies from trade unions most people are no more able to visit health and ski resorts. Those who can afford to pay often prefer to go to Cyprus or Southern Turkey, etc. The general cash income of the population in the North-Caucasian republics has markedly decreased. Now it is about 50–60% of the average income in Moscow, and less (the further to the East, the less). It is partly compensated by the natural economy, when fruits, vegetables, milk, meat and other food stuffs are not bought, but are produced within the household, and this helps to support even many aboriginal urban families, but among Russians, where kinship ties are less developed, urban families lack this support.

Research (R. Taziev, manuscript) made in mid-1980's, revealed that among miners and workers of the Tyrny-Auz tungsten combine (Kabardin-Balkaria), if we take the income of Balkar families as 100, the income of Kabardin families is slightly more than 90, and in Russian families only 70.

This means that Russian families will reproduce and remain in the area with less stability than Kabardin families, let alone Balkar families. And the general regularity in other regions of the northern Caucasus is: the less Westernized and Russified the population, the more it preserves the features of the traditional culture, the higher is its vitality, its rate of reproduction, its general success.

The less urbanized populations can more easily, make a transition required by the new situation: *to shift from the employment in modern mechanized industries to self employment, to cottage industries and small scale industries of various kinds.*

The tourist industry, which used to be completely under the state and trade union, i.e. Russian control, now is more and more under the control of local people. However, for a more successful reconstruction and operation of the tourist industry, a number of conditions must be met which are absent so far, and on which I shall touch upon in more detail in the rest of my paper.

The privatization has virtually only begun in the republics of the North Caucasus. As in the rest of Russia, there is not yet a firm legal base for it, and it marches in an irregular, uncontrolled, wild manner.

Under these conditions it is easy in the course of an uncontrolled privatization to provoke some ultra-nationalistic emotions and activity, caused by the desire to monopolize the process of privatization along ethnic lines, and nearly doomed to become a source of a permanent ethnic tension and conflict.

Therefore the authorities and the presidents of the Caucasian republics, who are all (with the exception of the separatist Chechenian leadership and of Ruslan Aushev of Ingushetia) former prominent communist functionaries, try their best to restrict the process of privatization, to maintain in a slightly modified form the status-quo of the

collective and sovkhos agriculture. The privatization proceeds never the less, and in the rest of my paper I shall also try to demonstrate some details of its progress, as well as the major handicaps in its way.

If there is any better economical future for Karachai–Cherkessia, Kabardin-Balkaria, and also for the republics to the east of them, it lies not in metallic ores, not in industry and even not in agriculture. Undoubtedly it lies in the development of tourism. For many decades the mountains of Caucasus have been a Meccah for tourists, hikers, mountain-climbers from all over the Soviet Union. Being not very rich, these people could not bring too much money to these republics and what they brought was not efficiently used, but in the framework of a liberal market economy tourism here might become as important source of income as it is in Spain or Greece. Almost all republics of Caucasus have a favorable climate, rich nature of an unsurpassed beauty, plenty of historical relics, exotic customs, ancient architecture and everything else that is needed for a tourist industry. Everything – but not in the social aspect. A successful tourist development needs security, political and social stability, suppression of crime and terrorism, a decent and efficient police force, and so on. Most of these prerequisites so far are absent in the Caucasus area. With better government efforts they probably can be provided. But there is one more condition still more difficult to be met. Tourism means service: tourists must be served. People in Spain, in Greece, in Turkey etc. do not mind rendering services to foreign tourists, but aborigines of Caucasus do. Not only do tourists often shock them by their exotic and indecent (from the local point of view) behavior. The traditional form of pride of highlanders often equates service with servility, and they are often unwilling to work in the sphere of service, or do their job inadequately. Many new owners of restaurants, inns and other tourist enterprises (from among local nationalities) often complain how difficult it is to hire a waitress or a maid: women of local nationalities refuse to work, while Russian women (who comprised the bulk of manpower, or rather womanpower in the tourist enterprises in the Soviet time) either leave for other areas, or are reluctant to work with a non-Russian boss, in a remote place in a non-Russian environment. It is obvious that for the future of tourism in the Caucasus not only some changes in the national psychology of aborigines are needed but also a serious improvement in relations and mutual attitudes of the Russian and non-Russian population.

Ethnic Culture and Economic Development Brought by Tourism: In the Case of the Dali Basin, Yunnan

Yokoyama, Hiroko

Yunnan is a frontier province at the southwestern end of China. Its national boundary extends for more than 4,000 kilometers. This, China's "frontier," adjoins three Southeast Asian countries. Over 90% of the territory is mountainous area and the scattered flat areas, called "bazi" in Chinese, have a relatively high population density. These geographical conditions are inseparably connected with its history: that is, twenty-six different ethnic

groups, including the Han, have lived there for many generations. Yunnan, where the ethnic minorities account for one third of the whole population, is one of the typical minority areas in China and it was known as an under-developed areas, by comparison with the national standard.

However, Yunnan has been making steady progress recently through its tobacco industry, tourism and its relationship with the Southeast Asian countries. Some of the ethnic minority areas with better conditions have achieved rapid economic development. My paper deals with a typical example, the Bai, who live in the Dali Basin of Western Yunnan. I discuss the dynamics of culture change among them, in the economic development brought about through tourism, focusing upon some contemporary changes in particular.

Economic Development and Tourism

In the Dali Basin, concrete measures of policy of reform and opening began around 1982. The introduction of the system of production responsibility resulted in higher grain yields, and the encouragement of side-business increased the cash income of the peasants. Tourism has had a very clear impact in the economic development of the past fifteen years or so.

The government of the Dali Bai Autonomous Prefecture, being fully aware of the area's natural, historical, and ethnic conditions, has regarded the development of tourism as important from the beginning of the reform and opening. In particular, in the center of the prefecture, the Dali Basin area, was approved by the State Council as one of the First Phase National Best 24 Cultural-historical Cities in March of 1982, and as one of the National Best 44 Scenic Spots in December of the same year. The government's evaluation of Dali as a location of good geographical and other conditions of tourism led to the rather early opening of the area to foreigners in April 1984.

Especially under the Eighth National Five-Year Plan, which started in 1991, the prefectural government announced the growth of tertiary industries as a large target. The industrial structure at the end of the Seventh National Five-Year Plan (the proportion of the primary, the secondary and tertiary industries was: 46 : 27 : 27) had changed tremendously by the end of 1995 (the proportion was: 38 : 31 : 31), and tourism fulfilled its expected role as the leader of expanding tertiary industry.

According to the statistics of Dali Prefecture, the yearly number of tourists from abroad up until 1984 was just over 100, but exceeded 5,000 in 1984, and reached more than 40,000 in 1995. The tourists from abroad increased very rapidly after 1991. At the first stage of this period, the increase of tourists from Hong Kong and Taiwan outnumbered others and tourists from Southeast Asian countries, such as Singapore, Thailand, and Malaysia, initiated their striking increase around 1993. All those tourists are Asians, most of whom have Chinese ancestry. Another recent characteristic in the growth of tourists is the increase of domestic tourists.

The Tie-Dye Industry and the Reassessment of the “Tu” Category

In Azure Village where I have been conducting field work since the spring of 1984, one of their traditional sidelines before the Liberation was indigo dye. Since the village tie-dye factory was built in 1983, the production of indigo-tie-dye commodities for tourism and export has been developing on a rather big scale, which has contributed greatly to the increase in the cash income of the villagers.

What is worthy of notice about this is that the tie-dye industry has been developing through two-way communication with foreign tourists or traders in trading-partner-countries, that is to say, through cultural exchanges on the international level. This led the Bai villagers to value their own traditional techniques and culture once again. In other words, it encouraged them to reassess things of the “tu (indigenous and local)” category.

The boom of indigo tie-dye was extended to the Han Chinese. For a while it transcended the circle of tourism commodities into fashion, and the indigo tie-dye cloth was popular within China as dress material. At present the boom has died down among the Chinese people on the whole, but among the Bai villagers we can still find the situation that they now use indigo tie-dye cloth more than before in their everyday lives. The tie-dye culture seems to support at least a part of the base of their ethnic pride and identity.

From the “Invention” of *San-dao-cha* to Its Standardization

These past two or three years, the word, “三道茶 *san-dao-cha* (three- courses-of-tea)” has appeared and often been used in connection with Dali Basin or the Bai ethnic minorities. “*San-dao-cha*” refers to either a way of entertaining guests with three kinds of tea or the three kinds of tea themselves. Now it is sometimes described with an advertisement, “traditional since *Nanzhao* (the local kingdom established in the eighth century) period.” However, the word, “*san-dao -cha*” itself first appeared in the early 1980’s and was originally coined by people who engaged in culture affairs of Dali. Among the Bai people, what has existed from traditional times is a custom of serving a kind of bitter tea roasted in a small ceramic teapot over fire and another kind of sweet “tea” made of raw sugar.

The present style of “*san-dao-cha*” became widespread after a talented man of Han Chinese succeeded in commoditization of *san-dao-cha*, using the Bai custom of serving a variety of tea. He had been engaging in a local tourism development project, and opened a cozy cafe serving *san-dao-cha* on the city gate of Dali as his private sideline business. *San-dao-cha* afterwards added another style of entertaining the guests with Bai dance and music besides three courses of tea. This performance of *san-dao-cha* now is a special-feature program in the “Bai Village” within the Ethnic Village Park in Kunming, presenting an aspect of Bai culture.

In this process of “invention” and wide diffusion of *san-dao-cha*, some local intellectuals and scholars have even started discussing its “standardization.” On the other

side, although some Bai peasants have already set about utilizing *san-dao-cha* as a tourist commodity, the “invented” *san-dao-cha* seems not to have infiltrated into their everyday lives at present, that is to say, there has been no impact on the level of the Bai lifestyle.

Culture Change and Economic Development

Through the situations above, the following argument about the state of culture change and development can be concluded.

1) Both of the two examples of the tie-dye industry and *san-dao-cha* present the aspect that the elements of an ethnic culture are commoditized through tourism and bring about an economic interest. However, they differ in regard to who undertook commoditization and the impact of commoditization to the ethnic culture.

2) The tie-dye industry developed tremendously from the exchange with people of different value systems with whom the Bai peasants formerly had very little opportunity to make direct contact. This kind of exchange is the product of mass tourism in which the tourists move quite a long distance. Also, after the export of tie-dye cloth and goods started in full-scale, the Bai villagers have another way of communication with foreigners in the form of trade mediated by the trading company in Kunming. Though this communication is not direct, it is fairly effective owing to the help of the experts in the trading company. Much attention should be paid to the following fact: the former Bai value system, which originated in the old politico-cultural power relationship within the local context, changed or diversified through communication with people who formerly stood very far from or had very little connection with Bai villagers. What is more, I can stress the possibility that the contacts and exchanges outside the economic bloc so far might bring about an economic change for development.

3) It may be too simple to suggest that “traditional culture” can be damaged or spoiled by tourism. The Bai villagers themselves distinguish the culture commoditized for tourism from the culture upon which their everyday lives is based. After the reform and opening policy, many kinds of cultural changes took place, while tourism in Dali developed. However, those cultural changes were chosen by the Bai people themselves, and do not seem likely to return to their former state like the religious activities which were banned after the Great Leap of 1958 and have been recovering over the past decade or so. On the other hand, although the ethnic culture shows changes on the surface, the people’s attachment and pride toward their culture stays the same.

4) The natural environment is also a very important resource for tourism in Dali. One of the symbols of the region, Erhai Lake, now suffers fairly serious water pollution brought by tourism. The administrative measures, on the other hand, progressed just because of the *prefectural government’s policy of tourism development*. The government is about to take a new measure to realize both the development of tourism and the conservation of nature. The new measure will be a hard blow to fishing in the lake and will change the life of Bai fishermen greatly. This is a very difficult problem of seeking a solution in the contradiction.

However, it is worth considering whether the decision of the government is the only way and whether the voice of the Bai people themselves is reflected in the government's decision.

Oroqen Culture and Modernization

Hong, Shirong

The world is becoming smaller and smaller. People can move round half of the earth in the time in which the former preindustrialized people could only visit their neighbor town. Every year, more and more people are fascinated by the world market economy, and the way of life is changing by the influence of newspapers, broadcasting, TV, and computers.

This article intends to study initially the cultural adaptability and cultural features of the Oroqen and its national developing problem in the process of cultural propagation.

An Introduction to the Traditional Culture of the Oroqen

The Oroqen live in the remote and thickly forested mountains of the Greater (Lesser) Xing'an mountains, in northeast China. They were still in the primitive commune stage of the primitive society until the foundation of the People's Republic of China and the whole nationality lived only by the hunting economy. The Oroqen have a rich experience in hunting, gathering and fishing. In both material and cultural life, they created a special living culture and an old culture with the hunting economy. Thus it can be seen that the connotation of the Oroqen is very rich. No matter how simple and primitive, the hunting culture of the Oroqen is a tremendous accumulation of the technology, economy and all kinds of factions in its long history. It is an important part of the cultures of Chinese nation, and it still has a great significance.

The Cultural Feature of the Oroqen in the Process of Modernization

1) With foundation of new China and the implementation of national development strategies, the modernization has also affected the area of the Oroqen.

2) (1) The railway transportation has changed the remote and thickly forested mountains.

(2) The people of Han nationality moved into the area of the Oroqen.

(3) The primitive forest in the Greater Xing'an mountains has been exploited.

All kinds of this situation have seriously destroyed the primitive ecosystem of the area of the Oroqen, and have also changed the national composition of the area. The proportion of the people has been changed from the original 98% to about 2%. Now the Han nationality plays the lead on the stage of the Greater Xing'an mountains.

3) The Oroqen have to adapt themselves to the changed existence environment, so as to solve their living problem.

(1) The nomadic and hunting living way has been changed into a settled living

way.

- (2) The settled living way has changed the economic structure of the Oroqen. They began to study other technology and culture and developed a diversified economy, thereupon ending the simple hunting economy.
 - (3) The primary school, middle school and even the school of nationalities have been built up.
 - (4) The broadcasting station, TV relay station, library, cinema, and so on have been set up with the contribution of the government.
 - (5) The technology of medical treatment has also made a great progress.
- 4) The cultural feature of the Oroqen in modernization.

With the development of 40 years, especially with the influence of the market economy which began from the 1980s, both the material and cultural life have been changed greatly.

- (1) The deep feeling of nationality that hides in the society of the Oroqen is now displayed extensively. Such as traditional customs, festival courtesy and so on have regained largely.
- (2) Modernization has changed the traditional customs. The traditional festival of bonfire (held annually on June 18) has now been changed into activities of country fair trade and consultation of science and technology.
- (3) The development of a commodity economy permits the spreading of the national culture of the Oroqen. Such as "the culture of birch" has now been accepted more and more by the other nationalities.
- (4) As a tourist resource, the culture has an important role in the area of the Greater Xing'an mountains.
- (5) The consciousness of the Oroqen has increased.

The great changes in the area of the Oroqen aroused the consciousness of the nationality. Their self-esteem, the sense of honor and the sense of equality are getting.

The cultural feature of the nationality shows the adaptability of the national culture of the Oroqen in the modernization. Of course, some of these which have roots in the traditional culture have some negative effect.

The National Culture and the Development of the Oroqen

- 1) "Sublate" is the only way to promote the development of the Oroqen.
- 2) The changes of the culture sense of the nationality must be promoted mainly by themselves.
- 3) To pick out the point of contact, and to promote the development of the national culture and the Oroqen.

Tibetan Buddhism and Traditional Culture of Tibet

Jiang, Ping

Tibet Autonomous Region of the People's Republic of China is the place where Tibetan Buddhism originated and developed. Buddhism was introduced into Tubo Kingdom in the seventh century and lasted for more than 1350 years. In a complicated and tortuous historical process, Tibetan Buddhism with unique characteristics was formed and had wide and deep influence in Tibet. As soon as the founding of the People's Republic of China, the central government decided that a prudent policy on the religious problem must be adopted in Tibet. Religious beliefs of the common people should be respected, and the upper clique of the religious circles should be won over and be united. Since the peaceful liberation of Tibet in 1951, the central government has carefully carried out the policy of freedom in religious beliefs. Later on, through the social system reform, the feudal special privileges, feudal oppressions, feudal exploitations and feudal administrative system in the realm of religion have been abolished. A democratic administrative system was been implemented and hence, pushed forward, the religions gradually fit in with the socialist society. Undoubtedly, religions would exist in Tibet for a long time to come as an ideological belief and a kind of ideology to some extent. Therefore, it is badly needed to study on the problems of religions. Here is my opinion on the problems of Tibetan Buddhism and the traditional culture of Tibet.

Tibetan Buddhism: a Main Component Part of the Traditional Culture of Tibet

In accordance with the development of Tibetan society, the development of the traditional culture of Tibetan nationality can be divided into several minor stages, i.e. primitive social culture, social culture of slave system, social culture of feudal serfdom. The primitive society in which the ancestors of Tibetan nationality existed and developed was a long historical process. In this process, the sky-scraping and surrounding snow-capped mountains, the swift roaring rivers, dense and deep forest, and the wild animals have made attacks from time to time. For the Tibetan people in ancient times, those were either the sources of gaining living materials or the root of disasters they suffered. Stone instruments were made as a simple tool to struggle with nature, meanwhile ancient Tibetan people began to know the nature with their simple way of thinking. Then, totem worshipping and preliminary religions' concepts of legends about mountains gods, demons, and dragon kings came into being. These circumstances became the spiritual product of primitive social culture, and it also laid a foundation for the forming of the Bon religion which later appeared. Bon religion holds that Tsanpo was the god descended from the heaven to rule the humanity, this sort of saying provided the theoretical basis for Bon religion to serve the ruling class of slave owners. The Bonpo believers took the drum, bow and arrow, knife and sword as their religious instruments, to disperse ghosts and subdue demons, to predict good and ill omens, to pray for blessings and eliminate disasters, to cure diseases and manage funerals, and frequently to conduct ceremonies of killing

animals for worshipping gods. These phenomena became a very important content of the social and spiritual life in slave society. Before the propagation of Buddhism into Tubo, in the development process of the slave society, Bon religion always holds ruling position in the field of ideology. It had great influence on the social, political and spiritual life under the slave society, and played a very important role in the forming and development of the traditional culture of Tibetan nationality. Thus it became principal part of Tibetan culture at that time.

In the seventh century, Buddhism spread into Tibet through two main channels: India and the inland China. Buddhism, as a culture from the outside world with both Indian and Chinese feudal cultural characteristics, was introduced into Tibet, where the culture of Bon religion played the leading role. Consequently a sharp conflict of interests between the two cultures was certain to break out. Although Buddhism gained support from the imperial court and some nobles, however, because Bon religion not only played a leading role in the field of ideology and was deeply rooted in the society, but also became a powerful social and political force, it strongly resisted and opposed Buddhism. The conflict of fighting for ideological position between Buddhism and Bon religion became white-hot. Due to the fact that the ideological culture of Buddhism was at a more advanced level than that of the Bon religion, which fitted with the requirements of social development, Buddhism gained support from the ruling class and combined with the developing social system. Moreover, Buddhism adjusted itself continuously and carried out a policy of both struggle and compromise during the conflict with the Bon religion. Buddhism absorbed many aspects of religious ceremonies and rituals of Bon religion, thus a localized and nationalized Tibetan Buddhism came into being and a lot of Tibetan people started to believe in it. Later on, Buddhism developed into the road of integrating politics with religion, and the ideology of Tibetan Buddhism penetrated into the social political and spiritual life of Tibetan nationality. Whatever the philosophy, literature, art, calendar calculation, medicine, architecture as well as the local conditions and customs, ethics and moral, psychological qualities of Tibetan nationality are all deeply marked with the prints of Tibetan Buddhism. Tibetan Buddhism takes an absolutely ruling status in the field of ideology and becomes an important component part of traditional culture of Tibetan nationality.

Contributions of Tibetan Buddhism to the Traditional Culture of Tibet

1) Enriched and developed Tibetan language. In the seventh century, Tibetan king Songtsan Gampo of the Tubo kingdom sent his minister Thonmi Sambhota and others to the western regions and India, to study and comparatively research the languages of those countries. After they returned to Tubo, a historical standardization and reform movement of the primitive Tibetan language based on Sanskrit was conducted. It was a great pioneering movement with an epoch-making significance to the development of the history of Tibetan culture. In accordance with the records in the Tibetan historical

materials, the main function of Tibetan language in the early period was to translate Buddhist scriptures. The translation of scriptures started from the seventh century, and to the 14th century, a great amount of Buddhist canons were translated from Sanskrit and Chinese. According to the Tibetan Tripitaka in Dege edition, over 4,570 kinds of scriptures were collected. In addition to Buddhist canons, many works of other subjects were also included, such as philosophy, literature, art, astronomy, calendar calculation, medicine, and handicraft. In fact, it is an encyclopedia in Tibetan language. Through the translation of Buddhist scriptures, and the standardization movement, Tibetan language has become more standard and scientific.

2) Promoted the development of Tibetan literature. There were a great many Buddhist literary works in Tibet. With the translation and spreading of Buddhist scriptures, literature forms of Tibetan literature appeared, which opened new ground for the development of Tibetan literature.

3) Accelerated the development of the education of the Tibetan nationality. After the tenth century, monasteries monopolized the culture and education of Tibetan nationality, monasteries were not only the scene for religious activities, but also a center for studying and spreading scientific knowledge. In some big monasteries there were esoteric, exoteric, Hetuvidya, medicine and Kalachakra (wheel of time) colleges. Monks of these monasteries not only studied Buddhist knowledge, but also studied so called Five Kinds of Greater and Lesser Knowledge, i.e. astronomy and calendar calculation, logic, history, language, art, medicine and literature. Therefore, monks not only engaged in religious activities, but they were also intellectuals, such as doctors, painters, historians, linguists, experts of astronomy and calendar calculation and literature. A lot of well-known Tibetan scholars in history were cultivated in the monasteries.

4) Architecture, painting and sculpture were developed at an unprecedented rate. With the introduction of Buddhism into Tibet, successive Tsanpos, who believed in Buddhism, and the slave-owning class paid great attention to the establishment of monasteries of Tibetan Buddhism. Hence, the architecture, painting and sculpture of Tibetan nationality developed day by day.

Negative Roles of Tibetan Buddhism on Tibetan Culture

As mentioned above, Tibetan Buddhism as a main component part of Tibetan culture, played an undeniable active role in the development of Tibetan traditional culture. On the other hand, Tibetan Buddhism played a negative role in the development of Tibetan culture to some extent.

The negative role of Tibetan Buddhism was tied to its advocating an idealist outlook on the world and life, such as boundless sea of hardship, impermanence of human life, six stages of Samsara, Karma, Nirvana, etc. All the miseries and unfair phenomena of the slave society of Tibet are said to be the retribution of one's previous life. Tibetan Buddhism advocated the ideas of "obedience," and "tolerance," so slaves gave up the

struggle against all unreasonable phenomena. Doing good deeds for one's future life, the best way is to be a monk and practice Buddhism in order to escape from the suffering of Karma forever. The main idea of this idealist thinking is giving up on one's present life and pursuing the happiness of one's future life. In this way it confined people's ideology, fettered people's hands and influenced people's seeking of happy life as well as hindered the development of economy and culture.

Social Reforms and Problems of Ethnicity

Kryukov, Michael

From the age of "Zuo zhuan" in China and the work by Herodotus in Greece up to modern times, cultural characteristics of an ethnic group (such as specificity of traditional costume, food, etc.) have been considered to be the main objective criteria for determining ethnic boundaries and providing a definition of an ethnic group. It is just by the end of the last century that an important theoretical breakthrough has been accomplished that resulted in a shift from the traditional "objective" approach to the "subjective" one, the latter being based on the idea that the common sense of identity is in fact the most significant feature of such a grouping.

Unfortunately enough, Stalin's definition of nation that appeared to be outdated at the very time of its formulation entirely ignored the importance of ethnic self-consciousness while emphasizing such non-ethnic features as common economic make-up. As a result of its overwhelming influence on the whole ideological sphere in "socialist countries," studies in the theory of ethnos have been handicapped there for decades. As far as works by Chinese scholars are concerned, it was only in the eighties that some authors came to offer moderate innovations to Stalin's definition; they came back to stress cultural specificity as the main determinant of an ethnic group. It was stated that it is practically on this basis that the work of determining the ethnic composition of the population of China had been fulfilled in the fifties.

Nevertheless it can be clearly demonstrated that "objective" cultural criteria entirely fail to be a basement for isolating such artificially constructed entities as Yao, Yi, etc.

Although Chinese authorities are not eager to examine critically the results of the work done nearly half a century before, one may realize that quite a lot of unsolved problems are left from that time on. This is why a discussion of theoretical grounds for such an entertainment is still a topical problem.

Today it is not only the problem of using "subjective" criteria of ethnic boundaries based on self-identification of an ethnos but of searching for a more relevant way of determining ethnicity. A need of a new theoretical break-through is evident from the simple fact that self-consciousness is not limited to ethnic groups exclusively, other social entities possessing such characteristics as well.

The present author is trying to provide a new approach to the solution of the "culture-ethnicity" alternative by isolating quite another set of structural criteria based not

on common traits shared by the members of a given ethnos but on features that make it possible to differentiate between ethnic and non-ethnic groups.

This approach may prove useful for practical purposes while dealing with reexamination of the existing lists of ethnoses that is badly needed in the epoch of reforms which must include not only economic and political issues but ethnic ones as well.

Some Basic Questions of Modernization Concerning Chinese Minority Peoples

Tang, Chi

Nationality and its related studies involve not only academic research, but politics and psychology as well.

Nationalities and states, from the very beginning, are greatly influenced by changes – a theory which has not been proved wrong. A so-called nationality that shares a common district, language, religion, customs, and even a common blood relationship is always changing, internally and externally.

The fact that a nationality, state, or culture itself changes is anciently true. It is not a new thing. The birth, growth, strengthening, even stagnation, weakening, and revival of the Chinese nation, Chinese state, and Chinese culture correctly illustrate this change theory.

Chinese history has been developed by different dynasties of different nationalities. The formation of a united multi-national state is a process of long-term historical development. Certain minority peoples and the major nationality – the Han people – have been the central power of the Chinese state in certain times and in certain regions. In fact, many great Chinese dynasties were established by minority peoples or by groups which were closely related to minority peoples. However, all these dynasties never excluded themselves from the Chinese state.

The Chinese nation has been gradually developed by different nationalities of different origins and cultures. The Chinese nation has been developed from a primary national group, a primary united entity, a nomadic and agricultural entity, a nationality with the Han people in the center after the flowing, mixture, separation, and unification among different nationalities, and to an entity which included, actively or passively, other East Asian nationalities. After the Opium War, under the oppression of the great powers, various independent nationalities came to form a national entity where they shared joys and sorrows with each other. The fact that this Chinese nation is multi-nation-single-entity is not only a historical truth, but is also true at present and will be so in the future.

Since the unification in the Qin dynasty, China was united in one third, and divided in two thirds in the history thereafter. Even in a time of division, various divided groups did not exclude themselves from the Chinese nation. The formation of a nationality is similar. In the process of separation and unification, there are cases where a nation was

separated, but not totally divided, and where various nationalities were mixed, but not united. They were relatively stable, and finally came to be united.

When we understand clearly the historical facts concerning the Chinese state, nation, and its culture, we know that they cannot be properly explained by Western ideas of modern nationalism or nation-state. If we want to use the ideas of modern nationalism and nation-state to find explanations, we can use only the idea of multi-nation-single-entity.

Since the Opium War, the Chinese state, nation, and culture were greatly challenged by western European cultures which had laid the foundation of present world modernization. The internal or external disorder, friction, conflict, and opposition following the challenges existed a long time ago, and the degree of vigorousness was different in different times. In short, certain conflicts that were considered vigorous previously are weakened or solved, even without trying.

The fact that the Chinese nation encountered great challenges from western European cultures should be viewed from the viewpoint that it was the Chinese nation composed of various ethnic minorities and the Han people that was under military, political, economic, and cultural pressure of the West and Japan. Although such pressure had hurt China, it had also caused various independent nationalities to become closely related to each other and thus to form a single national entity. The Chinese nation became cohesive under the pressure of higher military technology of the great powers. From another point of view, under such pressure, searching for the liberation of the Chinese nation should be viewed as searching for the liberation of different minority peoples. The liberation of national minorities cannot be separated from the liberation of the Chinese nation. Liberation means to escape from the suppression of the great powers, and to catch up with them. Furthermore, the liberation of China's national minorities can not be achieved before the liberation of the Chinese nation.

In order to understand the above-mentioned Chinese state, nation, and its cultural characteristics, let us examine the themes of this conference:

1) The speed of cultural change in today's world is greater than ever before. The Chinese nation faces both internal and external interaction and challenges greater than ever before. As for the external challenges, both the Han people and national minorities face it, but the challenges faced by the Han people are greater and more direct. The challenges national minorities face are smaller and relatively indirect. The cultural challenges and influence the minority peoples face usually comes through the Han people.

Let us leave behind questions concerning the challenges of the Chinese state, nation, and culture.

Therefore, if we want to discuss the changes since China's minority peoples faced the challenges from western European cultures, we have to keep in mind the factor of the Han people. Besides, the idea of state sovereignty has its influence not only in political aspect, but also in ethnic and cultural aspects.

Based on factors such as traditional characteristics of the Chinese state, nation, and

culture, and modern trends as well, the PRC put forth laws and institutions of regional autonomy for minority peoples in order to uphold the principles of national equality, consolidation, and prosperity, to develop its socialist ethnic relations, and to make itself a highly civilized and democratic socialist country.

While dealing with questions concerning minority peoples, either based on the 1946 Constitution of the ROC or on amendments to the Constitution, the Taiwan government has given minority peoples privileges of regional autonomous institutions, political participation, ethnic status. It has also helped to develop their autonomous affairs, cultures, education, economy, and to preserve their life styles.

Governments on both sides of the Taiwan Strait have protected and promoted privileges and affairs for minority peoples in different times and on different levels. In the process of protection and promotion, because of historical background and present needs, each of the Chinese minority peoples has to cooperate with the Han people and other minority peoples. When we say that China is a vast country, full of resources, and has a great population, the first and second mean the minority regions, and the third indicates the Han population. However, the Han people enjoy higher technology, more capital, and more information. It is necessary for them to cooperate in order to search common prosperity. Of course, there are also conflict and disorder in the process. While examining the historical development of the Chinese nation, the former naturally includes the latter, and the latter will exist forever.

2) In a united multi-nation state or nation, both cultures of the major and subordinate minor nationalities can be seen. Such a phenomenon can be seen in different forms, on different levels, and with different contents. Even in a relatively single-nation state, nation, and culture, there exist differences. The problem is whether the similarities and differences between the whole, the major group, and minor groups can be solved properly. If the answer is positive, then the whole of the nation can last forever. If it is negative, it will lead to disorder, conflict, and even split. While examining Chinese history, it is clear that the wholeness exists all the time and has its influence. However, individual differences also exist. When there exists a strong central government, the Han people have more power, and the power of minority peoples is weakened. In the process of historical development, influence and penetration occurred between different minority peoples, between minority peoples and the major Han people. Thanks to different situations, expansion of the whole entity, expansion of the major group, changes of the major group, changes of minor groups, and even the disappearance of certain minor groups occurred.

From the cultural aspect, cultural tolerance is very important. A culture without tolerance can not last long. The tolerance of Chinese culture is great. Even Chinese minority cultures are tolerant. This is why Chinese nation and culture can last and develop.

It would be easy to understand and analyze the theory of two-level culture after we understand this nature of Chinese culture. There is no conflict between the history and

culture of the Chinese whole and those of individual minority people. For example, the Yuan history is a history of the Yuan dynasty and the Mongols, but it is also part of the history of China and the Chinese nation. The Qing history is a history of the Manchus and the Qing dynasty, but it is also part of the history of China and the Chinese nation. Both Mongol and Manchu courts of the Yuan and Qing dynasties considered themselves legitimate dynasties of China. Other nationalities also recognized their legitimacy. It was so, is so, and will be so.

Mandarin is not opposite to minority languages, particularly in modern times. While authorities on both sides of the Taiwan Strait urge people to speak Mandarin, they also apply laws and regulations to ensure the preserving and application of minority languages. Although practical application may be different, the main trend is the same: while urging the use of Mandarin, they also try to preserve and develop minority languages.

3) As for cultural reorganization and national self-identity reconsideration, it is like interactions between the whole, the major, and individual entities mentioned above. The relationship between the three is not against each other. The self-identity of minority peoples is not in opposition to the self-identity of the whole Chinese nation. There are abundant examples of mutual cooperation and adjustment in developed multi-national states. The success of such adjustment should be evaluated by the development and prosperity of the whole nation, especially of the major nationality. In modern times, economic development is an important criterion. In Chinese history, when the central government was powerful, people from neighboring regions came to join it; when the country was in turmoil, neighboring peoples went their own ways. Economic strength is the first criterion to judge the strength of a country. That is why governments on both sides of the Taiwan Strait try very hard to develop their economies.

From the above-mentioned three levels (whole, major, and individual) of the Chinese state, nation, and culture, let us now look at the modernization of minority peoples. We can study it from the aspects of population, culture, education, and ethnic relations.

1) Population: population of the minorities, population in minority regions, the Han population, population of the whole country, quality differences; relationship between population and ecology, ethnic conflicts; ethnic population policy, and internal migration.

2) Culture: the characteristics of Chinese culture, cultures and ethnic consciousness of minority peoples, minority cultures and their adjustment to modernization.

3) Education: the significance, nature, policy, and development of minority education; education and religion; education and modernization.

4) Ethnic relations: the development of ethnic relations, current ethnic consciousness and ethnic relations, chauvinism of the major nationality, and separation movements of minority peoples.

The basic questions of the modernization of Chinese minority peoples are very complicated. The above-mentioned population, culture, education, and ethnic relations are only part of the questions. Like modernization of the major Han people, the modernization

of Chinese minority peoples is based on the capability of economic development. If we want to see successful economic development, the fulfillment of the four modernizations, and the so-called “the basic task of minority affairs in the new era is to develop social productivity,” the basic issue of the modernization of China, including minority peoples, is economic development.

Socio-Cultural Changes and the Ethnic Development of Manchu

Guo, Hongsheng

Manchu is an ethnic group with a long history and culture and has made great contributions to Chinese history. Sushen in early Qin Dynasty, Yilou in Han Dynasty and Three Kingdoms, Wuji in the North Dynasty, Mohe in Sui and Tang Dynasty, and Muzhen in Liao, Song, Yuan and Ming Dynasties are all the ancestors of Manchu. Nuzhen in the middle period of Ming Dynasty were divided into three parts: Jianzhou, Haixi and Donghai, and lived in the northeast of China. Nuerhachi, a descendant of the commander of Jianzhou conferred by Ming Dynasty set up armed forces in 1583 and after 11 years of struggle unified Nuzhen group. He carried out a policy of Nulu (the lowest officer) opening up waste land, set up the “Eight Banners” and created Manchu characters. He established the later Jin Regime in 1616. In 1635 the Crown Prince named Manchuria as the ethnic name and changed it into Great Qing in 1636. At the same time both Mongol Eight Banners and Han banners were built up. In 1644 Manchu militaries marched through by Shanhaiguan and dominated Central Plains. It had ruled China for 267 years. The Qing Dynasty was overthrown by the Revolution of 1911. The new China built up in 1949 abolished the ethnic oppression system and a true equality has been realized among Manchu and other ethnic groups. There are representatives in various levels of people’s congress where Manchu live in compact communities and they take part in management of each state power. 11 Manchu autonomous counties have been built up since 1949 and they share regional autonomous rights just as other minority groups do. Manchu society has experienced four great changes in about 400 years from 1616 up to now. These changes have influenced the ethnic cultures greatly. With the changes of the ethnic group Manchu has developed into the most open group among China’s minority groups and has made important contributions to the country’s development.

The first social and cultural change took place in the period of Nuerhachi and Crown Prince. After unifying Nuzhen tribes, Nuerhachi created “Eight Banners” based on Nulu, then the Crown Prince completed the organization of Mongol Banners and Han Banners. This social organization had functions of administration, military and production, and promoted the socio-economic development. Agricultural production occupied an important position in the economic life. Because of functions and influences of many factors, Manchu society under slaveholders in the Later Jin Regime had developed a feudal relationship gradually. Manchu characters were created on the basis of Mongol characters

and Manchu tones in Nuerhachi period. It was perfected in the Crown prince period and became the spoken and written language of Manchu. It had been used to translate Han historical, classical and literature books. While Shaman religion developed Buddhism and Lamaism were spread to Manchuria. Because of growth of agriculture, horsemanship and marksmanship life of Manchu had been changed, followed by a gradual change of dress, etiquette and custom, architecture, music, song and dance all have assimilated other ethnic contents. This period is a stage of domination of Manchu, set-up of Qing Dynasty, ethnic and cultural development during the change from slavery to feudalism.

The second socio-cultural change took place when the Qing army dominated the Central Plains and started its rule over the whole country. In 1644 the Qing army crossed Shanhaiguan and set up a regime ruling the whole country. Soldiers of Eight Banners fought in one place after another and garrisoned main cities and towns. So, different from compact community in the northeast, Manchu now lived scatteredly in the whole country, as well as compact community in small areas. The Manchu aristocratic regime enslaved other ethnic groups brutally and forced the people to have a haircut and change their dress in order to realize Manchuization. While crushing the resistance sternly, ethnic contradictions were intensifying. After Kangxi came to power, a policy to mitigate ethnic contradictions was carried out, so agriculture developed, social productive forces were raised and the people's lives were stable. The feudal manor system gradually changed into a landlord economy. The whole social-economic-cultural life of the Manchu were close to Han's level. Culturally, Manchu assimilated Han's feudal ideology and culture. Han language was in common use, the moral principles of Confucianism became common moral principles. The people of talent coming forth in large numbers in the areas of literature, art and sciences, and they had made great success. This period is marked with Manchu rule over the country, assimilating Han's advanced culture and making brilliant contribution to the motherland culture.

The third socio-cultural change took place during the end of the Qing Dynasty to the Revolution of 1911. Since the middle period of the Qing Dynasty, the corruption of the aristocratic rulers made the contradictions intensifying both inside and outside. The revolution of 1911 overthrew the Qing Dynasty and abolished "Eight Banners", thus changing the dominant position of Manchu aristocracy. This great change had resulted in important changes in various social aspects of Manchu society. A lot of persons with breadth of vision became patriots and revolutionaries against the feudal corruptive rule; some became scholars and specialists in social sciences, natural sciences, cultures and arts; some became the reformists; some began to try to find a means of livelihood by themselves. The social life of Manchu masses distributed in each area of the whole country were also close to Han people's. They learned from each other and remained their own good ingredients. Mutual infiltration between Manchu culture and Han culture has enriched cultural treasure-house of each ethnic group. The history had put Manchu to the position ruling the country, also the history made Manchu people a most open ethnic

group. During the change, Manchu in great numbers had been integrated with Han people while Han people had also given up some bad habits by learning Manchu's excellent culture, which has become a common treasure of Chinese people.

The fourth socio-cultural change took place in the period from 1949 to "Reform and Open-up." Manchu people had been lifted out of discrimination against them, won a real equality with other ethnic groups, and enjoyed autonomous rights. During the process of socialist modernization, each stratum of Manchu society fully played their parts. The population of Manchu reached 9 million from 2 million, becoming the second largest minority group. Though Manchu has lost a lot of their characteristics during the hundred years' change, their culture has been carried forward, their ethnic consciousness and ethnic identity will exist for a long time. With the new market economy, Manchu culture has developed and its value grade has been raised. It is an important part of the whole of Chinese culture. As a member of the large family of China, Manchu will exist and develop further.

Several analyses and conclusions: 1) Manchu is an ethnic group with long history and brilliant culture, its upper-class ruled China for over 200 years and enriched politics, economy, society and culture of China. The whole ethnic group has made a great contribution to Chinese history and became an important member of the large family of China. 2) History put Manchu on a position ruling China, again history decides Manchu to be the most open ethnic group. At the beginning of ruling China, Manchu aristocracy tried to Manchuize other people. But in the end they had to incorporate the advanced institutions, ideology and cultures of other developed ethnic groups in order to consolidate their ruling position. The corruption of the aristocracy resulted in the overturn of Qing Dynasty, then Manchu people, scattered in each part of China, lived in the boundless ocean of Han people and become one of the most open ethnic group. Since 1949, Manchu has developed and its culture has been restored and carried forward. But they are less conservative and good at assimilating advanced ideology and scientific technology to enrich themselves and develop themselves. Openness has become their conscious action. Therefore Manchu is an ethnic group with great hope and bright prospects. 3) After the revolution of 1911, Manchu have lost a lot of their characteristics, its language has not been used among the people. But the excellent part of its culture has been kept and carried forward. The ethnic consciousness and identity will exist for a long time. As a component of the large family of China, Manchu will exist and develop further. 4) Ethnic group/nation is a historical category, with its own law of coming into being, taking shape, developing and withering away. It will wither away only after states and classes wither away. But this does not mean that one ethnic/nation is going to be assimilated by another ethnic group, but integrating with each ethnic group during a long period. The social-cultural changes taken place among Manchu people confirm the historical law of ethnic development, set an example for other ethnic groups.

執筆者一覧

横山 廣子	国立民族学博物館
トマス・ヘーベラー	デュイスブルグ大学東アジア研究所
蒋 斌	中央研究院民族学研究所
喬 健	国立東華大学族群關係與文化研究所
郝 時遠	中国社会科学院民族研究所
佐々木 信彰	大阪市立大学
松澤 員子	神戸女学院
野林 厚志	国立民族学博物館
ドゥルー・C・グラッドニー	ハワイ大学中国研究センター
松本 光太郎	東京経済大学
メッテ・ハルスコヴ・ハンセン	オスロ大学
金 炳鎬	中央民族大学民族理論政策研究所
大塚 和義	国立民族学博物館
ジェリー・S・イーズ	立命館アジア太平洋大学
ショウン・ギングスレイ・マラーニー	国際基督教大学
セルゲイ・アルチュノフ	ロシア科学アカデミー民族学人類学研究所
洪 時榮	中央民族大学
江 平	国家民族事務委員会民族問題研究中心
村上 勝彦	東京経済大学
ナタリア・ジュコフスカヤ	ロシア科学アカデミー民族学人類学研究所
ミハイル・V・クリューコフ	ロシア科学アカデミー極東研究所
唐 屹	国立政治大学
果 洪昇	中国社会科学院民族研究所
佐々木 史郎	国立民族学博物館
毛里 和子	早稲田大学
大林 太良	逝去（東京大学名誉教授）

作者一览

横山 广子	国立民族学博物馆
托马斯 海伯勒	杜伊斯堡大学东亚研究所
蒋 斌	中央研究院民族學研究所
喬 健	國立東華大學族群關係與文化研究所
郝 时远	中国社会科学院民族研究所
佐佐木 信彰	大阪市立大学
松泽 员子	神戸女学院
野林 厚志	国立民族学博物馆
杜 磊	夏威夷大学中国研究中心
松本 光太郎	东京经济大学
贺 美德	奥斯陆大学
金 炳镐	中央民族大学民族理论政策研究所
大塚 和义	国立民族学博物馆
伊滋	立命馆亚洲太平洋大学
马拉尼	国际基督教大学
啊儒就诺甫	俄罗斯科学院民族学人类学研究所
洪 时荣	中央民族大学
江 平	国家民族事务委员会民族问题研究中心
村上 胜彦	东京经济大学
珠克甫思咖雅	俄罗斯科学院民族学人类学研究所
刘 克甫	俄罗斯科学院远东研究所
唐 屹	國立政治大學
果 洪升	中国社会科学院民族研究所
佐佐木 史郎	国立民族学博物馆
毛里 和子	早稻田大学
大林 太良	逝去 (东京大学名誉教授)

Contributors

- Yokoyama, Hiroko National Museum of Ethnology
Hebererer, Thomas Institute of East Asian Studies, Gerhard-Mercator University
Duisburg
Chieng, Bien Institute of Ethnology, Academia Sinica
Chiao, Chien Institute of Ethnic Relations and Culture, National Dong Hwa
University
Hao, Shiyuan Institute of Nationalities, Chinese Academy of Social
Sciences
Sasaki, Nobuaki Osaka City University
Matsuzawa, Kazuko Kobe College
Nobayashi, Atsushi National Museum of Ethnology
Gladney, Dru C Center for Chinese Studies, University of Hawaii
Matsumoto, Kotaro Tokyo Keizai University
Hansen, Mette Halskov University of Oslo
Jin, Binggao Institute of National Theory and Politics Studies, The
Central University for Nationalities
Ohtsuka, Kazuyoshi National Museum of Ethnology
Eades, Jeremy S. Ritsumeikan Asia Pacific University
Malamey, Shaun Kingsley International Christian University
Arutiunov, Sergei Institute of Ethnology and Anthropology, Russian Academy
of Sciences
Hong, Shirong Institute of National Theory and Politics Studies, The
Central University for Nationalities
Jiang, Ping Center of Research on Ethnic Issues, National Ethnic Affairs
Commission
Murakami, Katsuhiko Tokyo Keizai University
Zhukovskaia, Natalia Institute of Ethnology and Anthropology, Russian Academy
of Sciences
Kryukov, Michael Institute of Far Eastern Studies, Russian Academy of
Sciences
Tang, Chi National Chengchi University
Guo, Hongsheng Institute of Nationalities, Chinese Academy of Social
Sciences
Sasaki, Shiro National Museum of Ethnology
Mori, Kazuko Waseda University
Obayashi, Taryo (the late) Formerly at Department of Anthropology, Tokyo University

Senri Ethnological Reports (Recent Issues)

- No.49 *Research Writing in Japan: Cultural, Personal and Practical Perspectives* (2004; Peter J. Matthews, Jun Akamine; in English and Japanese)
- No.48 *The Eternal Cycle: Ecology and Worldview of the Reindeer Herders of Northern Kamchatka* (2004; Takashi Irimoto; in English)
- No.47 *Music: the Cultural Context* (2004; Robert Garfias; in Japanese)
- No.46 *An Anthropological Study of Indigenous Use and Management of Marine Resources* (2003; ed. Nobuhiro Kishigami; in Japanese)
- No.45 北部カメルーン・フルベ族の民間説話—アーダマーワ地方とベヌエ地方の話 (2003; ed. 江口一久; in Japanese and Fulfulde language)
- No.44 *2002 Seoul Style: Evaluation of the Study and Exhibition* (2003; eds, Toshio Asakura, Fumiki Hayashi, Hyangle Kim; in Japanese and Korean)
- No.43 *Popular Tradition: Art and Religion in Northern Peru* (2003; eds. Luis Millones, Hiroyasu Tomoeda, Tatsuhiko Fujii; in Spanish)
- No.42 *The Twentieth Century in Mongolia: Interviews About the Way to Socialism* (2003; ed. I. Lkhagvasuren; in Mongolian)
- No.41 *The Twentieth Century in Mongolia: Interviews About the Way to Socialism* (2003; ed. Yuki Konagaya; in Japanese)
- No.40 *A Catalogue of the Bon Kanjur* (Bon Studies 8; 2003; ed. Dan Martin; in English and Tibetan)
- No.39 *Current Status and Issues of Studies in Endangered Languages* (2003; ed. Osamu Sakiyama; in Japanese)
- No.38 *A Survey of Bonpo Monasteries and Temples in Tibet and the Himalaya*(Bon Studies 7; 2003; eds. Samten G. Karmay, Yasuhiko Nagano; in English)
- No.37 *Tourism and Gender* (2003; eds. Shuzo Ishimori, Emiko Yasufuku; in Japanese)
- No.36 *Synthetic Materials and the Museum Object* (2003; ed. Naoko Sonoda; in Japanese)
- No.35 *Using Multimedia in Ethnology* (2003; ed. Yasuhiro Omori; in Japanese)
- No.34 *Hunter-Gatherer Societies as Open Systems* (2002; ed. Shiro Sasaki; in Japanese)

[国立民族学博物館刊行物審査委員会]

松園万亀雄 館長
長野泰彦 企画調整官
田村克己 民族社会研究部
大森康宏 民族文化研究部
石森秀三 博物館民族学研究部
藤井龍彦 先端民族学研究部
杉本良男 民族学研究開発センター (出版委員長)
押川文子 地域研究企画交流センター

平成 16 年 3 月 29 日発行 非売品

国立民族学博物館調査報告 50

編者 横山 廣子

発行 国立民族学博物館
〒565-8511 吹田市千里万博公園 10-1
TEL 06 (6876) 2151 (代表)

印刷 株式会社石田大成社
〒564-0062 吹田市垂水町 3-30-9
DK メディアビル
TEL 06 (6384) 1112

Senri Ethnological Reports

50

**The Dynamics of Cultures and
Society among Ethnic Minorities
in East Asia**

Edited by

Hiroko Yokoyama

**National Museum of Ethnology
Osaka 2004**

**ISSN 0387-6004
ISBN 4-901906-25-9C3039**